

琉球の方言 2巻 : 奄美大島宇検村湯湾方言

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

166

(発行年 / Year)

1976-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012853>

3. 文 法

概 説

湯湾方言の動詞 kakjun (書く) を分析して示すと、次の通りになる。

kakj u n

語基 語幹派生接尾辞 語尾

湯湾方言も含めて、奄美・沖縄方言の動詞の語形変化には、次の二種類がある。

(1) 語幹派生接尾辞の交替

(2) 語尾の交替

まず、語幹派生接尾辞の交替では、次の諸形式が派生される。基本となる kakjun も合わせ示しておく。

kakjun (書く。基本)

katʃë:n (書いてある。既存)

katʃan (書いた。完了)

katʃun (書いている。継続)

すなわち、u₁, ë:ɿ, a, u₂ の語幹派生接尾辞の交替によって、「基本」「既存」「完了」「継続」の諸アスペクトが表わされるようになる (u₁, u₂ はそれぞれ kakjun, katʃun の語幹派生接尾辞を示す。また、これら語幹派生接尾辞の本当の形、いわゆる base form はそれぞれ u₁r, ë:r, ar, u₂r で、上記の形は環境による異形である)。

上記4形式は各々がまた語尾交替を起こす。その語尾交替が起こると、次の諸活用形が構成される。kakjun と katʃun を例にとつて、学校文法の活用形と比較対照しやすい活用形のみを示す。接続する接辞は一で示す。

志向形 kako: (書こう)

katʃuro: (書いていよう)

未然形 kaka-n (書かない)

katʃura-n (書いていない)

条件形₁ kakaba (書かば)

katʃuraba (書いているならば)

条件形₂ kakiba (書けば)

katʃubba (書いていれば)

命令形 kaki (書け)

katʃuri (書いておれ)

連用形 kaki-jassan (書きやすい)

katʃui-jassan (書いていやすい)

終止形₁ kakjun (書く)

katʃun (書いている)

終止形₂ kakjui (書く)

katʃui (書いている)

連体形 kakjun-tʃu[?] (書く人)

katʃun-tʃu[?] (書いている人)

推量形 kakjuro: (書くだろう)

katʃuro: (書いているだろう)

上記語形変化の方法をみると、語基+語幹派生接尾辞で語幹を形成し、その語幹に語尾が結合して活用形を構成していることがわかる。すなわち、次頁の表の通り。

従つて、katʃë:n, katʃan も katʃë:ɿ, katʃa が語幹となつて、n の部分で諸種の語尾交替を起こすことになる。

上記の分析からもわかるように、語基には kak, kakj, katʃ の3形があらわれるが、kak が base form で他はその異形である。

また、kak 語幹と kakju₁r 語幹は通時的な成立過程は異にするが、共時的には共に「基本」を表わす。詳しくは「動詞の活用」で述べる。

以上が奄美・沖縄方言の動詞構造である。

活用形

語幹

語基

語幹派生接尾辞

語尾

kak	—	—	—	$\left\{ \begin{array}{l} o:(\text{志向形}) \ a(\text{未然形}) \ aba(\text{条件形}_1) \\ i\ ba(\text{条件形}_2) \ i(\text{命令形}) \ i_1(\text{連用形}) \end{array} \right.$
kakj	—	u ₁ r (注)	—	$\left\{ \begin{array}{l} n_1(\text{終止形}_1) \ i_2(\text{終止形}_2) \ n_2(\text{連体形}) \\ o:(\text{推量形}) \end{array} \right.$
kaɸ	—	u ₂ r (注)	—	$\left\{ \begin{array}{l} o:(\text{志向形}) \ a(\text{未然形}) \ aba(\text{条件形}_1) \\ ba(\text{条件形}_2) \ i(\text{命令形}) \ i_1(\text{連用形}) \\ n_1(\text{終止形}_1) \ i_2(\text{終止形}_2) \ n_2(\text{連体形}) \\ o:(\text{推量形}) \end{array} \right.$

次に、湯湾方言の動詞の活用で特徴的なことは、終止形に kakjun, kakjui 両形が用いられていることである。両者は意味・用法において微妙な差異を示す。

kakjun (書く) (イ)文の動作主の動作意志が認められると話し手が判断した場合に用いる。

(ロ)非習慣的・個別的な動作の表現

(ハ)主観性の強い表現

kakjui (書く) (イ)文の動作主の動作意志の有無には着目しない。

(ロ)習慣的・一般的な動作の表現

(ハ)動作の客観的な表現

古仁屋方言でも kakjum, kakjur (書く) が用いられていて、両者における意味・用法は、湯湾方言よりも比較的明瞭である。

形容詞の活用で特徴的なことは、ク活、シク活の区別が存していることである。ク活、シク活は -sa:n 語尾であるか -fa:n 語尾であるか

によって区別されている。

ク活, ta:sa:n (高い) hajasa:n (早い) nagasa:n (長い)

シク活, siɸa:fa:n (涼しい) ʔiɸugafa:fa:n (忙しい) miɸziɸa:fa:n (珍しい)

奄美・沖縄方言の動詞の活用形は kak 語幹を軸として成立する活用形(単純形式)以外はすべて派生構造形式(語基+語幹派生接尾辞+語尾)である。

この動詞の単純形式及び派生形式に諸種の助動詞が接続して構成する複合形式にも、一定の構造がある。その構造は次の通りである。

動詞	$\left(\begin{array}{l} \text{単純形式} \\ \text{複合形式} \end{array} \right)$	— 使役 — 受身 —	$\left\{ \begin{array}{l} \text{願望} \\ \text{容易} \\ \text{困難} \end{array} \right.$
肯定	— 時制 — 語尾		
否定			

湯湾方言の助動詞は次の通りである。

ʃun (す。使役) rin (れる。受身・可能)
ʈasa:n (たい。願望) jassa:n (しやすい。容易)

gurufa:n (しにくい。困難) nfo: jun (しなざる。尊敬) ʈagisa:n (しそうだ。様子)
won (です。ます。ていねい) n, ne:-nu (ない。否定) tē:n (仮想, 非時)

tan (た。時)

これらの助動詞が上記構造に従って具体的に承接していく方法は「派生・複合形式の内部構造」

の項で詳述する。

この複合形式における構成要素の配列構造は先島方言の中にもほぼ同じように認められる。従って、上記構造は琉球方言動詞述語の構造と称してもよい。

注、「語幹派生接尾辞＋語尾」に際し、次のような音韻交替が起こる。」

— r + n → — n

— r + i → — i

— r + ba → — Qba

湯湾方言

動詞の活用

1. 湯湾方言の動詞語形変化の諸形式と活用形

湯湾方言の動詞語形変化の諸形式を、「書く」を例にとって示すと、次の通りである。例は最少必要限度にとどめる。

kako: (書く) kaka ʃun (書かす)
kakaba (書かば) kakibo:, kakiba (書けば) kakī (書け, 命令) kakuna (書くな, 禁止) kaku gadi: (書くまで)
kaki ʈasa:n (書きたい) kakja gana: (書きながら) kakjun (書く)
kakjui (書く) kakjun ʈu (書く人)
dʒi: du kakjuru (字ぞ書く) kakjuro: (書くだろう) kakju mī (書くか)
kakjud do: (書くぞ) katʃi kkara
ʔikjo: (書いてから行こう) katʃe:ra
ʔikjo: (書いてから行こう) katʃē:n (書いてある) katʃē:i (書いてある)
katʃan (書いた) katʃa (書いた)
katʃun (書いている) katʃui (書いている)

「書く」を含めて、約35語の動詞の語形変化を調査し、それらの諸形式を比較考察した結果、たとえば、「書く」で例示すると、次のような諸形式が活用形と認定される。活用形の前後に接する形式は()に入れる。

志向形 kako: 未然形 kaka (ʃun)
条件形₁ kakaba 条件形₂ kakibo:, kakiba 命令形 kakī 禁止形 kakuna
限界形 kaku (gadi:) 連用形 kaki (ʈasa:n) 同時形 kakja (gana:)
終止形₁ kakjun 終止形₂ kakjui 連体形 kakjun (ʈu) 係結形 (dʒi: du) kakjuru
推量形 kakjuro: 準体形 kakju (mī) 強調形 kakjud (do:)
接続形₁ katʃi (kkara) 接続形₂ katʃe:-ra (ʔikjo:)

「書く」の語形変化の諸形式中、上記活用形と同列の活用形と認定しがたいものとして、次のような諸形式が残る。

katʃē:n (書いてある, 以下「既存₁」とする)

kaʈʂë:i (書いてある。以下「既存₂」とする)
 kaʈʂan (書いた、以下「完了₁」とする)
 kaʈʂa (書いた。以下「完了₂」とする)
 kaʈʂun (書いている、以下「継続₁」とする)
 kaʈʂui (書いている。以下「継続₂」とする)

これらの諸形式は「書く」の語基 kak に語幹派生接尾辞が結合して派生語幹を形成し、この派生語幹に、更に語尾(上記の場合は終止形語尾)が結合して成立した派生形式である。これらの諸形式は kakjun (書く)と同様、更に活用する。以下、活用形と派生形式との違いについて述べる。

奄美・沖縄方言の動詞の活用は先島方言(宮古・八重山)のそれに比較して、多少複雑をきわめる。しかし、その内部構造を仔細に分析・検討し、体系化してみると、かなり整然たる法則が見い出される。結論を先に示すと、その内部構造は「語基+語幹派生接尾辞+語尾」と記述することができる。語基+語幹派生接尾辞で語幹が構成され、その語幹派生接尾辞の交替によって、諸アスペクトが表現される。次に、語幹+語尾で各活用形が構成されて、そこで動詞の活用は一応成立をみるものと解される。

以上は奄美・沖縄方言の動詞活用の構造についての略述であるが、奄美・沖縄方言の動詞の終止形、湯湾方言の例で示せば、kakjun、kakjui (書く)も厳密な意味では派生形式と解すべきものであり、従って、その語尾が交替して形成される連体形、係結形、準体形、強調形も派生形式とみなされうるものである。

kakjun、kakjui をも含めた上記派生形式を前述した内部構造によって分析すると、次の通りになる。語幹派生接尾辞の表わすアスペクトを()の中に入れて示す。

語基	語幹派生接尾辞	語尾
kakj	u ₁ (基本)	n または i
kaʈʂ	ë: (既存)	n または i
kaʈʂ	a (完了)	n または ゼロ
kaʈʂ	u ₂ (継続)	n または i

上記分析からもわかるように、終止形 kakjun、kakjui (書く)の語幹派生接尾辞 u₁ の表わすアスペクトは「基本」とであると解するが、これについては後でもう少し詳しく述べたい。

上記派生形式を語基の方から検討してみると u₁ (基本)語幹派生接尾辞の前には kakj という語基があらわれる。先に認定した湯湾方言の活用形でいえば、終止形、連体形、係結形、準体形、強調形の各活用形がこの語基を共有していることになる。この語基(kakj)を「連用語基」、連用語基に u₁ 語幹派生接尾辞が結合して成立する語幹(kakju)を「連用派生語幹」と称する。この語基・語幹に「連用」を冠するのは、この語基・語幹が従来説かれてきているように、「書き(連用形)+居り」の融合過程から形成されたものであるとみるからである。次に、ë: (既存)・a (完了)・u₂ (継続)語幹派生接尾辞の前には kaʈʂ という語基があらわれる。この語基を「音便語基」、音便語基に ë:・a・u₂ 語幹派生接尾辞が結合して成立する kaʈʂë:・kaʈʂa・kaʈʂu の語幹を「音便派生語幹」と称する。この語基・語幹に「音便」を冠するのも、これらの語幹の成立がそれぞれ「書きてあり」「書きたり」「書きて居り」に関連するものとして従来説かれてきており、語基 kaʈʂ は「書きて」の融合過程から形成されたものであるとみるからである。

接続形 kaʈʂi、kaʈʂe:ra はこの音便語基 kaʈʂ に i または e:ra が結合して形成されたものであるが、この i または e:ra を語幹派生接尾辞とみ

活用形

語幹

語基	語幹派生接尾辞	語尾
kak 〔基本語基〕	— ゼロ (基本) 〔基本語基語幹〕	
kakj 〔連用語基〕	— u ₁ (基本) 〔連用派生語幹〕	— n または i
katʃ 〔音便語基〕	— i または ø: ra (のちどち) 〔音便派生語幹〕	
	— ë: (既存) 〔音便派生語幹〕	— n または i
	— a (完了) 〔音便派生語幹〕	— n または ゼロ
	— u ₂ (継続) 〔音便派生語幹〕	— n または i

るか、語尾とみるか問題である。現在のところ筆者はこれを語幹派生接尾辞であると同時に語尾でもあると解している。すなわち、kakʃi, kakʃe:ra は語幹であると同時にまた活用形でもあるとみる。これの表わすアスペクトは「のちどち」である。

以上は派生語幹であるが、これに対して「基本語基語幹」がある。先に認定した湯湾方言の活用形でいえば、志向形、未然形、条件形₁、条件形₂、命令形、禁止形、限界形、連用形、同時形の各活用形が共有する kak という語幹である。これは語幹派生接尾辞が結合していない語幹である。従って、kak はそれ自身でまた語基でもある。故に kak は語基語幹である。この語基語幹は語幹派生接尾辞が結合しないという点と、それゆえに、アスペクトにおいては無色の状態にあるという点で、他の「既存」「完了」「継続」に対しては、これこそまさに「基本」の名にあたいするものである。また、奄美・沖縄方言の動詞において真に単純形式と呼べるものは、この語基語幹を軸として成立する活用形のみである。ここでは、kak を語基としては「基本語基」、語幹としては「基本語基語幹」と称しておく。基本語基語幹が派生語幹の表わす「既存」「完了」「継続」に対して「基本」とであるとするならば、連用派生語幹も「基本」とであるというのはどういうことであるのかという問題もあるが、これについては後述する。

以上述べてきた語基・語幹どうし及び語基と語幹との相互関係を改めて整理して示すと、次の通りになる。

「書く」の語基に kak, kakj, katʃ の三種があるように見られるが、真の語基は kak で、kakj katʃ はこの環境による異形である。すなわち、kak は u₁ 語幹派生接尾辞と結合する際は kakj となり、i・ë:・a・u₂ 語幹派生接尾辞と結合する際には katʃ という形をとる。

さて、活用形と派生形式との違いであるが、まず、活用形について述べる。先に湯湾方言で活用形と認定したものは、語幹に、正確には基本語基語幹 kak と連用派生語幹 kakju に各種の語尾が結合して成立した諸形式のことであり、これらをここでは活用形と認定したのである。志向形から同時形までは基本語基語幹 kak を軸に成立した活用形であり、終止形から強調形までは連用派生語幹 kakju を軸として成立した活用形である。接続形だけは特殊で、これは音便派生語幹から成立している。そしてこれらの活

用形の代表となる終止形は連用派生語幹を軸として成立する kakjun である。この終止形と並置されるのが他の派生形式 kaŋjē:n, kaŋjan, kaŋjun で、kakjun を「基本」の終止形とするならば、これらはそれぞれ「既存」「完了」「継続」の終止形ということになる。従って、これらも kakjun とほぼ平行的に活用していく（詳しくは「派生形式 kaŋjun の活用」の項参照）

では、基本語基語幹を「基本」とみるならば連用派生語幹も「基本」とみるとみるのはなぜかということである。もともとこの両語幹は別々のアスペクトを表わしていたものと解される。結論から先に述べると、基本語基語幹こそ真の「基本」であり、連用派生語幹はもと「進行」を表わしていたものと解される。これは基本語基語幹と連用派生語とで形成される同じ活用形を比較すれば、きわめて明瞭になる。たとえば筆者の方言である沖縄本島本部町瀬底方言では基本語基語幹・連用派生語幹の両方で条件形と係結形が形成される。(i)は基本語基語幹を軸として成立する活用形、(ii)は連用派生語幹を軸として成立する活用形である。

条件形 (i) dʒi: hakaba ʃimusa (字を書くならばよい)

(ii) dʒi: hakuraba ʃimusa (字を書きつつあるのならよい)

係結形 (i) nu: ga haku: (なぜ書くのか)

(ii) nu: ga hakuru (なぜ書きつつあるのか)

(ii)の活用形には明らかに「進行」の意が認められる。

以上のように native speaker が深く内省し、よく観察すれば、連用派生語幹が「進行」を表わしていることは直ちに認知しえるものであるが、しかし、日常の言語生活では native

speaker でさえ気づかないのが実情である。

これはなにに起因しているかと言えば、やはり最も大きな要因は、基本語基語幹を軸として成立する活用形と連用派生語幹を軸として成立する活用形とが平行して存していないところにある。たとえば、上記瀬底方言の条件形、係結形の場合のように、両語幹を軸として成立する活用形が全く平行して存しておれば、あるいは少なくとも終止形だけでも平行的に存するならば、一方が「基本」であり、他方が「進行」を表わしているということはきわめて明確に認知できたはずである。しかし、実際には奄美・沖縄方言のほとんどがそうではなく、むしろ基本語基語幹と連用派生語幹とが相補う形で動詞の活用を成立させているのである。瀬底方言の場合も上記2形のみが平行して存しているだけで、他は相補う形をとっている。これが連用派生語幹の表わす「進行」のアスペクトを稀薄にせしめあるいは失なわせる大きな要因となっているのである。

基本語基語幹を軸として成立する活用形と連用派生語幹を軸として成立する活用形の中でひとつでも平行的に存在し、しかも後者の活用形に「進行」というアスペクトが認められるのであれば、基本語基語幹系列の活用形と連用派生語幹系列の活用形とは厳密に区別して記述すべきものであるかも知れない。筆者は以前そういう記述方法をとっていた。しかし、そうすれば平行的に存しない活用形の場合、たとえば終止形の場合「書きつつある」とすると native speaker の意識と合致しなくなる。他方、平行的に存する活用形でも、全く同じ意味を表わすものと記述すれば、これも正確な記述とはいえない。この基本語基語幹と連用派生語幹における以上のような問題は奄美・沖縄方言の動詞

活用体系がなんらかの形で統一整備されていくその過渡期の状態から生じてきているものと解される。

以上のような問題を有しながらも、ここでは一応基本語基語幹・連用派生語幹は他の「既存」「完了」「継続」に対しては、両語幹共に「基本」であると記述しておく。

基本語基語幹 kak, 連用派生語幹 kakju は音形は違っていても、共に「基本」を表わすために、この両語幹でもってはいじめて他の語幹、たとえば音便派生語幹 katju (継続) の持つ機能と同等の機能を発揮する。すなわち、kak, kakju を軸として成立する活用形と katju を軸として成立する活用形とはほぼ平行的に存している(「派生形式 katjun の活用」の項参照)。

以上活用形について述べてきたが、活用形とは前述した通り、語幹を軸として各種の語尾が交替して成立した諸形式のことである。これに対して、派生形式とは語基を軸として各種の語幹派生接尾辞が交替して成立する諸形式のことである。

奄美・沖縄方言の動詞の語形変化には、語幹派生接尾辞の交替と、語尾の交替とが含まれている。

2. 活用体系

奄美・沖縄方言の動詞の活用を記述するにあたっての必要条件は、基本語基語幹と連用派生語幹を軸として成立する「基本」の活用形を示し、これを体系化することである。残る「既存」「完了」「継続」の活用はほぼ「基本」のそれにそって活用していくからである。

第1表は湯湾方言の基本語基語幹 kak と連用派生語幹 kakju を軸として成立する活用形を整理・体系化して示したものである。以下、第

1表について説明する。

- (1) 各活用形のワクは次の方法によって決定してある。
 - (イ) 全体(35語)の語形変化を比較して、形とその表わす意味または職能が異なるものは別の活用形とする。
 - (ロ) 同形でも職能が明らかに異なるものは別の活用形とした。また、形は違っていても明らかに同じ意味または職能を表わすと解されるものは同一活用形とした。
- (2) この表では活用形を不変化部と変化部とに分析し、体系化してある。不変化部には語基が、変化部には語幹派生接尾辞・語尾が相当する。
- (3) 表では基本語基語幹を軸として成立する活用形(不変化部 kak 系列の活用形)と連用派生語幹を軸として成立する活用形(不変化部 kakj 系列の活用形)とがわかるように示した。また、「既存」「完了」「継続」の派生形式も位置づけてあるが、これはこれらの派生形式を知る便宜のためである。体系化するのであれば、縦に「基本」と並列して、終止形だけでなく全活用形を配すべきである。
- (4) 活用形の名称はその用法・職能があらゆる角度から明確にされるまでは数で番号を付した方が望ましいのかも知れないが、ここではさしあたって、現時点で明らかであるそれらの用法・職能の一部をとって便宜的に名称を与えることにした。また、活用形の配列も、学校文法の配列順に従いつつ、その前後にほぼ同形の活用形を配置したという程度である。但し、「既存」「完了」「継続」の派生形式は右端の末尾に位置づけることにした。
- (5) 活用の分類は次の方法による。
 - (イ) 変化部の交替の仕方

(e) 不変化の末尾子音の違い

その結果、活用の種類は大きくⅠ・Ⅱのふたつに分類される。「来る」とそれ以外の動詞という二分である。詳細は「活用の種類」の項で述べる。

- (6) 表示するにあたっては、撥音はN、促音はQで統一してある。また、変化部が長音である時、すなわち不変化部の末尾音が母音で、それと結合する変化部の頭音が、その不変化部の末尾音と同音である場合、変化部は長音となるが、このような場合、[:]と表示せず、直前の母音と同じ形で表示した。

- (7) 表中の「〃」記号は最上段の「書く」の変化部に同じという意味。「ー」記号は変化部がゼロで、不変化部が直ちに接辞に接していくことを意味する。「△」記号は今回の調査でその活用形が見い出しえなかったもの。その中には動詞本来の性質としてその活用形を有しえないと思われるもの、たとえば、ʔan（有る）の志向形なども含まれているが、あるいは時間をかけて調査すれば、見い出しうるものも含まれている。たとえば ʔan（有る）の同時形など。

3. 活用形

3.1. 志向形

ある動作を行なう方向へ意識が向けられる時に用いられる。その際、相手に同意を求めたりまた相手を勧誘する意を含めたりする場合もある。

madʒin dʒi: kako: ja（一緒に字を書こうよ）

kurī wag ga kako: je（これ私が書こうね）

kurī wag ga kako:（これ私が書こう）

kurī ja wag ga kako: kai（これは私が書くのか）

kaburaba tsirīti ʔikjo:（被ればつれていこう）

wanu m madʒig kamo:（私も一緒に食べよう）

ʔami nu Fubba ja jamīro:（雨が降ればやめよう）

kurī turo: je:（これ取ろうね）

wag ga turo: jo（私が取るよ）

ʔatʃa: ko: je:（明日来ようね）

この活用形の変化部は各動詞ですべて[0:]の形をとっている。

志向形は基本語基語幹を軸として成立する。
ʔikjun（行く）ʃinjun（死ぬ）kījun（切る）mjūn（見る）kūbijun（結ぶ）の志向形は音形は連用語基を軸として成立しているかのようにみえる。しかし、音形は連用語基にみえても、これは連用語基ではなく、基本語基の変化したもの（基本語基の異形）であろう。その変化は基本語基末尾子音の口蓋化としてあらわれているが、湯湾方言では子音の口蓋化現象はあるていどみられる。

ʃikjara（力） ʃikjasa:n（近い）
nigjasa:n（苦い）

また、この基本語基の異形化には連用語基への類推も働いているものと解される。

kaujun（買う）の志向形も特殊な形を示しているが、これについては「活用の種類」の項で述べる。

ʔan（有る）の志向形は用いられない。

3.2 未然形

この活用形の職能は次の通り。

- (1) ʃun（する。使役）に接続する。

dʒi: juma ʃun（字を読ます）

ʃiken ʔukīra ʃun（試験を受けさせる）

dʒi: kaka ʃun（字を書かす）

第1表

湯 湾 方 言 動 詞 活 用 体 系

分類			動詞	変化部		志向形	未然形	条件形 ₁	条件形 ₂	命令形	禁止形	限界形	連用形	同時形	終止形 ₁	終止形 ₂	連体形	係結形	推量形	準体形	強調形	接続形 ₁	接続形 ₂	既存 ₁	既存 ₂	完了 ₁	完了 ₂	継続 ₁	継続 ₂			
				不変化部																												
I. 1	I. 1. 1	1	書く	kak	o:	a	aba	ibo: iba	i	una	u	i																				
				kakj										a	uN	ui	uN	uru	uro:	u	uQ											
				katʃ																				i	e:ra	ë:N	ë:i	aN	a	uN	ui	
		1イ	行く	?ik				"	"	"	"	"																				
				?ikj	"	"	"						"	"	"	"	"	"	"	"	"											
				?idʒ																			"	"	"	"	"	"	"	"	"	
		2	漕ぐ	kug	"	"	"	"	"	"	"	"																				
				kugj									"	"	"	"	"	"	"	"	"											
				kudʒ																			"	"	"	"	"	"	"	"	"	
		3	殺す	kuQs	"	"	"	"	"	"	"																					
				kuQʃ									"	"	"	"	"	"	"	"	"											
				kuQʃʃ																			"	"	"	"	"	"	"	"	"	
		4	立つ	tat	"	"	"		"																							
				tats				"		"	"																					
				taʃʃ								"	"	"	"	"	"	"	"	"	"											
				taQʃʃ																			"	"	"	"	"	"	"	"	"	
		5	飛ぶ	tub	"	"	"	"	"	"	"	"																				
				tubj									"	"	"	"	"	"	"	"	"											
				tud																		"	"	"	"	"	"	"	"	"		
		6	死ぬ	fin					"																							
				fi				Nbo: Nba		Nna	N	N																				
				finj	"	"	"						"	"	"	"	"	"	"	"	"											
				fidʒ																		"	"	"	"	"	"	"	"	"		
		7	読む	jum	"	"	"		"																							
				ju				Nbo: Nba		Nna	N	N																				
				jumj										"	"	"	"	"	"	"	"											
				jud																		"	"	"	"	"	"	"	"	"		
		8イ	取る	tur	"	"	"		"																							
				tu				Qbo: Qba		Nna	Q	"																				
				tuj									"	"	"	"	"	"	"	"	"											
				tut																		"	"	"	"	"	"	"	"	"		
		8ロ	眠る	niʃur	"	"	"		"																							
				niʃu				Qbo: Qba		Nna	Q	"																				
				niʃuj									"	"	"	"	"	"	"	"	"											
				niʃ(F)ut																		"	"	"	"	"	"	"	"	"		

[illegible]

kurī ʔututu ɣ kaka so: ja (これ弟に書
かそうね)

ʔurī ja fuka n ʔu kaka so: ja (それは
他の人に書かそうね)

(2) rīn (れる, 受身・可能)に接する

ʔu n tamma rīn (人に頼まれる)

kurī ʃi kaka rīn (これで書くことができ
る)

warabī nin warawa rī sīga (子供にも笑
われる)

Fumīʔi sīra ran (暑くてかなわない)

Fumīʔi は Fumīʔi になる場合もある。

(3) n (ない, 否定)に接する。

nan nja katʃi n wan na kaka n do:

(あなたは書いても私は書かないぞ)

tutin ʔanʔu ja kaka n do: (とてもあの
人は書かないぞ)

ʔura hadʒimu ja kaka n ʔi ʔiʔuti nuga
kakju ssuga na (お前ははじめは書かない
と言っていたが、どうし
て書けるのになあ)

kutʃe: ʔikja n (殺してはいけない)

kurī ja na ga kaka mba ʔikja n

(これはあなたが書かなければいけない)

ʔikja n tam mun dʒa ja: (行かないのだ
ね)

kurī n wa:ra n ne:n ʃutī nu:ga wa:jui
(これもわからなくてなにがわかるか)

mitʃam bam wa:ra n (見たけれども、わ
からない)

wunagu nu ʃi:kiɟum mun ʔura ja ʃi:ki-
ja n na (女ができるのにおまえはできない
のか)

midzī n numa n na (水も飲まないか)

ʔura ja ko: n ta (おまえは来なかった)

nama gadi: matʃutig ko: n (今まで待
っても来ない)

(4) nna (要求)に接する。

nna はもともと「～しないか」と相手に尋ね
る意があったが、やがて「～してくれ」という
要求を表わすようになり、時には軽い命令の意
も表わすようになっている。

ʔura ga kaka nna (おまえが書いてくれ)

ʔura ɣ kawa nna (おまえも買いなさい)

katʃi kurira nna (書いてくれ)

ʔura ja ji:Fun kaggi:ra nna (おまえは
よく考えなさい)

kag ko: nna (ここへ来なさい)

未然形の変化部は、各動詞で次のようにあら
われる。

[O]; (Ⅱ)

[a:]; (Ⅰ・Ⅰ.1の8)(Ⅰ.2の3)

[a]; 上記以外の動詞類

未然形も基本語基語幹を軸として成立する。
そして志向形同様 ʔikjun (行く) ʃinjun (死
ぬ) kiɟun (切る) mjun (見る) kubiɟun
(結ぶ)ではそれらの未然形は基本語基の異形
を軸として成立している。

kaujun (買う)の未然形は ʃun (使役)
rīn (受身・可能)に接する時は kawa で、n
(否定), nna (要求)に接する時は kaura
である。kaura については「活用の種類」の項
で述べる。

ʔan (有る)の未然形は見出しえなかった。

3.3 条件形₁

仮定条件を表わす。

wag ga kakaba ʔura ja mirī jo: (私が
書かばおまえは見なさい)

kaburaba tsirīti ʔikjo: (彼らば連れて
いこう)

ʔura ga ka:ba ja wan na ba: (おまえが
買わば私はいや)

wara:bbo: jitʔan (笑わばよい)

ʔagga ku:ba ja wa:jum mun (彼が来れ
ばわかる)

変化部は各動詞で次の通り。

[u:ba]: (Ⅱ)

[a:Qbo:]; (Ⅰ.2の1)

[a:ba]; (Ⅰ.2の3)

[aba]; 上記以外の動詞類

Ⅰ.2の1 warajun (笑う)に wara:bbo:, wara:ba の両形があらわれるのが特徴的である。次の条件形₂では ~bo:, ~ba の形は各動詞で整然と併用されているが、条件形₁では warajun だけにあらわれる。あるいは、もとの条件形₁にもこの両形は併用されていたが、~bo: の形は次第に用いられなくなり、warajun 等の一部の動詞にその痕跡をとどめているのかも知れない。この ~bo: と ~ba は同じ条件を表わすものとみているが、緻密に調査すれば、用法上の違いが出るのかも知れない。もし、そうであるなら、別々の活用形とすべきであるが、さしあたって、ここでは条件形₂としてまとめておく。この ~bo: は ~ba と深い関係を有するであろうが、その成立過程は今のところ明らかにしえない。

条件形₁も基本語基語幹を軸として成立しているが、次の動詞類においてはその異形を軸として成立している。

ʔikjun (行く) ʃinjun (死ぬ) k²ijun
(切る) mjun (見る) k²ubijun (結ぶ)

3.4 条件形₂

確定条件を表わす

nag ga kakiba ja wag ga jumid do:
(あなたが書いたら私が読むぞ)

nag ga kakiba ja jitʔam ban (あなたが
書いたらよいのに)

kuma nag kakiba ja ʔikja n do: (ここ
に書いたらいけないぞ)

kakibo: jitʔan (書けばよい)

ʔura ga waraiba ja kurijud do: (おま
えば笑えばあげよう)

ware:bo: jitʔam bam (笑えばよい)

ʔuttu jatin wubba ja tsiriti ko:nna
(弟でも居たらつれてきなさい)

ganʃi ʔitʃin wasiribba ja tadaʃʃi: ja
ʔukan (こんなに言って忘れてもしたらただで
はおかない)

nama tatsiba ja maniuʔun (今立てば間
に合う)

ʔami nu Fubba ja jamiro: (雨が降れば
やめよう)

wanu n ʔikiba ʔura ʔ ko:nna (私も行
くからおまえも来なさい)

ʔumig kja: ʔikibo: jurusa n do: (海な
どへ行ったら許さないぞ)

変化部は各動詞で次のようにあらわれる。

[i:bo:]; (Ⅱ)

[u:bo:]; (Ⅰ.2の3)

[i:Qba]; (Ⅰ.2の2)

[a:Qbo:]; (Ⅰ.2の1)

[Qbo:]; (Ⅰ.1.1の8イ, 8ロ, 8ハ,

8ニ, 8ホ, 8ヘ, 8ト)

(Ⅰ.1.2の1, 2)

[Nbo:]; (Ⅰ.1.1の6, 7)

[i:bo:]; 上記以外の動詞類

3.5 命令形

命令を表わす

?ura ga kakī (お前が書け)

kaki ũasa:bba kakī (書きたければ書け)

?uma nan jirī (ここへ坐れ)

?uja nu ?i: jun tu: i siri (親の言う通り
にしろ)

dzassiga jo: d3in siri tʃe: ?iũa
ssigana (だから用心しろと言ったのだが)

kaŋ ko: (ここへ来い)

?are: nfo: ri (洗って下さい)

ũa: miſo: ri (お茶を召しあがって下さい)

変化部は各動詞で次のようにあらわれる。

[o:] ; (Ⅱ)

[ai] ; (Ⅰ.2の1)

[i] ; 上記以外の動詞類

kaujun (買う)の命令形 kauriについては
後述する。

3.6 禁止形

禁止を表わす

kunna: d3i kakuna jo: (ここに字を書くな
よ)

ũu nu mun d3aŋ kara tunna jo: (人のも
のだから取るなよ)

kusa: tunna (草を取るな)

?agga d3i: kaũubba ja ?abinna (彼が字
を書いている時は呼ぶな)

?aragkutu ja ju: na (うそをつくな)

変化部は各動詞で次のようにあらわれる。

[i: na] ; (Ⅰ.2の1)

[uNna] ; (Ⅰ.2の2)

[u: na] ; (Ⅰ.2の3)(Ⅱ)

[Nna] ; (Ⅰ.1.1の6,7,8イ,8ロ,8ハ,
8ニ,8ホ,8ヘ,8ト)

(Ⅰ.1.2の2)

[una] ; 上記以外の動詞類

kaujun (買う)の禁止形は kauruna→
kaunnaと成立したものである。語基 kaur に
ついては後述する。

?an (有る)の禁止形はあらわれない。

3.7 限界形

gadi (まで)に接続する

wap ga kaku gadi: ?ura ja ko: n ta
do: (私が書くまでおまえは来なかったぞ)
ts'iki nu ?aga ggadi: hatarakjun (月が
あがるまで働く)

変化部は各動詞で次のようにあらわれる。

[au] ; (Ⅰ.2の1)

[Q] ; (Ⅰ.1.1の8イ,8ロ,8ハ,8ニ,
8ホ,8ヘ,8ト)

(Ⅰ.1.2の1,2)

[N] ; (Ⅰ.1.1の6,7)

[u:] ; (Ⅰ.2の3)(Ⅱ)

[u] ; 上記以外の動詞類

3.8 連用形

職能は次の通り。

- (1) ũasa:n (～したい) ũagisa:n (～し
そうだ) guriſa:n (～しにくい)
jassan (～しやすい) nfo: jun (～し
なさる)等へ接する。

d3i: kaki ũasaja: (字を書きたいよ)

kurī ja wap ga kaki ũasa (これは私が
書きたい)

?ama kaũi ?iki ũagisa:n (向こうへ行き
そうだ)

kuma kaũi ki: ũagisa:n (ここへ来そう
だ)

kun ti ſi ja d3i: nu kaki gurufa:n
(この手で字が書きにくい)

kun ti ſi ja d3i: ja kaki jassa: do:

(この手で字は書きやすいぞ)

dʒi: kaki nfo: jun (字をお書きになる)

(2) gja: (に) ja (は) n (も) bē: i (ばかり) 等へ接する。

kaki gja ʔikjun (書きに行く)

ʔura ga tui gia funto: (おまえが取るべきだ)

dʒi: ja jun na ʃum baŋ kaki ja sura n do: (字は読みはしても書きはしないぞ)

jumi n sura mba kaki n sura n (読みもしないが書きもしない)

jun na sura n neŋ kaki bē: i ʃun (読みはしないが、書きばかりする)

(3) 次のような用法もある。

ʔidʒai tʃai ʃi: jabba (行ったり来たりする)

futai haritai ʃi: jabba (降ったり晴れたりする)

変化部は各動詞で次のようにあらわれる。

[i] ; (I. 1.3)

[e] ; (I. 2 の 1)

[ui] ; (I. 2 の 2)

[N] ; (I. 1.1 の 6, 7)

[i:] ; (II)

[i] ; 上記以外の動詞類

I. 1.1 の 8 ト hē: jun (起きる) においては不変化部が直ちに接辞へ接していく。

3.9 同時形

gana: (ながら) gaʃina: (ながら) に接する。

dʒi: kakja gana: (gaʃina:) kagg̃i:-ro: (字を書きながら考えよう)

kakja gaʃina: judun (書きながら読んでいく)

ʔaikja gaʃina: jumun (歩きながら読む)

dʒi: kakja gaʃina: natʃi du wubba (字を書きながら泣いているんだね)

変化部は各動詞で次の通り。

[a:] ; (I. 1.1 の 8 ニ) (I. 2 の 3) (II)

[a] ; 上記以外の動詞類

ʔan (有る) の同時形は見出しえなかった。同時形の不変化部も連用語基と形を全く同じくしている。しかし、これも連用語基ではなく、やはり基本語基の異形である。この活用形は「kaki (連用形) + ja (係助詞ハ)」が融合したもので、本来は基本語基を軸として成立する活用形なのである。gaʃina: (ながら) は共通語の「がてら」に対応するもので、「ながら」とは直接対応しない。

3.10 終止形₁ 終止形₂

文の終止に用いられる。八重山の川平方言でもふたつの終止形があらわれるが、湯湾方言でも2形併用されている。湯湾方言だけでなく奄美方言では一般にふたつの終止形が用いられている。奄美方言におけるこのふたつの終止形は一見同じ意味・用法を表わしているように見えながらも、しかしまた微妙に使い分けられているらしいことが推察された。この違いについて湯湾方言ではあまり明確になしえなかったが、話者から次のような情報を得ることができた。

dʒi: kakjun (字を書く。終止形₁)

現に「字を書く」という動作をみて確認した場合に kakjun を用いる。

dʒi: kakjui (字を書く。終止形₂)

現に「字を書く」という動作をみていなくても、一般的に言う場合に kakjui を用いる。

瀬戸内町古仁屋方言ではこの違いがより明確になる。当方言では次のように用いられている。

dʒi: kakjum (字を書く。終止形₁)

(イ)「ある動作を行なう」という話し手の決意

が含まれる。

(㉔)非習慣的・個別的な動作の表現

(㉕)主観性の強い表現。

dʒi: kakjur (字を書く, 終止形₂)

(㉖)客観的な動作の表現

(㉗)習慣的・一般的な動作の表現

(㉘)話し手の意志は含まない。

以上は四本武俊氏 (81 歳) の内省による情報である。終止形にふたつの形があるということは、たとえば、客観的な事象を異なるふたつの面から表現することが可能のようである。たとえば、「太陽が沈む」ことをふたつの終止形を用いて表現すれば、次の通りになる。

tida ga ʔirjum (終止形₁)

太陽が自分の意志で入る意が表現され、太陽が擬人化される。

tida ga ʔirjur (終止形₂)

太陽が沈むという客観的事実の表現。

以上は古仁屋方言の話者四本氏個人の内省によるものであるが、これがどれほどの客観性を有しえるのかということについての調査はまだである。しかし、少なくとも両終止形の間には微妙なニュアンスの違いがあるらしいということは湯湾・古仁屋両方言の話者の内省からうかがうことができる。但し、日常の言語生活では両終止形はごく普通に同一文の中でも併用される。

さて、この終止形₁ から強調形までの各活用形は連用語基 kak または連用派生語幹 kakju を軸として成立する。

湯湾方言における用例は次の通りである。

同一文で終止形₁・終止形₂ どちらも用いられる場合は後者は () の中に入れて示す。

dʒi: kakjun (kakjui) (字を書く)

ʔag ga kakjun (kakjui) (彼が書く)

ʔag kwa ja honun jumba dʒi: ʔ kakjun
(kakjui) (あの子は本も読むし字も書く)

kaki gja ʔikjun (ʔikjui) (書きに行く)

wag ga ʔikjun (私が行く)

ʔuja tu madʒin ʔikjun (親と一緒に行く)

ʔari ga ʔikjun ʔu ʔitʃan (彼が行くと言
った)

wa:kja ja: ʔi mudujun (私達の家へ戻る)

kī n juda nu karipun (木の枝が枯れる)

midzi bē:i numjun (水ばかり飲む)

suē: ja numjum bam hatarakkja: ʃun
(酒は飲むけれども働きはする)

na:sigu tubui jo: (もうすぐ飛ぶよ)

haku ja kī ʃi tsʔikui (箱は木で作る)

hama nti ʔasubjui (浜で遊ぶ)

ʔatu na:n ʔui gga: no:i (あとに一人だ
けが残る)

変化部は各動詞で次の通り。

[N, i] ; (I.1.2 の 1, 2)

[u:N, u:i] ; (II)

[uN, ui] ; 上記以外の動詞類

[] の中は前が終止形₁ 変化部で後が終止形₂ 変化部である。

3.11 連体形

体言に接する。また ʔi:ʃi (ために) hadzi (はず) i:da (間) kara (から, 理由) 等に接する。

kakjum mun na nu:ga (書くものはなにか)
dʒi: kakjug kutu ja jasuka mun (字を
書くのはやさしい)

dʒi: kakjun ʔi:ʃi dariti (字を書くため
に疲れる)

wag ga kakjun i:da ja matʃuri jo:

(私が書く間待っておれよ)

ʔag ga kakjun hadzi (彼が書くはず)

kurī ja wag ga kakjug kara nan ja
 kaka ntin jitŋa do: (これは私が書くから
 あなたは書かなくてよいよ)
 kurī ja wag ga kakjug kutu nu dikijun
 (これは私が書くことができる)
 na: jagati kakjun turo: ja tan (もうや
 がて書くところであった)
 ʔuidʒi ʔikjug kutu nu dikijun (泳いで
 行くことができる)
 ʔan ŋu ne: nŋi hatarakjun ŋu ja wuran
 (あの人のように働く人はいない)
 hajaku tujun ŋu nu mun dʒa (早く取る
 人のものだ)
 ʔututu ja ʔitsi kju: m mug kai (弟は
 いつくるのかしら)
 kuma nan ʔam munui (ここにあるのか)
 ʔari: ja: nan wum munui (彼は家に居る
 かしら)
 ʔari ʔikjum mug kai (彼は行くかしら)
 ʔari ga tumitum mun na nu: kai (彼
 がさがしているのはなにか)
 wututui ŋam mun daro: (おとといきたん
 だろう)
 du (ぞ) の結びとなる。
 ʔatŋa du kju: n (明日ぞ来る)
 wan na dʒi: du katŋun (私は字ぞ書く)
 上記文例にもよく用いられているように、
 kai (かしら) という助詞は体言を承けて
 疑問文をつくる。
 kurī nu: ŋ kai (これはなにかしら)
 kurī ta: mug kai (これは誰のものか
 しら)
 kurī kai ʔari kai durī kai (これ
 かあれかどれか)
 連体形の変化部は各動詞で次のようにあらわ

れる。

[N] ; (1.1.2の1,2)

[u: N] ; (II)

[uN] ; 上記以外の動詞類

3.12 係結形

ʔikjaŋiŋa (どのようにして)とか
 tagga (誰が)等のような疑問詞または代名
 詞の不定称の結びとなる。

ʔikjaŋiŋa dʒi: ja kakjuru (どのよう
 にして字は書くのか)

ʔikjaŋiŋa ʔikjuru (どのようにして行
 くのか)

ʔura ja da: ŋiga ʔikjuru (おまえはどこ
 へ行くのか)

kurī tag ga kakjuru (これは誰が書くの
 か)

kun ʔju: ja nidan na ʔikjassa ŋuru
 (この魚は値段はいくらするのか)

da: naggja ʔak kai (どこにあるのか。ʔak
 は ʔaru の ru が促音化している)

nan nja ʔikjaŋiŋa ʔukuritaru (あなた
 はどうして遅れたのか)

また、この係結形も du (ぞ) の結びとなる
 tudʒi nu kinju du nahatabi ŋuru (妻は
 昨日ぞナハへ旅立った)

この係結形の末尾音 -ru は時には -r と発音
 される場合がある。

連体形も係結形も du (ぞ) の結びとなると
 ころから、もともとこの両形は同じ形ではなか
 ったかと思われる。kakjuru (書く・係結形)
 → kakjun (書く・連体形) の変化を辿った可
 能性がある。従って、もと連体形も kakjuru
 だったのかも知れない。

この活用形の変化部は各動詞で次のようにあら
 われる。

[u:ru] ; (Ⅱ)

[uru] ; 上記以外の動詞類

ʔan (有る) wun (居る) では係結形はい出しえなかった。

3.13 推量形

推量を表わす

ʔag ga kakjuro: (彼が書くでしょう)

ʔag ga kakju taro: (彼が書いたでしょう)

kurī ja ʔag ga kakjuro: (これは彼が書くだろう)

変化部は各動詞で次の通り。

[u:ro:] ; (Ⅱ)

[uro:] ; 上記以外の動詞類

3.14 準体形

職能は次の通り。

(1) mī (尋問) に接する。

naḡ ga kakju mī (あなたが書くか)

naḡ ga ʔikju mī (あなたが行くか)

ʔura ja ʔikju mī ʔikja mī (おまえは行くか行かないか)

ʔura ja tuju mī (おまえは取るか)

(2) tan (過去) に接する。

ʔarī ja dʒi: kakju tan (彼は字を書きつつあった)

(3) tē:n (仮想) に接する

tē:n が接すると、常にその基底には「もし～ならば」という仮定がこめられている。従って、時には「～したにちがいない」という意になる場合もある。

na: jagati kakjutē:n turo: jatan (もはやがて書くところであった)

(4) 次のような用法もある。

Futʃu n warabī n ʔippai wu ssīga
(大人も子供も沢山います)

変化部は各動詞で次の通り。

[u:] ; (Ⅱ)

[u] ; 上記以外の動詞類

ʔan (有る) wun (居る) では不変化部が直ちに接辞へ接していく。ʔatan (あった)
ʔatē:n (あったにちがいない) wutan (居た)
wutē:n (居たにちがいない)

3.15 強調形

do: (ぞ) に接し、動作の意を強める。

kurī ʔag ga kakjud do: (これは彼が書くぞ)

wag ga kakjud do: (私が書くぞ)

wag ga kugjud do: (私が漕ぐぞ)

ʔututu ja ja: nandʒu wud do: (弟は家に居るぞ)

wag ga mjud do: (私が見るぞ)

ʔagan ʔikiba ja ʔo:sa rīd do: (あそこへ行ったら叱られるぞ。助動詞「受身」の強調形)

変化部は各動詞で次の通り。

[Q] ; (I.1.2の1,2)

[uQ] ; 上記以外の動詞類

3.16 接続形₁ 接続形₂

接続形₁ は共通語の「～して」に対応し、接続形₂ は共通語の「～してから」に対応する。接続形₁ の変化部は表では i に統一して示してあるが、実際には i と ī をゆれていて安定しない。すなわち同一語でも時には i と発音したり ī と発音したりする。たとえば、

katʃī または katʃi (書いて)

tatʃī または tatʃi (立って)

ʔatr または ʔati (あって)

ts²īrītī または tsīrītī (つれて)

接続形₂ は kakitekara (書いてから) →

katʃikara → katʃihara → katʃiara →

katʃe:ra の変化を辿ったものと推定される。

dʒi: katʃi ʔikjo: (字を書いて行こう)
 ʔare: wakatuti jusura n (彼は知っていて教えない)
 ʔan tʃu: ja wakatuti jusuti kʉrɪra n
 (あの人はわかっていて教えてくれない)
 kju: du naha kara mudutɪ tʃʌn (今日
 ナハから帰ってきた)
 naha ʔidʒi ko: je (ナハまで行って来よう
 ね)
 dʒi: katʃe:ra ʔikjo: (字を書いてから行
 こう)

この接続形以下の諸形式はすべて音便語または音便語幹を軸として成立する諸形式で、「既存」「完了」「継続」の諸形式は活用するものである。接続形は語幹即活用形の特殊な構造を有している。

変化部は各動詞で〔i (または i), e:ra〕で違いは示さない。

3.17 既存₁ 既存₂

あることが既に行なわれて、その結果が存していることを表す。

既存₁ と既存₂ の用法上の違いは終止形₁ と終止形₂ の違いと平行的であると推定されるが次の「完了」と共に、これについての精密な調査はまだである。

kuma nan dʒi: katʃe:n (katʃe:i) (ここに字が書いてある)

kusa: ba tutɛ:n (草をとってある)

変化部は各動詞で〔ɛ:N, ɛ:i〕で違いはない。

ʔan (有る) wun (居る) ではこの形は見出しえなかった。

3.18 完了₁ 完了₂

動作の完了を表す。

nama dʒi: katʃan (katʃa) (今字を書いた)

kusa: ba tutan (草を取った)
 na: hɛ:ta kamo (もう起きたかも知れない)
 tʃu muke: ga ʔidʒan (人を迎えに行った)
 ʔinu ŋ kʷatta (犬にかまれた)
 habu ŋ kʷatta (ハブにかまれた)
 tɪŋ kara ʔotɪtɪ tʃʌn (天から落ちてきた)
 jambaru ntɪ mʔarɪtan (山原で生れた)
 na: katʃa kkamo (もう書いたかも知れない)
 変化部は各動詞〔a N, a〕で違いはない。
 ʔan (有る) wun (居る) ではこの形は見出しえなかった。

3.19 継続₁ 継続₂

動作の継続を表す。継続₁ と継続₂ の用法上の違いは、話者の内省によれば終止形₁ と終止形₂ の違いとほぼ平行的であるとのことである。

ʔaŋ kʷa ja dʒi: katʃun (katʃui) (あの子は字を書いている)

wanu ŋ katʃun (katʃui) (私も書いている)

dʒi: katʃun (katʃui) (字を書いている)

tatʃuti judun (judui) (立っていて読んでいる)

kusa: ba tutun (草を取っている)

na: hɛ:tun (もう起きている)

na: hataratʃun (もう働いている)

変化部は各動詞で〔u N, ui〕で変化はない。

ʔan (有る) wun (居る) の「継続」は見出しえなかった。

4. 活用の種類

4.1 I. 1.1 類

I. 1.1 類は、動詞によって多少異なるが、変化部が〔O:, a, aba, ibo: iɪba, i, una, u, i, a, uN, ui, uN, uru, uro:, u,

uQ, i, e:ra, ë:N, ë:i, aN, a, uN,
ui] とあらわれる動詞類である。

その下位分類した1～8までについて述べると、1はいわゆるカ行四段動詞が所属する。

hatarakjun (働く) 等である。そのカ行四段の中でも ?ikjun (行く) は少々違いを示す。

従ってこれを1イと分類した。2・3・4・5は各々いわゆるガ行・サ行・タ行・バ行四段動詞が所属する。6・7は各々いわゆるナ行・マ行四段動詞が属するが、条件形₂、禁止形、限界形、連用形において、変化部の頭音がNになる点で5までの動詞類とは多少異なりを示す。これらの活用形は次のような音韻交替が起きた結果成立したものと解される。

条件形₂ finïbo:(ba) → finbo:(ba)
 (死ねば)

 jumïbo:(ba) → junbo:(ba)
 (読めば)

禁止形 finuna → finna (死ぬな)

 jumuna → junna (読むな)

限界形 finu → fin (死ぬ)

 jumu → jun (読む)

連用形 fini → fin (死に)

 jumi → jun (読み)

「死ぬ」「読む」の上記活用形は本質的には左項の形で、それが現象化する際に右項の形をとるものと解される。従って、6・7の動詞も本質的には kakjun (書く) 等と同じ活用をする。kamjun (食う) は7に属して活用する。

8イから8トまでの動詞類は、条件形₂、禁止形、限界形においてこれまでの動詞類と形を異にしている。但し、これらも次のような音韻交替が起きた結果成立したものと解される。

条件形₂ turïbo:(ba) → tuQbo:(ba)
 (取れば)

nïburïbo:(ba) → nïbuQbo:
(ba) (眠れば)

[?]kirïbo:(ba) → [?]kiQbo:(ba)
(切れば)

 mirïbo:(ba) → miQbo:(ba)
(見れば)

[?]kubirïbo:(ba) → [?]kubiQbo:
(ba) (結べば)

 sïrïbo:(ba) → siQbo:(ba)
(すれば)

 hë:rïbo:(ba) → hë:Qbo:
(ba) (起きれば)

禁止形 turuna → tuNna (取るな)

nïburuna → nïbuNna (眠るな)

[?]kiruna → [?]kiNna (切るな)

 miruna → miNna (見るな)

[?]kubiruna → [?]kubiNna (結ぶな)

 sïruna → siNna (するな)

 hë:runa → hë:Nna (起きるな)

限界形 turu → tuQ (取る)

nïburu → nïbuQ (眠る)

[?]kiru → [?]kiQ (切る)

 miru → miQ (見る)

[?]kubiru → [?]kubiQ (結ぶ)

 sïru → siQ (する)

 hë:ru → hë:Q (起きる)

従って、これらもまた本質的には kakjun (書く) 等と活用を同じくするものと解される。

8イ・8ロはいわゆるラ行四段動詞が属する。kïjun (蹴る) kajun (刈る) は8イに、kabujun (被る) は8ロに属している。8イ・8ロは全く同じ活用で区別するほどのこともないが、たゞ8ロの動詞においては音便語基の2拍目のb音がFに交替する場合があるので区別しておいた。

第1表で nib (F)utとしてあるのはそういう意味である。

8ハはいわゆる上一段動詞が主に属している。8イ・8ロと区別されるのは、志向形・未然形・条件形₁の変化部が基本語基の異形と結合する点である。nijun (煮る) jijun (坐る) k²ijun (着る) が8ハに属して活用する。

8ニは連用語基に mij と i 母音が脱落して合拗音化した mj とがあらわれる点で8イ～8ハと区別される。但し、これも8ハと同じ型とみてよいほど8ハとそれほど異なるものではない。

8ホは8ハ・8ニとほぼ同じ活用をしながらも、命令形を構成する基本語基語幹 k²ubir の末尾音 ir が脱落して k²ub となる点で、両者と異なる。

8ヘは8イとほぼ同じ活用を示しながらも、連用語基と音便語基とが全く同じ形をしている点で後者と異なる。

8トも8イとほぼ同じ活用をするが、連用形において不変化部が直ちに接辞に接していく点で後者と異なる。8トには ?utijun (落ちる) ?uk²ijun (受ける) ?ag²ijun (上げる) 等の下一段動詞が属している。

以上が 1.1.1 類の動詞である。

4.2 1.1.2 類

1.1.2 類が 1.1.1 類と区別されるところは、終止形₁ から強調形までの活用形の変化部において、その変化部の初めに u を有しない点である。これはこのふたつの動詞においては連用派生語幹が存しないことを意味する。すなわち、?an (有る) wun (居る) が「連用形+居り」から構成されていないのである。そのために、他の動詞では連用語基に結合している変化部がこのふたつの動詞では基本語基と結合している。

また、既存・完了・継続の派生形式もこのふたつの動詞ではあらわれない。以上の点でこのふたつの動詞はこれまでの動詞類と大きく区別される。

また、?an (有る) は動詞の性質上、志向形未然形があらわれない点で wun (居る) と区別される。

4.3 1.1.3 類

この類に属するのは ts²immjun (包む) 1 語である。これは連用形の変化部が i となる点で、これまでのものとは区別される。

4.4 1.2 類

1.2 類はいわゆるワ行四段動詞が所属する。これらの動詞は条件形₁ から連用形までの変化部がこれまでの動詞類と異なる形を示している。これは基本語基語幹の末尾音 w → 脱落の結果あらわれたものである。たとえば、次の通り。

条件形 ₁	warawabo: (ba) → wara:bo: (ba) (笑わば)
	kawaba → ka:ba (買わば)
	?iwaba → ?ja:ba (言わば)
条件形 ₂	warawibo: (ba) → wara:iQbo: (ba) → ware:Qbo: (笑えば)
	kawibo: (ba) → ka:iQbo: (ba) (買えば)
	?iwibo: (ba) → ?iu:bo: (ba) → ?ju:bo: (ba) (言えば)
命令形	warawi → warai (笑え)
	kauri について後述する
禁止形	warawina → war:i:na (笑うな)
	kaunna については後述する。
	?iuna → ?ju:na (言うな)
連用形	warawi → warai → ware: (笑い)
	warajun (笑う) の禁止形の変化部の頭音が i となって、他の動詞が u であるのとは少々異

にしているが、しかし、*i*と*u*は調音点が近似しているので、両者の交替は比較的容易に行なわれるものと解される。

以上のようにみてくると、これらの動詞は活用において本質的には I.1 類とほぼ同じであることがわかる。

更に、この類の中では *kaujun* (買う) の基本語基に *kaur* があらわれるのが注意を引く。志向形、未然形、命令形の変化部はこの語基と結合している。この *kaur* の成立過程については、次のように推定される。すなわち、*kaujun* の連用形は *kawi* である。この *kawi* が時には *kau* と発音されたであろう。そうなると I.1.1 類の 8 イ *tujun* (取る) の連用形 *tui* ときわめて類似してくる。そこで活用の型をこれに類推し、*tujun* (取る) の基本語基が *tur* であるところから、*kaujun* の基本語基にも *kaur* を生成せしめたのではなかろうか。禁止形も、*kauruna*→*kaunna* と成立したものと解される。

この *kaur* の形を基本語基に有する点で *kaujun* の動詞類は *warajun* (笑う) の動詞類と区別される。また、*ʔjun* (言う) は基本語基 *ʔi* の異形として *ʔj* を持つ点で、*warajun* *kaujun* の動詞類と区別される。なお *ʔarajun* (洗う) は *warajun* と同じ活用である。

以上、I.1.1 類、I.1.2 類、I.1.3 類、I.2 類の各々の動詞類について概観してきたが、これらの動詞類は本質的には最上段の *kakjun* (書く) と同種の活用の型をなしているものと解される。それが音韻交替現象によって各々多少の差異性を示すようになっているが、次に述べる II 類に比較すれば、それほど大きな差異性とは解されない。これらを大きく I 類とまとめるゆえんである。

4.5 II 類

II 類は変化部が〔*o:*, *o:*, *u:ba*, *i:bo:*, *i:ba*, *o:*, *u:na*, *u:*, *i:*, *a:*, *u:N*, *u:i*, *u:N*, *u:ru*, *u:ro:*, *u:*, *uQ*, *i*, *e:ra*, *ë:N*, *ë:i*, *aN*, *a*, *uN*, *ui*〕とあらわれる動詞類である。

これは I 類の動詞と未然形、条件形₁、命令形において大きな区別を示す。この区別は音韻交替現象によっては説明つかない違いである。これを I 類とは別に II 類と類別するゆえんである。これに属する動詞は *kju:n* (来る) の 1 語である。

以上活用の類別を順次概観してきたが、規則活用・不規則活用という名称を用いるならば、I 類は規則活用であり、II は不規則活用である。また、I 類の中でも I.2 類は比較的不規則的であるといえる。

5. 派生形式 *katjun* (書いている) の活用

先に *katjë:n* (既然₁) *katjë:i* (既然₂) *katjan* (完了₁) *katja* (完了₂) *katjun* (継続₁) *katjui* (継続₂) は活用する派生形式であることを述べた。

これらの形式が実際にどう活用するのか、*katjun* を例にとりて示そう。*katjun* は次のように活用する。

志向形	<i>katjuro:</i>	未然形	<i>katjura</i>
条件形 ₁	<i>katjuraba</i>	条件形 ₂	<i>katjubba</i>
命令形	<i>katjur i</i>	禁止形	<i>katjruna</i>
限界形	△	連用形	<i>katjui</i>
同時形	<i>katjuja</i>	終止形 ₁	<i>katjun</i>
終止形 ₂	<i>katjui</i>	連体形	<i>katjun</i>
係結形	<i>katjuru</i>	推量形	<i>katjuro:</i>
準体形	<i>katju</i>	強調形	<i>katjuQ</i>

これからわかるように、*katjun* は *kakjun*

(書く・基本)の活用とほぼ平行的に活用することがわかる。

次に kaʃun の用例を示す。

kuma nanti dʒi: kaʃuro: (ここで字を書いてよう)
kuma nanti dʒi: kaʃura ʃun (ここで字を書いておらす)
ʔan ʈʰu ja dʒi: kaʃura n (あの人は字を書いていない)
kuma nanti dʒi: kaʃura nna (ここで字を書いていなさい)
ʔag ga dʒi: kaʃuraba ʔabɪnna (彼が字を書いておらば呼ぶな)
ʔag ga dʒi: kaʃubba ja ʔabɪnna (彼が字を書いておれば呼ぶな)
kuma nanti dʒi: kaʃurɪ (ここで字を書いておれ)
kuma nanti dʒi: kaʃuruna (ここで字を書いているな)
kuma nanti dʒi: kaʃui guriʃan (ここで字を書いていくい)
dʒi: kaʃuja gaʃina: kaggi:ro: (字を書いていながら考えろ)
ʔag ga kaʃun (彼が書いている)
ʔag ga kaʃui (彼が書いている)
kaʃum mun na nu:ga (書いているものはなにか)
wan na dʒi: du kaʃun (私は字を書いている)
kurɪ tag ga kaʃuru (これは誰が書いているか)
ʔan ʈʰu ja dʒi: du kaʃuro: (あの人は字を書いているのだろうか)
naʒ ga kaʃu mi (あなたが書いているか)
muʃi ʔja mba ja wasɪritu ta kamo

ʃiri:ra n (もし言わなければ忘れていたかも知れない。wasɪri tun 「忘れている」の活用形)

wan na nama dʒi: du kaʃud do: (私は今字を書いているのだぞ)

ʔari: tutud do: (彼が取っているぞ。)

tutun 「取っている」の活用形)

tura n ʈʰi ʔiʃam bam tutud do: (取らないと言ったけれども取っているぞ。 tutun の活用形)

nama dʒi: kaʃu tan (今字を書いていた)

nama dʒi: kaʃu tɛ:n (今字を書いていたにちがいない)

6. 所属動詞

次に、今回の調査で得た動詞を、各々の活用型に分類して示す。1.2 類は細かく下位分類せず、1.2 類として一括して示すことにする。

[1.1.1 の1] 類

ʔaikjun (歩く) ʔukjun (置く)
ʔudurukjun (驚く) kakjun (掻く)
kikjun (聞く) sakjun (裂く)
ʃikkjun (沈む) tsɪkjun (突く)
tsɪkjun (着く) tsɪkjun (搗く)
tsɪdzɪkjun (続く) tudukjun (届く)
nakjun (泣く) ho:kjun (掃く)
ʔukjun (吹く) ʔukjun (ほどく)
makjun (巻く) kaʃikjun (蒸す)
jakjun (焼く)

[1.1.1 の2] 類

ʔuigjun (泳ぐ) miiggjun (さわる)
tsɪggjun (注ぐ) nugjun (脱ぐ)

[1.1.1 の3] 類

naʃun (産む) ʔufun (押す)
kakko:ʃun (隠す)

karaſun (貸す) mutſikaraſun (くっつけ
る)

kjaſun (消す) kubuſun (こぼす)

ʔo:ſun (叱る) damakaſun (だます)

haraſun (注ぐ) no:ſun (治す)

ʕiggaſun (逃がす, 放す) juruſun (許す)

Fumikaſun (酔う)

[I.1.1の4]類

ʔuſun (打つ) matſun (待つ)

miſun (満つ) mutſun (持つ)

[I.1.1の5]類

ʔasibjun (遊ぶ) wurabjun (叫ぶ)

nubjun (伸び) jurukubjun (喜ぶ)

[I.1.1の7]類

ʔamjun (編む) wugamjun (拝む, 祈る)

kamjun (噛む) kumjun (踏む, 履く)

k²umjun (汲む) ʔumjun (熟する)

numjun (飲む) tammjun (頼む)

tsikamjun (掴む, 握る)

judumjun (休む, よどむ) jamjun (病む)

[I.1.1の8イ]類

ʔatsimajun (集まる) ʔujun (売る)

ʔusajun (埋める) ʔuttujun (奮う)

Fu:jun (送る) tamagajun (おじる)

wuduſun (踊る) wujun (祈る)

wujun (織る) mudujun (帰える, 戻る)

kawajun (変わる) kajun (借りる)

gudʒukujun (くすぐる) turajun (喧嘩す

る) ku:jun (転ぶ) ʔuſiwaſun (こわす,

うちわる) kamajun (刺す) tumujun (さが

す) k²u:jun (閉める) sujun (剃る)

ʔimo:jun (いらっしやる) kujun (績ぐ)

tsikujun (作る) tsijun (釣る)

tumajun (泊まる) najun (鳴る)

nujun (塗る) nibujun (寝る)

no:jun (残る) nujun (乗る) Fujun (降る)

Fujun (振る) Fujun (堀る) hinaſun (減

る) magajun (曲がる) miſgajun (まわる)

manjuſun (まねる) muſun (漏る)

ʔubujun (ゆすぶる) wajun (割る)

[I.1.1の8ハ]類

ʕijun (乾く, 干る) hanaʕin (くしゃみ
する)

[I.1.1の8ト]類

ʔubijun (覚える) juſijun (教える)

ʔidʒijun (出る) ʔurijun (降りる)

ʔirijun (入れる) ʔu²ijun (植える)

kasamijun (重ねる, 添える)

kadzijun (耕す) ku²rijun (くれる)

dugē:jun (動く) m²arijun (生れる)

kakijun (賭ける) kē:jun (欠ける)

sagijun (掛ける) kagg²i:jun (考える)

k²usarijun (腐れる) kudzirijun (崩れる)

ku²rijun (暮れる) ku²rabijun (比べる)

ku²ijun (越える) kē:jun (肥える)

darijun (だれる) ſijagijun (精げる)

ſitijun (捨てる) nudzirijun (すべる,

ころぶ) ſijun (こする) samijun (覚める)

sudatijun (育てる) sumijun (染める)

tasikijun (助ける) tatijun (建てる)

darijun (疲れる, だれる) tumijun (止め

る) tukijun (溶ける) tijun (照る)

nagarijun (流れる) nagijun (投げる)

nadijun (撫でる) namijun (なめる)

ʕiggiſun (逃げる) nigurijun (濁る)

nurijun (濡れる) nuſijun (乗せる)

hanijun (はねる) hagijun (禿げる)

katamijun (運ぶ, かつぐ) Fukurijun

(脹れる) Fumijun (ほめる) m²i:jun (見

える) midʒarijun (乱れる) mē:jun (燃

える) wasirijun (忘れる)

〔1.2〕類

ʔo:jun (会う) ʔumujun (思う)
tsi:kanajun (飼う) surujun (揃う)
tsi:kajun (使う) narajun (習う)
nu:jun (縫う) ni:gajun (願う)
haujun (這う)

形容詞の活用

1. 形容詞語形変化の諸形式と活用形

「高い」を例にとって、湯湾方言の形容詞語形変化の諸形式を示すと、次の通り。

ta:sa:bba ja kaura ra n (高ければ買えない) ta:ku najun (高くなる) ta:so:ne:n (高くない) ta:sa:n (高い)
ta:sa:i (高い) ta:sa:n suë: (高い酒)
dërï ga ta:sa: (どれが高いか)
ta:sa:ro: (高いだろう) ta:sanu kaura ra n (高くても買えない) ta:sa: ja ũiga jud do: (高さは違うぞ) ta:sa: tan (高かった) ta:sa:tï ŋ kauro (高くても買おう)

「高い」を含めて24語の形容詞の語形変化を調査した。これらの語形変化を相互比較し、更に動詞の活用とも比較考察した結果、次の諸形式を活用形と認定する。活用形の前後に接尾する形式は()の中に入れる。

条件形 ta:sa:bba 連用形 ta:ku(na jun)
提示形 ta:so:(ne:n) 終止形₁ ta:sa:n
終止形₂ ta:sa:i 連体形 ta:sa:n(suë:)
係結形(dërï ga) ta:sa:
推量形 ta:sa:ro: 理由形 ta:sanu
名詞形 ta:sa:(ja, tan)
接続形 ta:sa:tï(n)

2. 活用体系

1で認定した活用形を動詞の場合に準じて、不変化部と変化部に分析し、体系化して表示すれば、第2表の通りになる。表示の方法はすべて動詞の活用体系表に準じてある。

第2表

湯 湾 方 言 形 容 詞 活 用

分 類	形 容 詞	変化部 不変化部	条 件 形	連 用 形	提 示 形	終 止 形 ₁	終 止 形 ₂	連 体 形	係 結 形	推 量 形	理 由 形	名 詞 形	接 続 形	所 属 形 容 詞
I	1 高 い	ta:	sa:Qba	ku	so:	sa:N	sa:i	sa:N	sa:	sa:ro:	sanu	sa:	sa:ti	hajasa:N (早い) nagasa:N (長い) juwasa:N (弱い) kurasaN (暗い) wa:sa:N (若い) ʔikjasa:N (近い) ɕijasa:N (低い) kjurasa:N (美しい)
	2 強 い	tsʔi:	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	3 大 きい	he:	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	judē:sa:N (遅い)
	4 軽 い	garu	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	warusa:N (悪い) tu:sa:N (遠い) ʔubusa:N (重い)
	5 か ゆい	jugo:	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
II	新 しい	mi:	〃	saku	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
III	1 涼 しい	sida	fa:Qba	faku	fo:	fa:N	fa:i	fa:N	fa:	fa:ro:	fanu	fa	fa:ti	ʔifugafa:N (忙しい) midzira:fa:N (めずらしい) hatsika:fa:N (恥しい)
	2 こ わい	ʔuturu	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
接続する 主な接辞				najuN (なる) ne:N (ない)				ʔu (人)				ja (は) tan (た)		

3. 活用形

3.1 条件形

条件を表わす。

ta:sa:bba ja kaura ra n (高いならば買えない)

june:gata ja ɕigju:sa:bba suto: tʃa
ʔidʒinna jo: (夕方は寒いから外へは出るなよ)

kamatʃi nu ʔiʃasa:bba kju: ja jasimi
dʒa (頭が痛いから今日は休みだ)

3.2 連用形

用言、形式用言等へ接する。

hajaku tujun tʃu nu mun dʒa (早く取る
人のものだ) ʃinamun nu dandan ta:ku
najun (品物がだんだん高くなる)

hansu: ja ta:ku ne:n (芋は高くない)

nedan nu ta:ku nati (値段が高くなって)
hajaku (hēku) hē:ti maniuta:n (早く
起きて間に合った)

3.4 提示形

係助詞 ja (は) の融合したものである。

ta:so: ne:n do: (高くないぞ)

3.5 終止形₁ 終止形₂

動詞にふたつの終止形が認められたように、
形容詞にもふたつの終止形が認められる。

kun suē: ja ta:sa:n (この酒は高い)

kurī jukka ja ta:sa:n (これよりかは高
い)

ʔan wunago: kjurasa:n (あの女は美しい)
tsi:sa:n do: (強いぞ)

kjurasa:n ja: (美しいね)

kurī n ʔarī n su:jo: jittʃa:n (これも
あれもみなよい)

na:nai hē:sa:n (もう少し大きい)

ʔan wunago: kjurasa:i (あの女は美しい)

ʔan wunago: ta:sa:i (あの女は高い)

末尾音の n または i が脱落する時もある。

ʔiro: kjurasa (色は美しい)

kuma ja natsi sīdafa fujo: nukusa
nu:tʃi:n ʔja: ra n (ここは夏は涼しい冬は
温いなんとも言えない)

3.6 連体形

体言に接する、また tʃagisa:n (～であり
そうだ) にも接する。

ta:sa:n suē: ja kawikija n (高い酒は
買えない)

jamatu ja wa:sa:n tuki n ʔidʒan (内地へは若い時に行った)

ta:sa:n tʃagisa:n (高そうだ)

3.7 係結形

疑問詞、代名詞の不定称の結びとなる。

dēri ga ta:sa: kai (どれが高いか)

ʔin tu mja: tu dēri ga tsi:sa: (犬と
猫とどちらが強い)

3.8 推量形

推量を表わす

ʔan ʔju: ta:sa:ro: (あの魚は高いだろう)

ʔama ja sīdafa:ro: (あそこは涼しいだろ
う)

3.9 理由形

原因、理由を表わす。

ʔammari ta:sanu kaura ra n (あまり高
くて買えない)

kun suē: ja ta:sanu (この酒は高くて)

3.10 名詞形

名詞的に用いられる。また tan (た・過去)
もこれを承ける。

hē:sa: sīkītī tsiko:ra n (大きさを
ぎて使えない)

ta:sa: ja ʔikjata: bē:i kai (高さはどれだけか)

ta:sa: ja ʔigajud do: (高さは違うぞ)

ta:sa: bē:i ne:mba ja ji:ʔfa si:ga

(高さばかりなければよいのだが。高くさえなければよいのだが)

ta:sa: bē:i najun (高さばかりなる。高くばかりなる)

ʔag kuru gadi: ja waru: ta:sa: tan

(あの頃までは大変高かった)

3.11 接続形

接続を表わす

ta:sa:ti g kauro: (高くても買おう)

hē:sa:ti g kauro: (大きくても買おう)

4. 活用の種類

まず、変化部の交替の仕方に着目すると、形容詞は大きくⅠ・Ⅱ・Ⅲ類に分類される。この区別を明確に示しているのが連用形である。すなわち、その変化部がⅠ類では ku, Ⅱ類では saku, Ⅲ類では ʃaku となっている。Ⅱ類はこの連用形においてのみⅠ類と異なり、他はすべて同じである。従って、分類方法としては、まず大きく甲(Ⅰ・Ⅱ)、乙(Ⅲ)に分け、甲を更にⅠとⅡに下位分類する二分法が妥当なのかも知れないが、ここではさしあたって三分法をとっておく。Ⅰ類で更に1~5と分類してあるのは、不変化部の末尾音の違いによる分類である。Ⅲ類も同様である。Ⅰ類は国語のク活用に相当する。kjurasa:n (美しい)がこの類に属しているのは、これが「きよらさあむ」に対応するからである。Ⅲ類は国語のシク活用に相当する。

5. 形容詞語例

次に、今回の調査で得た形容詞を、sa:n 語尾と ʃa:n 語尾に分類して示す。

[sa:n] 類

ʔo:sa:n (青い) ʔa:sa:n (赤い)

ʃigjursa:n (寒い) ʔaʃisa:n (厚い)

ʔadʒimasa:n (甘い) ʔarasa:n (荒い)

ʔasasa:n (浅い) judē:sa:n (遅い)

ʔmasa:n (おいしい) ʔubusa:n (重い)

juɡo:sa:n (痒い) k²wa:sa:n (固い)

kitanasa:n (きたない) janagusa:n

(きたない) ʃusa:n (強い)

ʔinjasa:n (こまかい、小さい)

ʃibusa:n (渋い) ʔibisa:n (狭い)

ʃijusa:n (広い) nigjasa:n (苦い)

jowasa:n (ひもじい) Furusa:n (古い)

marusa:n (短い) jassa:n (やさしい)

ʔiʃasa:n (いたわしい) juharasa:n

(柔かい) juwasa:n (ゆるい)

[ʃa:n] 類

wa:ʃa:n (おかしい) mutsikaʃa:n (むつかしい)

助 動 詞

今回の調査で得たいわゆる助動詞に相当する諸形式を示す。

1. tan (た 過去)

ʔari ja dʒi: kakju tan (彼は字を書きつづあった)

nama dʒi: kaʃu tad do: (今字を書いていたぞ)

wag ga kaku gadi: ʔura ja ko: n tad
do: (私が来るまで彼は来なかったぞ)

2. tē:n (仮想)

na: jagati kakju tē:n turo: jatan
(もうやがて書くところであった)

na: jagati katʃu tē:n (もうやがて書いて
いるところであった)

3. n (ぬ 否定)

nu: n tura n (なにも取らない)

na: ko: n (もう来ない)

na: tura n tan (もう取らなかった)

na: mja n (もう見ない)

na: sira n (もうしない)

4. jawon, won (ていねい)

wag ga ʔikja won (私が行きます)

wag ga jumja won (私が読みます)

wag ga kakja won (私が書きます)

wag ga kja won (私が着ます)

hajaku fē: jawon (早く起きます)

5. nfo:jun (～しなざる, 尊敬)

funi kugi nfo:jun (舟を漕ぎなざる)

ʃimbum mi: nfo:jun (新聞をお読みになる)

kusa tui nfo:jun (草をお取りになる)

hajaku ʔudzimī nfo:jun (早く目をさま
される)

funi kugi nfo:ʃan (舟を漕ぎなさった)

funi kugi nfo:ʃun (舟を漕いでいらっし
やる)

ʃimbum mi: nfo:ʃun (新聞を読んでいらっ
しやる)

kusa tui nfo:ʃun (草を取っていらっし
やる)

hajaku ʔudzimī nfo:ʃun (早く目をさま
していらっしやる)

6. ʃagisa:n (～しそうだ, 様子)

ʔama katʃi ʔiki ʃagisa:n (あそこへ行
きそうだ)

kuma katʃi ki: ʃagisa:n (ここへ来そう
だ)

kuma katʃi ki: ʃagisa: tan (ここへ来そ
うだった)

7. ʃasa:n (たい, 願望)

funi kugi ʃasa:n (舟を漕ぎたい)

ʃimutsi mi: ʃasa:n (書物を見たい)

kuʒi ʃasa: tan (漕ぎたかった)

古仁屋方言では buʃa (たい) が用いられる。

8. jassa:n, jassa (～しやすい, 容易)

ʔagan nja ʔiki jassa:n (jassa) (あそこ
へは行きやすい)

kuma katʃi ki: jassa:n (jassa) (ここへ
来やすい)

kun dʒi: jumi: jassa:n (jassa) (この
字は読みやすい)

ʔiki jassa: tan (行きやすかった)

9. gurusfa:n, guʃfa:n, gurusfa, guʃfa (～しにくい, 困難)

ʔama kattʃa ʔiki gurusfa:n (gurusfa)
(あそこへは行きにくい)

kan nja ki: gurusfa:n (gurusfa) (ここへ
は来にくい)

kun dʒi ja mi: guʃfa:n (guʃfa) (この字
は見にくい)

ʔiki gurusfa:n turo: (行きにくいところ)

ʔiki gurusfa: tan (行きにくかった。)

10. rīn (れる, 受身・可能)

ʈʰu n tamma rīn (人に頼まれる)

Funī kugasa rīn (舟を漕がされる)

ʈʰu n tasikīra rīn (人に助けられる)

kju: kara Fē:ra rīn (今日から起きられる, 起きることができる)

tī ʃi tura rīn (手で取られる。取ることができる)

hajaku hē:ra rīn (早く起きられる。起きることができる)

ʈʰu n tammat ta (人に頼まれた)

ʈʰu n tamma rībo: ʔikjun (人に頼まれれば行く)

11. ʃun (す 使役)

dʒi: juma ʃun (字を読ます)

ʔututu ʔabīra ʃun (弟を呼ばす)

wam ba mata ʃun (私を待たす)

ʃikīn ʔukīra ʃun (試験を受けさせる)

tītsī ba magīra ʃun (鉄を曲げさせる)

hansu nija ʃun (芋を煮させる)

dʒi: kaka ʃun (字を書かせる)

ʔarī ba tata ʃun (彼を立たす)

kuma:ʈʰi ko: ʃun (ここへ来させる)

tī magīra ʃun (手を曲げさせる)

dʒi: jumatʃan (字を読ませた)

juma sībo: jumjun (読ませば読む)

12. dʒa (だ 指定)

ʔarī Funī dʒa (あれは舟だ)

ʔarī ʃima dʒa (あれは島だ)

ʔura ja ʔarī jukkan dʒo:bu dʒa (おまえは彼より丈夫だ)

ʔikja n tan mun dʒa ja: (行かないのだね)

古仁屋方言でも dʒa (だ) が用いられている。

以上が湯湾方言における助動詞である。沖縄本島で用いられている ju:sun (~できる, 能力) に相当する助動詞は当方言では見い出しえなかった。湯湾方言では「~できる・能力」は dikijun (できる) という動詞で表現される。古仁屋方言でも同様である。湯湾の例を示す。

Funī kuggjug kutu ja dikijun (舟を漕ぐことができる)

ʈʰu: juggadi hatarakjug kutu ja dikijun (1日中働くことができる)

ʔinjasa:m mun nun mi:jug kutu nu

dikijun (小さいものも見るすることができる)

代 名 詞

湯湾方言で用いられている代名詞は第3表の通りである。

まず, 人称代名詞について述べる。一人称では単数に wan (私), wanu (私), 複数に wa:kja (私たち) が用いられる。wanu は次のように用いられる。

wanu m madʒin kamo: (私も一緒に食べよう)

wanu n ʔikība ʔura ɣ ko: (私も行くから君も来い)

wanu n ʔikjui (私も行く)

wanu ɣ kakjui (私も書く)

wanu n ʔai (私もある)

wanu n wui (私もいる)

以上のように wanu は n (も) 助詞の前に現われる傾向がある。

二人称では単数に ʔura (おまえ), nan (あなた), 複数に ʔurakja (おまえたち), na:kja (あなたたち) が用いられる。ʔura,

第3表

湯 湾 方 言 代 名 詞

情 態	関 係	方 向	場 所	事 物	人	の事 柄類 の 手 関と	話 の 手 関と
					wan (私) wanu (私) wa:kja (私たち)	(話し手)	第一人称
					?ura (おまえ) nan (あなた) ?urakja (おまえたち) na:kja (あなたたち)	(聞き手)	第二人称
kanfun (こんな) kanfi (こう) ganfi (こう)	kun (この)	kumakafji (こっち) kamba (こっち) kan (ここへ)	kuma (ここ)	kuri (これ)	kummun (こいつ) kuri ₂ (これ) kun ₂ (この人) kummugkja: (こいつら) kutta: (これたち) kun ₂ ugkja: (この人たち)	近 称	第三人称 (話し手・聞き手以外のもの)
△	?un (その)	?umakafji (そっち)	?uma (そこ)	?uri (それ)	?ummun (そいつ) ?uri ₂ (それ) ?un ₂ (その人) ?ummunugkja: (そいつら) ?utta: (それたち) ?un ₂ ugkja: (その人たち)	中 称	
?aganfun (あんな) ?aganfi (ああ)	?an (あの)	?amakafji (あっち) ?agamba (あっち) ?agan (あそこへ)	?ama (あそこ)	?ari (あれ)	?ammun (あいつ) ?ari ₂ (あれ) ?an ₂ (あの人) ?ammunugkja: (あいつら) ?atta: (あれたち) ?an ₂ ugkja: (あの人たち)	遠 称	
?ikjafun (どんな) ?ikjafi (どう)	dën (どの)	da:kafji (どっち) da:tfi (どこへ)	da (どこ)	dëri (どれ)	dëmmun (どいつ) tari (誰) dënnin (どのかた) dëmmunugkja: (どいつら) tatta: (誰たち どのかたたち)	不定 称	

ʔurakja は年下の者かあるいは同年でも親しい者には用いる。

nan, na:kja は年上の人に用いる。

三人称は近称、遠称、不定称に分かれる。近称では単数に kummun (こいつ、この者) kurī (これ) kuntʃu (この人、このかた), 複数に kummugja: (こいつら、この者たち) kutta: (これたち), kuntʃugja: (この人たち、このかたたち) が用いられる。kummun kummugja: は相手を蔑む時に用いられる。kurī, kutta: は年下の者に用いる。kuntʃu kuntʃugja: はあまり親しくない人か、あるいはよそ者に用いる。中称では単数に ʔummun (そいつ、その者), ʔurī (それ), ʔuntʃu (その人、そのかた), 複数に ʔummunugja: (そいつら、その者たち), ʔutta: (それたち), ʔuntʃugja: (その人たち、そのかたたち) が用いられる。

ʔummun ʔummunugja:, ʔurī ʔutta:, ʔuntʃu ʔuntʃugja: の待遇方法は近称の場合と平行的である。遠称では単数に ʔammun (あいつ、あの者), ʔarī (あれ), ʔantʃu (あの人、あのかた), 複数に ʔammunugja: (あいつら、あの者たち), ʔatta: (あれたち), ʔantʃugja: (あの人たち、あのかたたち) が用いられる。ʔammun ʔammunugja:, ʔarī ʔatta:, ʔantʃu ʔantʃugja: 各々の待遇方法も近称の場合と平行的である。但し, kurī (kutta:) ʔurī (utta:) は同年の者に用いるには抵抗があるが, ʔarī (ʔatta:) にはそういうことなく同年の者にも用いられるようである。不定称では単数に dëmmun (どいつ、どの者) tari (誰) dënnin (どのかた), 複数に dëmmunugja: (どいつら、どの者たち) tatta: (誰たち) が用いられる。

それらの待遇方法は単数の場合は近称と平行的であるが、複数の場合は少々異なる。

dëmmun, dëmmunugja: はもちろん相手を蔑む時に用いられる。dëmmunugja: は dëmmun に複数接尾辞 -kja: が接して形成されたものである。tari は年下か同年の者、あるいはごく普通一般の疑問に用いられ、問うている対象が明らかに年上の人かあるいはあまり親しくない人の場合には dënnin が用いられる。それが複数になると、年下の場合も年上の場合もすべて tatta: で表わされる。tatta: は tari に複数接尾辞 -ta: が接して形成されたものである。dënnin に複数接尾辞が結合した複数形式も予想されるが見出しえなかった。

指示代名詞は単数形のみ調査してある。その中で事物、場所、関係を示す代名詞は表示してある通りである。但し、方向、情態を表わす代名詞は語形がいろいろあらわれ、少々複雑である。

まず、方向を表わす代名詞についてみると、近称では kumakatʃi, kamba, kan があらわれる。

kumakatʃi ki: ʃagisa:n (ここへ来そうだ)

kamba ko: (ここへ来い)

kan nja ki: guruʃa:n (ここへ来にくい)

中称では ʔumakatʃi が用いられ、それ以外の語形は見出しえなかった。

ʔumakatʃi ki: jassan (そこへ来やすい)
古仁屋方言では ʔugan (そこへ) が用いられている。

遠称では ʔamakatʃi ʔagamba ʔagan が用いられる。

ʔamakatʃi ʔiki ʃagisa:n (あそこへ行きそうだ)

ʔagamba ʔiki jassa:n (あそこへは行きやすい)

ʔagan nja ʔiki jassa:n (あそこへ行きやすい)

不定称は da:katʃi da:tʃi が用いられる。
da:katʃi ʔikjuru (どこへ行くのか)
ʔurakja: ja da:tʃi ga ʔikjuru (おまえたちはどこへ行くのか)

次に、情態の代名詞では、近称に kanʃun kanʃi ganʃi が用いられる。
kanʃun kʲin du ʔaru (こんな着物ぞある)
ʔikjaʃi sira bag kanʃi sira ban ʔura:kattʲi (どうしようがこうしようが君の勝手だ)

ganʃi ʔitʃi n wasi:ri:bba ja tadaʃʃi:
ja ʔuka n (こんなに言っても忘れてもした
らただではおかない)

中称の語形は見出しえなかった。古仁屋方言では ʔugaʃum (そんな) ʔuga:ʃi (そう) が用いられているので、湯湾方言でもそれに類似した語形が用いられている可能性はあるが、今回の調査では見出しえなかった。

遠称では ʔaganʃun ʔaganʃi が用いられる。
ʔaganʃun gadi wanu n ʃi:ki:ʃun (あんなまでは、私にもやることができる)
ʔaganʃi si:ri (あゝしなさい)

不定称では ʔikjaʃun ʔikjaʃi が用いられている。
ʔikjaʃum mun (どんな物)
ʔikjaʃiʃiga dʒi: ja kakjuru (どのようにして字は書くのか)

nan nja ʔikjaʃiʃiga ʔukuritaru (あなたはどうしておそくなりましたか)

湯湾方言では三人称の場合、近称と遠称の区別ははっきりしている。しかし、中称は比較的

不安定で、たとえば、人称代名詞の場合、「それ」を調査すると、kuri, ʔuri 両形を用いると報告する。また、指示代名詞の場合も、事物を表わす「それ」を聞くと、kuri ʔuri 両形の報告を受ける。関係を表わす「その」の場合にも kun ʔun の両形を用いるという。但しその報告の裏には常に遠称との対置意識があるらしく、その対置意識を離れてよく内省すれば近称と中称の区別はあらわれてくる。

これからすると、湯湾方言では、三人称のカテゴリーは、まず大きく近称と遠称とに分かれそして近称の領域が更に近称と中称とに分かれているように観察される。

親族名称と人称代名詞

第4表は親族名称と人称代名詞及びその他との関係を示したものである。

まず、湯湾方言で親族名称としてどういう語形が用いられているかを調査した。表では「曾祖父」から「玄孫」までの語形を示してある。湯湾方言では平民と士族とでことばの違いがある。「祖父」「祖母」「父」「兄」「姉」でその違いがあらわれてくる。

「曾祖父」「曾祖母」における士族・平民の違いは今回の調査では確認しえなかった。「祖父」「祖母」にその区別があらわれるから、「曾祖父」「曾祖母」にもその区別が存するのではなかろうかと思われる。湯湾方言では「曾祖父」と「祖父」も ʔu:dʒu: とあらわれる。「祖父」の ʔu:dʒu: が平民語であるところからすれば、「曾祖父」の ʔu:dʒu: も平民語で他に士族語も存するのかも知れない。古仁屋方言では「曾祖父」は ʔuFuʔuFuʃʃu:, 「祖父」は Fuʃʃu: とあらわれる。古仁屋方言の ʔuFuʔuFuʃʃu: の前部 ʔuFu (大) が脱落し、

	親族名称	総称	呼称	人称代名詞			「はい」という返事	
				一人称	二人称	三人称	呼ばれた時	承諾の時
曾祖父	ʔu:dʒu:		↓	↓	↓	↓	↓	↓
曾祖母	ʔu:homma		↓	↓	↓	↓	↓	↓
祖父	Fuʃʃu: (士族) ʔu:dʒu: (平民)	{ Fuʃʃu:ta:, hanne:ta: (士族) ʔu:dʒu:ta:, hommata: (平民)	↓「親族名称」を用いる↑	↓	↓	↓「親族名称」を用いる↑	↓wo:を用いる↑	↓ʔo:を用いる↑
祖母	hanne: (士族) homma (平民)							
父	dʒu: (士族) ʔadʒa: (平民) ʔaddʒe: (平民)	{ ʔujagkja:	↓	↓wanを用いる↑	↓	↓	↓	↓
母	ʔamma:							
伯(叔)父	wudʒi		↓	↓	↓	↓	↓	↓
伯(叔)母	wuba		↓	↓	↓	↓	↓	↓
兄	ʔanjo:gwa:(士族) ʔakke: (平民) jammi: (平民)	{ siɖagkja:	↓	↓	↓	↓	↓	↓
姉	ʔaʃe: (士族) ʔago: (平民) ʔago:ggwa (平民)							
夫(ego)	wutu	{ tudʒu:tu	(tʃan)	↓	↓	↓	↓	↓
妻	tudʒi							
弟	ʔututu	{ ʔututugkja:	↓	↓	↓	↓	↓	↓
妹	wunai							
姪	mii	{ miiwui	↓「名前」を呼ぶ↑	↓	↓	↓	↓	↓
甥	wui							
長男	siɖaggwa	{ jiɖganukwa	↓	↓	↓	↓	↓	↓
次男	dʒinan							
三男	sannan		↓	↓	↓	↓	↓	↓
長女	siɖa	{ wunaɖunukwa	↓	↓	↓	↓	↓	↓
次女	nibammi nukkwa							
三女	sambamminukkwa		↓	↓	↓	↓	↓	↓
末っ子	ʔitʃibanʃʃanukkwa		↓	↓	↓	↓	↓	↓
孫	maga	{ kwamaga	↓	↓	↓	↓	↓	↓
初孫	hatsimaga							
曾孫	matamaga							
玄孫	ʃi:maga							

ʔuFuʃʃu: → ʔu:dʒu:となったのが湯湾方言であると解される。従って、湯湾方言でももとは前部に ʔuFu のついた語形が用いられていたのかもしれない。「曾祖母」と「祖母」は homma に ʔu: (大) がつくつかつかないかによって区別している。homma が平民語であるところからすれば ʔu:homma: も平民語かも知れない。すなわち「祖母」の士族語 hanne: に対して ʔu:hanne: が予想される。古仁屋方言では ʔuFuhanne: (曾祖母), hanne: (祖母) が用いられている。「父」を表わす語は、士族では dʒu:, 平民では ʔadʒa: か ʔadʒe: である。古仁屋方言では dʒu: だけである。「母」は ʔamma: で士族・平民の違いは見出しえなかった。古仁屋方言でも ʔamma: である。「おじ」「おば」は伯と叔の違いはない。wudʒi, wuba である。古仁屋方言でも同様であるが、古仁屋方言では伯(叔)母は古くは kkë: といっていたようで、wuba は新しいという報告を受けた。「兄」「姉」は士族・平民の区別があらわれる。「兄」は士族で ʔanjo:-gwa:, 平民で ʔakkë:, jammi が用いられる。「姉」は士族では ʔafë:, 平民では ʔago: ʔago:ggwa が用いられる。また、士族の息子は平民からは ʃu:ma: と呼ばれ、女の子は ʔafë: と呼ばれていたようである。因に、その主人は danna: と呼ばれる。古仁屋方言でも「兄」には士族・平民の区別があらわれ、前者は ʔanjo:, 後者は jammi: である。湯湾方言に存する ʔakkë: に類する語は見出しえなかった。「姉」も士族・平民の区別があらわれ、前者は ʔafë, 後者は ʔan'i, 更に身分の低いところでは ʔago: を用いていたようである。湯湾方言では見出しえない ʔan'i が用いられている点特徴的である。

「夫」以下の親族名称については士族・平民の区別の報告は得られなく、第4表に示したような語形を得た。

親族名称の調査は1人の話者だけでは不十分で、各自の生い育った環境によって、かなりの差異が出てくることが予想される。たとえば、曾祖父・曾祖母のいない家庭では、これに対する語形が貧弱であると解されるし、また、士族・平民のどちらだったのかということによっても資料に相違があらわれてくるものと思われる。

次に、これら個々の親族名称が関係の深いもの同志で一括されて、更に一般的な語形で表現される場合がある。これが総称というワクで示した語形である。もちろん「夫(ego)」の立場からみた時の語形である。

「祖父母」は「祖父」「祖母」を表わす語形のどちらかに複数接尾辞の -ta: がついた形で表わされる。Fuʃʃu:ta:, ʔu:dʒu:ta:, hanne:ta:, hommata: がこれである。「父母」は ʔujagkja: で、「父」「母」を表わす語形とは別系統の「親たち」に相当する語形が用いられる。「兄姉」は siɖagkja: で、これも「兄」「姉」を表わす語形とは別系統のものである。siɖa は『おもろさうし』では「すぎべ」「せざ」の形で用いられている。「夫妻」は tudʒu:tu で、これは明らかに tudʒiwutu → tudʒu:tu となったものである。「弟妹」は ʔututugkja: で、これは「弟」を表わす語形に -kja: (複数接尾辞) が接尾したものである。この ʔututu という語形は本来は「弟」を表わすものであるが、ʔututugkja: で「弟妹」を表わすようになり、更に一般化されて、血のつながりのない年下の者をも表わすようになっている。これら siɖagkja: tudʒu:tu ʔututugkja: が更に一括されて kjo:de: (兄弟姉

妹)という語形で表わされる。m'ri (姪) と wui (甥) は結合して m'riwui (姪甥) という総称形式を成立させる。長男以下の男の子は jigganukwa で、長女以下の女の子は jinagunukwa である。そして、m'riwui, jigganukwa, jinagunukwa に「孫」以下の者をすべて一括して kwamaga (子孫) と称している。

以上は表に示した総称の語形であるが、他に調査しえた人間関係の語形を示すと、次の通りである。

jigganukjo:de: (兄弟) wunaigkja: (姉妹) jë:i (姉妹から兄弟をいう、複数は jë:i-igkja:) wunai (兄弟から姉妹をいう、複数 は wunaigkja:) ?itoko (従兄弟)
futa?itoko (また従兄弟) haro:d3i: (親戚) ɕikihara (一族、血のつながった人々)
jimbiki nu haro:d3i: (結婚の縁での親族) tu:sa nu haro:d3i: (遠い親戚)
mo:kukkwa 又は kakur'iggwa (私生児)
kamagi ga tʃigajun kjo:de: (女の親が違 うきょうだい) do:së: (姦通)
mama d3u: (義父) mama?amma (義母)
muho: (婿) jum'i (嫁) jo:ʃi (養子)
tʃaggwa (双生児) jiggadatʃi: (男やもめ)
wunagudatʃi: (女やもめ) mi:tʃu (赤坊)
warabi (子供) wa:sa:ntʃu (若者)
n'isë: (男子青年) kjuramun (女子青年)
futʃu (老人) kʷamui (子守り)

表では、次に呼称というワクを示してある。これは「夫(ego)」を中心に、ego がたとえば「誰さん、ここへ来なさい(いらっしゃい)」という場合、「誰」のところへ「曾祖父」から「玄孫」までをそれぞれ具体的に置き換えていった場合、各々がどう呼ばれるかを示した

ものである。その結果は第4表の通りで、「曾祖父」から「姉」のところまで、いわゆる年上の者には「親族名称」を用いて呼んでいる。たとえば、次の通り。

Fuʃʃu: wa:kja: ja: katʃi ?imo:tʃi tabo:r'i (おじいさん私たちの家へいらして下さい)
d3u: wa:kja: ja: katʃi kan ?imo:tʃi tabo:r'i (お父さん私の家へいらして下さい)

但し、「妻」以下の目下の者にはすべて名前 で呼んでいる。また、「妻」から「夫」を呼ぶ ときには tʃan を用いるようである。

更に、人称代名詞と親族名称とのかかわりぐ あいをみたのが、次の人称代名詞のワクである。「曾祖父」から「玄孫」までの各々が自分自身を話し手という関係において表現する際には wan を用いる。また、「夫(ego)」を話し手として、「曾祖父」から「玄孫」までの各々を聞き手という関係で表現した場合、「曾祖父」から「姉」まで、いわゆる年上の者には nan を用い、「妻」以下の年下(あるいは目下)の者には ?ura を用いる。「曾祖父」から「玄孫」までを話し手、聞き手以外の第三者という関係で表現した場合、「曾祖父」から「姉」までは「親族名称」が用いられる。

たとえば、次の通り。

Fuʃʃu: ja wa:kja: ja: katʃi ?imo:tʃan (おじいさんは私の家へいらっしゃった)

「妻」以下の者に対しては名前を用いる場合もあるが、代名詞の kur'i (kutta:) ?ur'i (?utta:) ?ar'i (?atta:) も用いることができる。

最後は「夫 ego」が「曾祖父」から「玄孫」までの誰からか呼ばれた時、あるいはそのうちの誰かに承諾したという返事をする場合の、「呼ばれた時の」の「はい」と、「承諾した時」

の「はい」の語形を示したものである。これからもわかるように、「呼ばれた時」の「はい」と「承諾した時」の「はい」とでは語形を異にし、また、年上と年下（または目下）という関係においても語形を異にしている。

尚、この親族語彙の資料提供者の大友英良氏は旧士族出身の方である。

また、琉球方言の親族語彙を取り上げた論文としては、下記のようなものがある。

徳川宗賢「沖縄の親族語彙 — 首里士族の用語 —」

『沖縄文化』13号1963年

琉大方言クラブ『琉球方言』第7号1966年

柴田武「語彙研究の方法と琉球宮古語彙」

『国語学』87集1971年

加藤正信「宮古方言の親族名と人称詞」

『沖縄 — 自然・文化・社会』

1976年

派生・複合形式の内部構造

琉球方言の派生及び複合形式は実に複雑な内部構造を有している。その内部構造を明確にしようとして従来もいろいろと模索をくりかえしてきた。そのひとつが『琉球の方言』1975年（法政大学沖縄文化研）の八重山川平方言の「動詞及び複合・派生形式の文法的カテゴリー」の記述であった。しかし、この川平方言での記述は内部構造のとらえ方がいたって粗雑で、動詞及び派生・複合形式の内部構造を正確に記述したとは思えない。その後、沖縄本島や奄美大島湯湾（宇検村）・古仁屋（瀬戸内町）方言を調査し、分析考察をすゝめているうちに、その内部構造を概略把握しえたように思える。それと同時に、八重山川平方言の構造記述も訂正せざるをえなくなった。

以下、湯湾方言を中心に派生及び複合形式の内部構造を記述し、それに従って八重山川平方言のそれも訂正していきたい。

1. 派生形式の内部構造

派生・複合形式の内部構造を考察するに際しては、常に文を終止させる形を中心にすゝめていきたい。

動詞の活用の項でも述べたように、次の諸形式は派生形式と解される。

kakjun (kakjui) (書く, 基本)

katjun (katjui) (書いている, 継続)

katjẽ:n (katjẽ:i) (書いてある. 既存)

katjan (katja) (書いた, 完了)

琉球方言の動詞において、純粹に単純形式と解されるものは、基本語基語幹を軸として成立する活用形のみである。

上記派生形式の内部構造は次の通りである。

活 用 形

語 幹

語 基	語幹派生接尾辞	語 尾
kakj	u (基本)	nまたは i
katj	u (継続)	nまたは i
katj	ë: (既存)	nまたは i
katj	a (完了)	nまたはゼロ

語基は派生形式の「中心的意味」を表わす。kakj (連用語基)・katj (音便語基)はkak (基本語基)の環境による異形である。語幹派生接尾辞は「アスペクト」を表わす。この接尾辞の交替によって、諸アスペクトが表現される。語基に語幹派生接尾辞が結合して語幹を形成する。語尾は終止形の場合「断定」を表わす。他に文を終止させる活用形としては、志向形、命令形、推量形があるが、これらはそれぞれ「志向」「命令」「推量」を表わす。語幹に語尾が結合すると、そこに活用形が成立する。

奄美・沖縄方言における動詞派生形式はだいたい以上であるが、方言によっては、他にも派生形式と解されるものがある。たとえば、沖縄本島本部町瀬底方言(以下「瀬底方言」と記す。筆者の方言である)の派生形式は次の通りである。

- hakun (書く, 基本)
- hatjin (書いている, 継続)
- hatje:n (書いてある。既存)
- hatjan (書いた。完了)
- hatjukun (書いておく, もくろみ)

すなわち, hatjukunも派生形式と解される。湯湾方言では、これに相当する形式は hatjiukjunとあらわれ、これは派生形式と解するよ

りは、ふたつの動詞の結合とみなした方が妥当のように思われる。

2. 複合形式の内部構造

単純形式(基本語基語幹を軸として成立する活用形)及び派生形式に助動詞が接続して形成される形式を複合形式と称しておく。

2.1.1 第1種複合形式の内部構造

第1種とは tan (時・過去) tē:n (非時・仮想), n (ぬ・否定)の助動詞の接続した諸形式をさす。

2.1.2 tan, tē:nの接続した複合形式

tan, tē:nは助動詞の中では、どの助動詞よりも文の最末尾に位置する。この tan, tē:nが派生形式を承けた複合形式を示すと、次の通りである。

- kakjutan (書きつつあった。基本・過去)
- katjutan (書いていた。継続・過去)
- katjē:tan (書いてあった。既存・過去)
- katjiatan (書いてあった。完了・過去)
- kakjutē:n (もし〜すると、書くところであった。基本・非時)
- katjutē:n (もし〜すると、書いているところであった。継続・非時)
- katjē:tē:n (もし〜すると、書いてあるところであった。既存・非時)
- katjiatē:n (もし〜すると、書いてしまつてあるところであつた。完了・非時)

以上の記述からもわかるように、tanがあらわれると、「過去」という時が表現され、tē:nがあらわれると、時とは関係なく過去・非過去にわたって用いられる「非時(仮想)」が表現される。そして、tan tē:nが接続しない派生形式は「時・非過去」を表現する。文法上の

カテゴリーとしては、「非過去・過去」で「時」を構成し、「時・非時」で「時制」を構成している。

派生形式とその派生形式に tan tɛːn の接続した複合形式との関係を示すと、第5表の通りになる。

kakjun（基本・非過去）には「進行」の意はあらわれないが、kakjutan（基本・過去）になると、これがあらわれる。katʃan（完了・非過去）は tan, tɛːn が接続する際は、katʃi（書いて）に atan（あった。基本・過去）または atɛːn（あったにちがいない。基本・非時）が接する構造をとり、融合した形とはならない。katʃiatanは共通語の「書いてあった」に対応するものであるが、katʃɛːtan（書いてあった。既存・過去）とは表わすアスペクトが違う。前者は動作が完了してしまった点に着目した表現であり、後者は動作の行なわれた結果が既に存している点に着目した表現である。瀬底方言でも hatʃatan（書いてしまっていた。完了・過去）と hatʃɛːtan（書いてあった。既存・過去）の両形が用いられているが、両者には上記のアスペクトの違いが明確にあらわれる。湯湾方言の katʃiatɛːn（完了・非時）と katʃɛːtɛːn（既存・非時）にも同様のアスペクトの違いがある。

2.1.3 n（ぬ・否定）が接続した複合形式

tan, tɛːnの直前に位置するのが否定の n である。第5表の諸形式を否定形式にし、更に第5表の肯定形式との関係を示すと、第6表の通りになる。

基本・肯定の諸形式は連用派生語幹を軸として成立し、基本・否定は基本語基語幹を軸として成立する。

第5表

基 本	{	時	非過去	kakjun (書く)
			過去	kakjutan (書きつつあった)
	{	時		kakjutē:n (もし〜すると、書くところであった)
			非過去	katʃun (書いている)
継 続	{	時	過去	katʃutan (書いていた)
				katʃutē:n (もし〜すると、書いているところであった)
	{	時	非過去	katʃē:n (書いてある)
			過去	katʃē:tan (書いてあった)
既 存	{	時		katʃē:tē:n (もし〜すると、書いてあるところであった)
			非過去	katʃan (書いた)
了	{	時	非過去	katʃiatan (書いてしまっていた)
			過去	katʃiatē:n (もし〜すると、書いてしまっているところであった)

第 6 表

基 本	肯 定	時	{ 非過去 過 去	kakjun (書く)
		非 時		kakjutan (書きつつあった)
	否 定	時	{ 非過去 過 去	kakjutë:n (もし~すると, 書くところであった)
		非 時		kakan (書かない)
継 続	肯 定	時	{ 非過去 過 去	kakantan (書かなかった)
		非 時		kakantë:n (もし~すると, 書かないところであった)
	否 定	時	{ 非過去 過 去	katjun (書いている)
		非 時		katjutan (書いていた)
既 存	肯 定	時	{ 非過去 過 去	katjutë:n (もし~すると, 書いているところであった)
		非 時		katjuran (書いていない)
	否 定	時	{ 非過去 過 去	katjuran tan (書いていなかった)
		非 時		katjuran tē:n (もし~すると, 書いていないところであった)
完 了	肯 定	時	{ 非過去 過 去	katjē:n (書いてある)
		非 時		katjē:tan (書いてあった)
	否 定	時	{ 非過去 過 去	katjē:tē:n (もし~すると, 書いてあるところであった)
		非 時		katjē:ne:n (書いてない)
完了	肯 定	時	{ 非過去 過 去	katjē:ne:ntan (書いてなかった)
		非 時		katjē:ne:ntē:n (もし~すると, 書いてないところであった)
	否 定	時	{ 非過去 過 去	katjan (書いた)
		非 時		katjatan (書いてしまっていた)
完了	肯 定	時	{ 非過去 過 去	katjatan (書いてしまっていた)
		非 時		katjatan tē:n (もし~すると, 書いてしまっているところであった)
	否 定	時	{ 非過去 過 去	katjine:n (まだ書いてない)
		非 時		katjine:ntan (まだ書いてなかった)
完了	肯 定	時	{ 非過去 過 去	katjine:ntē:n (もし~すると, まだ書いてないところであった)
		非 時		
	否 定	時	{ 非過去 過 去	
		非 時		

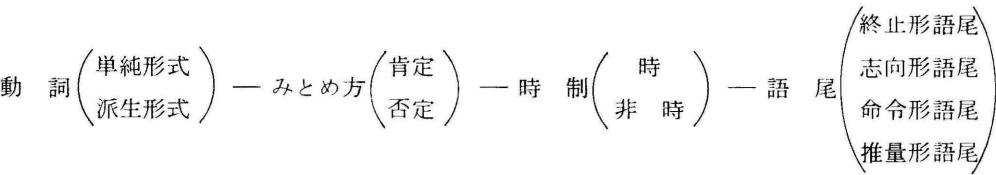
既然、完了の否定では n の代りに ne:n (ない・否定) が用いられる。これは、動詞の活用
の項でも述べたように、kaʃë:n (書いてある)
kaʃan (書いた) が「書いてあり」「書きたり」
の融合から成立し、その構成要素に ʔan (ある)
を有しているところから、ʔan (ある) の否定が
ne:n であるために必然的に起きた現象である。

2.1.4 第1種複合形式の内部構造まとめ

以上記述してきたように、助動詞の中で、文

の最末尾に位置するのは「時」「非時」を表わす
tan, tɛ:n であり、これは「時制」というカテ
ゴリーでまとめられる。その次に末尾に位置
するのが否定の n である。更に、活用形まで
考察に加えると、tan, tɛ:n よりも文の末尾
に位置するのは終止形、志向形、命令形、推
量形の各語尾ということになる。

以上の配列関係をまとめて示すと、次の通り
になる。



時制の中の「時」には「非過去」「過去」が含まれていることはもちろんである。

この構造は湯湾方言だけではなく、奄美・沖縄方言の第1種複合形式の基本的な構造と考え

る。
因に、湯湾方言で派生形式と認めなかった
kaʃiukjun に tan, tɛ:n, n が接続した諸形式を示すと、次の通りになる。

もくろみ (基本)	肯定	時	非過去	kaʃiukjun (書いておく)
			過去	kaʃiukjutan (書いておいた)
		非時	……	kaʃiukjutɛ:n (もし~すると、書いておくところであった)
	否定	時	非過去	kaʃiukan (書いておかない)
			過去	kaʃiukantan (書いておかなかった)
		非時	……	kaʃiukantɛ:n (もし~すると、書いておかないところであった)

2.2.1 第2種複合形式の内部構造

第2種複合形式とは ufagisa:n (～しそうだ・様子) ufasa:n (～したい・願望)

jassa:n (～しやすい・容易) gurufa:n (～しにくい・困難) の助動詞の接続した諸形式のことをさす。これらは形容詞的な活用をする助動詞である。

2.2.2 ufagisa:n の接続した複合形式

n (否定) ne:n (否定) の直前に位置するのが ufagisa:n である。すなわち, $\text{tan:të:n} \cdot n \cdot \text{ne:n}$ について文末に近く位置する。第5・6表の表示方法に従って, この助動詞が動詞の単純形式(連用形接続)に接続し, 更に肯定・否定, 時・非時の形式を伴って成立する諸形式を示すと, 第7表の通りになる。

最後の $\text{kakifagikune:ntë:n}$ を例にとって, その内部構造を分析して示すと, 次の通りになる。

$\text{kaki} - \text{ufagiku} - \text{ne:n} - \text{të:n}$
 動詞 様子 否定 非時・終止
 (連用形) 形語尾

ufagisa:n は動詞派生形式 kafun (書いてある・継続) kafë:n (書いてある, 既存) の連用形も承けえると予想されるが, 未調査のため, その諸形式を示すことができない。因に瀬底方言では動詞派生形式 hafin (継続) hufe:n (既存) の連用形も承けることができる(第8表)。但し, hafan (完了) は承けえない。同方言ではこの助動詞は gife:n (～しそうだ・様子) であらわれる。

2.2.3 ufasa:n (～したい, 願望) jassa:n (～しやすい, 容易) gurifa:n (～しにくい・困難) の接続した複合形式

ufagisa:n (様子) の直前に位置するのがこのみつつの助動詞である。このみつつの助動

詞相互の間には配列上の前後関係はなさそうである。そもそもこのみつつの助動詞は相互に承接し合うことは意味的に不可能で, 文の要請に従って, ひとつが取り上げられたら, 他のふたつは必然的に同一文にはあらわれることができない。従って, この三者における配列の前後関係は問題にならないといってもよさそうである。

これまでの表示方法に従って, これらの助動詞が動詞の単純形式(連用形接続)を承け, 更にみとめ方, 時制の助動詞を伴って成立する諸形式を示すと, 第9表の通りになる。

最後の形式 $\text{kakigurufo:ne:ntë:n}$ を例にとって, その内部構造を分析して示すと, 次の通りになる。

$\text{kaki} - \text{gurufo:} - \text{ne:n} - \text{të:n}$
 動詞 困難 否定 非時・終止
 (連用形) 形語尾
 gurufo: となるべきところを gurufo: となっているのは, 係助詞 ja (は) が融合しているためである。

これらの助動詞は動詞派生形式 kafun (継続) の連用形も承けえると予想されるが, 未調査である。因に, 瀬底方言では, これらの助動詞は bufe:n (～したい・願望) jaffen (～しやすい・容易) gurife:n (～しにくい・困難) の形であらわれ, 動詞派生形式 hafin (継続) の連用形も承けることができる(第10表)。但し, hufe:n (既存) hafan (完了) は承けることができない。

また, これらみつつの助動詞が ufagisa:n (～しそうだ, 様子) に先行することも確実だと思われるが, 未確認である。因に, 瀬底方言では bufe:n , jaffen , gurife:n は gife:n (様子) に先行し, 第11表のように用いられている。

第7表

様 子	肯 定	時	非過去	kakiŋagisa:n (書きそうだ)
			過 去	kakiŋagisa:tan (書きそうであった)
		非 時		kakiŋagisa:tē:n (もし~すると, 書きそうなところであった)
	否 定	時	非過去	kakiŋagikune:n (書きそうでない)
			過 去	kakiŋagikune:ntan (書きそうでなかった)
		非 時		kakiŋagikune:ntē:n (もし~すると, 書きそうでないところであった)

第8表 (瀬底方言)

様 子	肯 定	時	非過去	hatŋi:gife:n (書いていそうだ)
			過 去	hatŋi:gisatan (書いていそうだった)
		非 時		hatŋi:gisate:n (もし~すると, 書いていそうなところであった)
	否 定	時	非過去	hatŋi:gikune:n (書いていそうでない)
			過 去	hatŋi:gikune:ntan (書いていそうでなかった)
		非 時		hatŋi:gikune:nte:n (もし~すると, 書いていそうでないところであった)

様 子	肯 定	時	非過去	hatŋe:gife:n (書いてありそうだ)
			過 去	hatŋe:gisatan (書いてありそうだった)
		非 時		hatŋe:gisate:n (もし~すると, 書いてありそうなところであった)
	否 定	時	非過去	hatŋe:gikune:n (書いてありそうでない)
			過 去	hatŋe:gikune:ntan (書いてありそうでなかった)
		非 時		hatŋe:gikune:nte:n (もし~すると, 書いてありそうでないところであった)

第9表

願 望	肯 定	時	非過去	kakiŋasa:n (書きたい)
			過 去	kakiŋasatan (書きたかった)
		非 時		kakiŋasatë:n (もし~すると、書きたいところであった)
	否 定	時	非過去	kakiŋakune:n (書きたくない)
			過 去	kakiŋakune:ntan (書きたくなかった)
		非 時		kakiŋakune:ntë:n (もし~すると、書きたくないところであった)
容 易	肯 定	時	非過去	kakijassa:n (書きやすい)
			過 去	kakijassatan (書きやすかった)
		非 時		kakijassatë:n (もし~すると、書きやすいところであった)
	否 定	時	非過去	kakijasso:ne:n (書きやすくない)
			過 去	kakijasso:ne:ntan (書きやすくなかった)
		非 時		kakijasso:ne:ntë:n (もし~すると、書きやすくないところであった)
困 難	肯 定	時	非過去	kakiguruŋa:n (書きにくい)
			過 去	kakiguruŋa:tan (書きにくかった)
		非 時		kakiguruŋa:të:n (もし~すると、書きにくいところであった)
	否 定	時	非過去	kakiguruŋo:ne:n (書きにくくない)
			過 去	kakiguruŋo:ne:ntan (書きにくくなかった)
		非 時		kakiguruŋo:ne:ntë:n (もし~すると、書きにくくないところであった)

第 10 表 (瀬底方言)

願 望	肯 定	時	{ 非過去	hatʃi:buʃe:n (書いていたい)
			{ 過 去	hatʃi:busatan (書いていたかった)
		非 時		hatʃi:busate:n (もし~すると, 書いていたいところであった)
	否 定	時	{ 非過去	hatʃi:bukune:n (書いていたくない)
			{ 過 去	hatʃi:bukune:ntan (書いていたくなかった)
		非 時		hatʃi:bukune:nte:n (もし~すると, 書いていたくないところであった)
容 易	肯 定	時	{ 非過去	hatʃi:jaʃʃen (書いていやすい)
			{ 過 去	hatʃi:jaʃʃe:tan (書いていやすかった)
		非 時		hatʃi:jaʃʃe:ten (もし~する, 書いていやすいところであった)
	否 定	時	{ 非過去	hatʃi:jakkune:n (書いていやすくない)
			{ 過 去	hatʃi:jakkune:ntan (書いていやすくなかった)
		非 時		hatʃi:jakkune:nte:n (もし~すると, 書いていやすくないところであった)
困 難	肯 定	時	{ 非過去	hatʃi:gurife:n (書いてにくい)
			{ 過 去	hatʃi:gurisatan (書いてにくかった)
		非 時		hatʃi:gurisate:n (もし~すると, 書いてにくいところであった)
	否 定	時	{ 非過去	hatʃi:gurikune:n (書いてにくくない)
			{ 過 去	hatʃi:gurikune:ntan (書いてにくくなかった)
		非 時		hatʃi:gurikune:nte:n (もし~すると, 書いてにくくないところであつた)

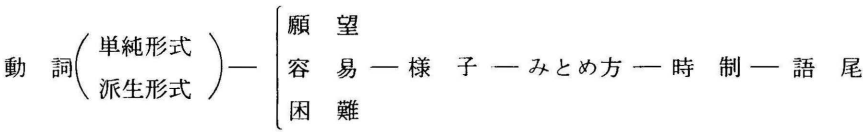
第 11 表 (瀬底方言)

願望 - 様子	肯 定	時	非過去	hakibuſe:giſe:n	(書きたさそうだ)
			過 去	hakibuſe:giſatan	(書きたさそうだった)
		非 時		hakibuſe:giſate:n	(もし〜すると, 書きたさそうなところであった)
	否 定	時	非過去	hakibuſe:gikune:n	(書きたさそうでない)
			過 去	hakibuſe:gikune:ntan	(書きたさそうでなかった)
		非 時		hakibuſe:gikune:nte:n	(もし〜すると, 書きたさそうでないところであった)
容易 - 様子	肯 定	時	非過去	hakijaſſe:giſe:n	(書きやすそうだ)
			過 去	hakijaſſe:giſatan	(書きやすそうだった)
		非 時		hakijaſſe:giſate:n	(もし〜すると, 書きやすそうなところであった)
	否 定	時	非過去	hakijaſſe:gikune:n	(書きやすそうでない)
			過 去	hakijaſſe:gikune:ntan	(書きやすそうでなかった)
		非 時		hakijaſſe:gikune:nte:n	(もし〜すると, 書きやすそうでないところであった)
困難 - 様子	肯 定	時	非過去	hakigurife:giſe:n	(書きにくそうだ)
			過 去	hakigurife:giſatan	(書きにくそうだった)
		非 時		hakigurife:giſate:n	(もし〜すると, 書きにくそうなところであった)
	否 定	時	非過去	hakigurife:gikune:n	(書きにくそうでない)
			過 去	hakigurife:gikune:ntan	(書きにくそうでなかった)
		非 時		hakigurife:gikune:nte:n	(もし〜すると, 書きにくそうでないところであった)

2.2.4 第2種複合形式の内部構造まとめ

以上第2種複合形式までの内部構造をまとめ

て示すと、次のようになる。



「みとめ方」以下は先に詳しく記述したので、ここでは簡略化して記した。

2.3.1 第3種複合形式の内部構造

第3種複合形式とは rin (れる, 受身・可能), fun (す・使役)の助動詞の接続した諸形式のことをさす。このふたつの助動詞がこれまでの第1種, 第2種で述べた助動詞と厳然と区別されるのは, これらの助動詞自身が継続・

既存・完了のアスペクトの語形変化をも有している点である。

2.3.2 rin (れる, 受身・可能)の接続した複合形式

まず, 動詞の単純形式(未然形)に rin が接続した諸形式をこれまでの表示方法に従って示すと, 第12表の通りになる。

第12表

受身基本	肯 定	時	非過去	kakarĩn (書かれる)
			過 去	kakarĩ:tan (書かれた)
		非 時	……………	kakarĩ:të:n (もし~すると, 書かれるところであった)
	否 定	時	非過去	kakaran (書かれない)
			過 去	kakarantan (書かれなかった)
		非 時	……………	kakarantë:n (もし~すると, 書かれないところであった)

rinの継続・既存・完了はそれぞれ kakattun (書かれている) kakattë:n (書かれてある) kakattan (書かれた)であるが, それぞれの「過去」「非時」の形式が未調査で示すことができない。

因に, 瀬底方言の基本・継続・既存・完了の諸形式を示すと, 第13表の通りになる。当方言では, この助動詞は ri:n (れる, 受身・可能)である。

受身・完了には肯定・否定, 時・非時の区別

は存しない。

以上は rinの立場からみた基本・継続・既存・完了の諸形式であるが, 一方, 動詞 hakun (書く)の立場からみれば, 上記の諸形式はすべて動詞の基本に接続したものである。第13表の肯定・非過去の形式を例にとって, その構造を示すと, 次の通り。

第 13 表 (瀬底方言)

受身基本	肯定	時	{	非過去	hakari:n (書かれる)
		過去		hakari:tan (書かれた)	
	非時		hakari:te:n (もし〜すると、書かれるところであった)		
	否定	時	{	非過去	hakaran (書かれない)
過去		hakarantan (書かれなかった)			
	非時		hakarante:n (もし〜すると、書かれないところであった)		
受身継続	肯定	時	{	非過去	hakattin (書かれている)
		過去		hakattutan (書かれていた)	
	非時		hakattute:n (もし〜すると、書かれているところであった)		
	否定	時	{	非過去	hakatturan (書かれていない)
		過去		hakatturantan (書かれていなかった)	
	非時		hakatturante:n (もし〜すると、書かれていないところであった)		
受身既存	肯定	時	{	非過去	hakatte:n (書かれてある)
		過去		hakatte:tan (書かれてあった)	
	非時		hakatte:te:n (もし〜すると、書かれてあるところであった)		
	否定	時	{	非過去	hakattine:n (書かれてない)
過去		hakattine:ntan (書かれてなかった)			
	非時		hakattine:nte:n (もし〜すると、書かれてないところであった)		
受身完了					hakattan (書かれた)

haka (動詞・基本) — $\left\{ \begin{array}{l} ri:n \text{ (受身・基本)} \\ ttin \text{ (〃・継続)} \\ tte:n \text{ (〃・既存)} \\ ttan \text{ (〃・完了)} \end{array} \right.$

他に、動詞の継続に接続した諸形式もあり、それらの構造は次の通り。

hatjura (動詞・継続) — $\left\{ \begin{array}{l} ri:n \text{ (受身・基本)} \\ ttin \text{ (〃・継続)} \\ tte:n \text{ (〃・既存)} \\ ttan \text{ (〃・完了)} \end{array} \right.$

この動詞の継続に接した具体的な諸形式を示すと、第14表の通りになる。

ri:n (れる) は hatje:n (書いてある。既存) hatjan (書いた, 完了) には接しえない。

以上は瀬底方言の例である。

次に、湯湾方言の rin が tjasa:n (～したい) jassa:n (～しやすい) gurufa:n (～しにくい) の直前に位置することは確かだと思われるが未確認である。瀬底方言では次のようにあらわれる。

haka ri: bufe: giku ne:n tan
動詞・受身・願望 様子 否定 過去・終
基本 基本 止形語尾
(書かれたさそうでなかった)

hatjura ri: bufe: giku ne:n tan
動詞・受身・願望 様子 否定 過去・終
継続 基本 止形語尾
(書いていられたさそうでなかった)

haka ri: jaffe: giku ne:n tan
動詞・受身・容易 様子 否定 過去・終
基本 基本 止形語尾
(書かれやすそうでなかった)

hatjura ri: jaffe: giku ne:n tan
動詞・受身・容易 様子 否定 過去・終
継続 基本 止形語尾

(書いていられやすそうでなかった)

2.3.3 fun (す・使役) の接続した複合形式
fun が動詞の単純形式に接続した諸形式を示すと、第15表の通りである。

fun の継続・既存・完了はそれぞれ kakatfun (書かせている) kakatfe:n (書かせてある) kakatjan (書かせた) であるが、それぞれの過去・非時の形式は未調査である。

因に、瀬底方言の基本・継続・既存・完了の諸形式を示すと、第16表の通りになる。当方言では使役の助動詞は sun である。

使役・完了には肯定・否定、時・非時の区別はない。

以上は sun の立場からみた基本・継続・既存・完了であるが、一方、hakun (書く) の立場からみれば、上記の諸形式はすべて hakun の基本に接続したものである。第16表の肯定・非過去の形式を例にとって、その構造を示すと、次の通りになる。

haka (動詞・基本) — $\left\{ \begin{array}{l} sun \text{ (使役・基本)} \\ tjin \text{ (〃・継続)} \\ tje:n \text{ (〃・既存)} \\ tjan \text{ (〃・完了)} \end{array} \right.$

他に、動詞の継続、具体的には「書く」の継続 hatjura にも接する。これを示すと、第17表の通りになる。

ri:n (受身・可能) と同様、 hatje:n (既存) hatjan (完了) には接しえない。

以上は瀬底方言の例である。

次に、湯湾方言の fun が rin (受身・可能) の直前に位置することは、次の例でもわかる。

Funĩ kugasarin (船を漕がされる)

因に、瀬底方言では次のようにあらわれる。

第 14 表

動詞派生(継続)形式を承けたもの(瀬底方言)

受身基本	肯定	時	{	非過去	hatŋurari:n (書いていられる)
		過去		hatŋurari:tan (書いていられた)	
		非時		hatŋurari:te:n (もし~すると、書いていられるところであった)	
	否定	時	{	非過去	hatŋuraran (書いていられない)
		過去		hatŋurarentan (書いていられなかった)	
		非時		hatŋurarente:n (もし~すると、書いていられないところであった)	
受身継続	肯定	時	{	非過去	hatŋurattin (書いていられている)
		過去		hatŋurattutan (書いていられていた)	
		非時		hatŋurattute:n (もし~すると、書いていられているところであった)	
	否定	時	{	非過去	hatŋuratturan (書いていられていない)
		過去		hatŋuratturanttan (書いていられていなかった)	
		非時		hatŋuratturante:n (もし~すると、書いていられていないところであった)	
受身既存	肯定	時	{	非過去	hatŋurate:n (書いていられてある)
		過去		hatŋurate:tan (書いていられてあった)	
		非時		hatŋurate:te:n (もし~すると、書いていられてあるところであった)	
	否定	時	{	非過去	hatŋurattine:n (書いていられてない)
		過去		hatŋurattine:ntan (書いていられてなかった)	
		非時		hatŋurattine:nte:n (もし~すると、書いていられてないところであった)	
受身完了		hatŋurattan (書いていられてしまった)			

第 15 表

使役基本	肯 定	時	非過去	kakaſun (書かす)
			過 去	kakaſutan (書かせた)
		非 時		kakaſutë:n (もし~すると, 書かせるところであった)
	否 定	時	非過去	kakasan (書かさない)
			過 去	kakasantan (書かさなかった)
		非 時		kakasantë:n (もし~すると, 書かさないところであった)

第 16 表 (瀬底方言)

使役基本	肯定	時	{	非過去	hakasun (書かす)
				過去	hakasutan (書かせた)
	否定	非時			hakasute:n (もし〜すると, 書かせるところであった)
		時	{	非過去	hakasan (書かさない)
使役継続	肯定			過去	hakasantan (書かさなかった)
		非時			hakasante:n (もし〜すると, 書かさないところであった)
	否定	時	{	非過去	hakatfin (書かせている)
				過去	hakatfutan (書かせていた)
使役既存	肯定	非時			hakatfute:n (もし〜すると, 書かせているところであった)
		時	{	非過去	hakatfuran (書かせていない)
	否定			過去	hakatfurantan (書かせていなかった)
		非時			hakatfurante:n (もし〜すると, 書かせていないところであった)
使役完了	肯定	時	{	非過去	hakatfe:n (書かせてある)
				過去	hakatfe:tan (書かせてあった)
	否定	非時			hakatfe:te:n (もし〜すると, 書かせてあるところであった)
		時	{	非過去	hakatfinen (書かせてない)
使役完了	肯定			過去	hakatfinentan (書かせてなかった)
		非時			hakatfinente:n (もし〜すると, 書かせてないところであった)
	否定	時	{	非過去	hakatfan (書かせた)
				過去	

第 17 表

動詞派生(継続)を承けた例

使役基本	肯定	時	{	非過去	hatʃurasun (書いておらす)
				過去	hatʃurasutan (書いておらした)
		非時		hatʃurasute:n (もし~すると, 書いておらせるところであった)	
	否定	時	{	非過去	hatʃurasan (書いておらさない)
				過去	hatʃurasantan (書いておらさなかった)
		非時		hatʃurasante:n (もし~すると, 書いておらさないところであった)	
使役継続	肯定	時	{	非過去	hatʃuraʃin (書いておらせている)
				過去	hatʃuraʃutan (書いておらせていた)
		非時		hatʃuraʃute:n (もし~すると, 書いておらせているところであった)	
	否定	時	{	非過去	hatʃuraʃuran (書いておらせていない)
				過去	hatʃuraʃurantan (書いておらせていなかった)
		非時		hatʃuraʃurante:n (もし~すると, 書いておらせていないところであった)	
使役既存	肯定	時	{	非過去	hatʃuraʃe:n (書いておらせてある)
				過去	hatʃuraʃe:tan (書いておらせてあった)
		非時		hatʃuraʃe:te:n (もし~すると, 書いておらせてあるところであった)	
	否定	時	{	非過去	hatʃuraʃinen (書いておらせてない)
				過去	hatʃuraʃinentan (書いておらせてなかった)
		非時		hatʃuraʃinente:n (もし~すると, 書いておらせてないところであった)	
使役完了		hatʃuraʃan (書いておらせた)			

haka sa ri: bufe: giku ne:n

動詞・ 使役・ 受身・ 願望 様子 否定
基本 基本 基本

tan

過去・終
止形語尾

2.3.4 第3種複合形式の内部構造まとめ

以上、第3種複合形式までの内部構造をまとめて示すと、次のようになる。

動 詞 $\left(\begin{array}{l} \text{単純形式} \\ \text{派生形式} \end{array} \right) \text{ --- 使役 --- 受身 --- } \left\{ \begin{array}{l} \text{願望} \\ \text{容易} \\ \text{困難} \end{array} \right. \text{ --- 様子 --- みとめ方 --- 時制 --- 語尾}$

前述したように、第3種複合形式の構成要素である rin(受身・可能) sun(使役)には動詞と同様、基本・継続・既存・完了の語形替変もあるので、このふたつの助動詞の他との承接関係はきわめて複雑多岐にわたっている。しかし、どんなに複雑な様相をおびたとしても、それらの中には上記の配列構造が厳然と存している。

因に、瀬底方言においては、rin(受身・可能) sun(使役)はアスペクトの語形替変を有すると同時に、それらの活用形も動詞とほぼ平行的に存している。しかし、bufe:n(願望)以下の助動詞になると、そのアスペクトの語形はなくなる。更に、文末に近い助動詞ほど活用形も少なくなる傾向がある。

第18表

△動詞の基本に接続した例

ていねい	肯定	時	非過去	kakjawon(書きます)
			過去	kakjawotan(書きつつありました)
		非時		kakjawotë:n(もし、~すると、書くところでした)
	否定	時	非過去	kakjaworan(書きません)
			過去	kakjaworantan(書きませんでした)
		非時		kakjaworantë:n(もし~すると、書かないところでした)

△動詞の継続に接続した例

ていねい	肯定	時	非過去	katɕujawon (書いています)
			過去	katɕujawotan (書いていました)
		非時		katɕujawotë:n (もし~すると、書いているところでした)
	否定	時	非過去	katɕujaworan (書いていません)
			過去	katɕujaworantan (書いていませんでした)
		非時		katɕujaworantë:n (もし~すると、書いていないところでした)

△動詞の既存に接続した例

ていねい	肯定	時	非過去	katɕiajawon (書いてあります)
			過去	katɕiajawotan (書いてありました)
		非時		katɕiajawotë:n (もし~すると、書いてあるところでした)
	否定	時	非過去	katɕiajaworan (書いてありません)
			過去	katɕiajaworantan (書いてありませんでした)
		非時		katɕiajaworantë:n (もし~すると、書いてないところでした)

動詞の完了に接続した例は調査不十分のため示すことができない。因に、katɕiukjun (書いておく・もくろみ) に接した諸形式も調査してあるので、示しておく。

ていねい	肯定	時	非過去	katɕiukjawon (書いておきます)
			過去	katɕiukjawotan (書いておきました)
		非時		katɕiukjawotë:n (もし~すると、書いておくところでした)
	否定	時	非過去	katɕiukjaworan (書いておきません)
			過去	katɕiukjaworantan (書いておきませんでした)
		非時		katɕiukjaworantë:n (もし~すると、書いておかないところでした)

上記第18表の諸形式からもわかるように、jawonを普通の表現形式の配列構造に位置づけるとすれば、みとめ方(肯定・否定)の直前である。動詞・基本に接した否定・過去の形式を例にとって、分析して示すと、次の通りである。

kakja	wora	n	tan
動詞・基本	ていねい	否定	過去・終止形語尾

一方、「使役」「受身・可能」「願望」「様子」等との前後関係はどうであろうか。

「使役」「受身・可能」に接続した例を示

すと、第19表の通りになる。

第19表

使役ていねい	肯定	時	非過去	kakaſawon (書かせます)
			過去	kakaſawotan (書かせました)
		非時	………	kakaſawotë:n (もし〜すると、書かすところでした)
	否定	時	非過去	kakaſaworan (書かせません)
			過去	kakaſaworantan (書かせませんでした)
		非時	………	kakaſaworantë:n (もし〜すると、書かさないところでした)
受身ていねい	肯定	時	非過去	kakarïjawon (書かれます)
			過去	kakarïjawotan (書かれました)
		非時	………	kakarïjawotë:n (もし〜すると、書かれるところでした)
	否定	時	非過去	kakarïjaworan (書かれません)
			過去	kakarïjaworantan (書かれませんでした)
		非時	………	kakarïjaworantë:n (もし〜すると、書かれないところでした)

以上の諸形式からもわかるように、 jawon は ſun, rīn よりも文末に近く位置する。

「願望」「容易」「困難」「様子」との前後関係は湯湾方言においては未確認であるが、次の古仁屋方言(奄美大島瀬戸内町)、瀬底方言の例からすれば、 jawon は「様子」の直後に位置づくであろうことが推定されうる。

古仁屋方言の例

kak buſar jawor (書きたいです)

動詞・
基本 願望 ていねい

kak jassar jawor (書きやすいです)

動詞・
基本 容易 ていねい

kaki gurufa wor (書きにくいです)

動詞・
基本 困難 ていねい

kak ũagësar jawor (書そうです)

動詞・
基本 様子 ていねい

瀬底方言の例

haki buſe: gife: bira n tan

動詞・
基本 願望 様子 ていねい 否定 過去

(書きたそうでありませんでした)

haki jaſſe: gife: bira n tan

動詞・
基本 容易 様子 ていねい 否定 過去

(書きやすそうでありませんでした)

haki guriſe: giſe: bira n tan
 動詞・ 困難 様子 ていねい 否定 過去
 基本

動詞の連用形に接続した諸形式を示すと、第20表の通りになる。

(書きにくそうでありませんでした)

3.2 nſo:jun (～しなさる。～していっしやる)の接続した複合形式

nſo:junは尊敬を表わす。これは動詞の連用形に接続する。これまでの表示方法に従って

第20表

尊 敬 基 本	肯 定	時	非過去	kakinſo:jun (お書きになる)
			過 去	kakinſo:jutan (お書きになりつつあった)
		非 時	……………	kakinſo:jutë:n (もし～すると、お書きになるところであった)
	否 定	時	非過去	kakinſo:ran (お書きにならない)
			過 去	kakinſo:rantan (お書きにならなかった)
		非 時	……………	kakinſo:rantë:n (もし～すると、お書きにならないところであった)
尊 敬 継 続	肯 定	時	非過去	kakinſo:ŵun (お書きになっている)
			過 去	kakinſo:ŵutan (お書きになっていた)
		非 時	……………	kakinſo:ŵutë:n (もし～すると、お書きになっているところであった)
	否 定	時	非過去	kakinſo:ŵuran (お書きになっていない)
			過 去	kakinſo:ŵurantan (お書きになっていなかった)
		非 時	……………	kakinſo:ŵurantë:n (もし～すると、お書きになっていないところであった)
尊 敬 既 存	肯 定	時	非過去	kakinſo:ŵë:n (お書きになってある)
			過 去	kakinſo:ŵë:tan (お書きになってあった)
		非 時	……………	kakinſo:ŵë:të:n (もし～すると、お書きになってあるところであった)
	否 定	時	非過去	kakinſo:ŵine:n (お書きになってない)
			過 去	kakinſo:ŵine:ntan (お書きになってなかった)
		非 時	……………	kakinſo:ŵine:ntë:n (もし～すると、お書きになってないところであった)

第20表からもわかるように、nfo: jun はそれ自身基本・継続・既存のアクスクトの語形替変を有している。完了の形式については調査不十分のため示すことができない。因に、瀬底方言の諸形式を示すと、第21表の通りになる。

第19表の諸形式からもわかるように、

nfo: junを普通の表現形式の配列構造の中に位置づけるならば、みとめ方(肯定・否定)の前であることがわかる。すなわち、基本・否定・過去の形式を例にとって、分析して示すと、次の通りである。

第21表 (瀬底方言)

尊 敬 基 本	肯 定	時	非過去	hakinso: jun (お書きになる)
			過 去	hakinso: jutan (お書きになりつつあった)
		非 時	……………	hakinso: jute: n (もし～すると、お書きになるところであった)
	否 定	時	非過去	hakinso: ran (お書きにならない)
			過 去	hakinso: rantan (お書きにならなかった)
		非 時	……………	hakinso: rante: n (もし～すると、お書きにならないところであった)
尊 敬 継 続	肯 定	時	非過去	hakinso: ũin (お書きになっている)
			過 去	hakinso: ũutan (お書きになっていた)
		非 時	……………	hakinso: ũute: n (もし～すると、お書きになっているところであった)
	否 定	時	非過去	hakinso: ũuran (お書きになっていない)
			過 去	hakinso: ũurantan (お書きになっていなかった)
		非 時	……………	hakinso: ũurante: n (もし～すると、お書きになっていないところであった)
尊 敬 既 存	肯 定	時	非過去	hakinso: ũe: n (お書きになってある)
			過 去	hakinso: ũe: tan (お書きになってあった)
		非 時	……………	hakinso: ũe: te: n (もし～すると、お書きになってあるところであった)
	否 定	時	非過去	hakinso: ũe: ne: n (お書きになってない)
			過 去	hakinso: ũe: ne: ntan (お書きになってなかった)
		非 時	……………	hakinso: ũe: ne: nte: n (もし～すると、お書きになってないところであった)

尊 敬 完 了	肯 定	時	非過去	hakinso:ɬan (お書きになった)
			過 去	hakinso:ɬatan (お書きになってしまっていた)
		非 時		hakinso:ɬate:n (もし~すると、お書きになってしまっ てあるところであった)
	否 定	時	非過去	hakinso:ɬine:n (お書きになってない)
			過 去	hakinso:ɬine:ntan (お書きになってなかった)
		非 時		hakinso:ɬine:nte:n (もし~すると、お書きになってな いところであった)

kaki nfo:ra n tan

動詞連用形 尊敬 否定 過去

では、jawon (ていねい) との前後関係はどうかという、これは次の例からもわかるように、nfo:jun は jawon より前に位置する。

kaki nfo:ɬu jawora n tan

(書きなさいませんでした)

kaki nfo:ɬia jawora n tan

(書きなさってありませんでした)

次に、ɬagisa:n (～しそうだ、様子) との前後関係は、湯湾方言においては未確認であるが、次の古仁屋方言、瀬底方言の例からすれば、「様子」の直前に位置づくものと推定される。

古仁屋方言

kaki mifor ɬagisa

動詞・基本 尊 敬 様 子
(書きそうにしていられっやる)

瀬底方言

haki nfe: gife: bin

動詞・基本 尊 敬 様 子 ていねい
(お書きになる様子です)

一方、「使役」「受身・可能」「願望」等との前後関係はどうであろうか。

「使役」に接続した湯湾方言の例を示すと、第22表の通りになる。

第 22 表 使役尊敬	肯 定	時	非過去	kakaɬinfo:jun (書かせていられっやる)
			過 去	kakaɬinfo:jutan (書かせていらした)
		非 時		kakaɬinfo:jutë:n (もし~すると、書かせていられっ やるところであった)
	否 定	時	非過去	kakaɬinfo:ran (書かせていられっやらない)
			過 去	kakaɬinfo:rantan (書かせていられっやなかった)
		非 時		kakaɬinfo:rantë:n (もし~すると、書かせていられっ やらないところであった)

上記の諸形式からもわかるように、nfo:jun は「un (使役) よりも文末に近く位置する。

「受身」「願望」「容易」「困難」との前後関係は湯湾方言においては未確認であるが、次

の古仁屋方言の例からすれば、nfo:jun は「願望」等の直後に位置づくものと推定される。

kaka rï mifor

動詞・基本 受身・基本 尊敬

(書かれていらっしやる)

kak bufa ʃimiʃor
動詞・基本 願望 尊敬

(書きたくしなさる)

kaki jassari nʃo:ʃur
動詞・基本 容易 尊敬

(書きやすくしなさる)

kak gurufa ʃimiʃor
動詞・基本 困難 尊敬

(書きにくくしなさる)

kak bufa ʃinʃor jawora n ta
動詞・基本 願望 尊敬 ていねい 否定 過去

(書きたくしていっしやらなかった)

以上述べてきたように、nʃo:ʃun(尊敬)は普通の表現形式の配列構造の中に位置づけると、「願望」等の直後、「様子」の直前に位置するものと解される。

因に、瀬底方言では次のような発話が可能である。

haka sa ri jaffe: nʃe: giku
動詞・基本 使役 受身 容易 尊敬 様子
ne: jabira n tan
否定 ていねい 否定 過去

(書かされやすくいらっしやる様子ではありませんでした)

この発話では ne: と n のふたつの否定があるが琉球方言では ne:nu(ないぬ)の二重否定で肯定を表わすのではなくて、否定を表わすという特徴がある。これについては伊波普猷著「南島方言史故」(『伊波普猷全集』第四巻)で詳述されている。この発話では ne:jabira n と否定と否定の間にていねい形式がはさまれる形になっているが、真の否定はやはり後の n によって表わされている。

4. 複合形式の内部構造

奄美・沖縄方言の複合形式の内部構造を、ていねい、尊敬をも含めて、改めてまとめると、次の通りになる。

動詞 $\left(\begin{array}{l} \text{単純形式} \\ \text{派生形式} \end{array} \right)$ — 使役 — 受身 — $\left\{ \begin{array}{l} \text{願望} \\ \text{容易} \\ \text{困難} \end{array} \right.$
— 尊敬 — 様子 — ていねい — みとめ方 —
— 時制 — 語尾。

この構造を導き出すために、瀬底方言・古仁屋方言に依拠するところも多かった。更に、今後は他の琉球方言の内部構造とも比較考察してみる必要がある。

また、今後はこれら複合形式の内部構成要素が終助詞以外の助詞等とどうかわるのか、あるいは副詞的な語とはどうかわるのか、こういうところを解明していくところから琉球方言の構文論は展開されうるものとする。

5. 八重山川平方言の派生・複合形式

『琉球の方言』1975年で、八重山川平方言の派生・複合形式について記述したが、これは派生・複合形式を緻密に分析し、比較考察したものではなく、それゆえに、内部構造把握の仕方においていたって粗雑なところがあった。

今、改めて川平方言の派生・複合形式を比較考察してみると、湯湾方言の中に存した構造体系が同方言の中にも存していることがわかる。第1種複合形式を例にとって、川平方言を記述しなすと、第23表の通りになる。

第 23 表

基本	肯定	非過去	kakī (kakīn) (書く)
		過去	kakīta (書いた)
	否定	非過去	kakanu (書かない)
		過去	kakanahata (書かなかった)
継続	肯定	非過去	kakiurī (kakiun) (書いている)
		過去	kakiuta (書いていた)
	否定	非過去	kakiuranu (書いていない)
		過去	kakiuranahata (書いていなかった)
既存	肯定	非過去	kake:n (書いてある)
		過去	kake:hata (書いてあった)
	否定	非過去	kake:ne:nu (書いてない)
		過去	kake:ne:nahata (書いてなかった)

第 23 表からもわかるように、同方言にもアスペクトの語形変化がある。kakī (基本) kakiurī (継続) kake:n (既存) がそれである。但し、「完了」は見出しえなかった。川平方言では「過去」と「完了」は区別されていないらしく、「完了」の意味で調査すると、「過去」を表わす語形を得るのである。

これら kakī, kakiurī, kake:n の形式に ta (過去) と nu (否定) または ne:nu (否定) が接続すると、上記第 23 表の第 1 種複合形式が成立する。同方言にはまた、「非時」を表わす形式も見出しえない。第 23 表の最後の形式 kake:ne:nahata (書いてなかった) を例にとって分析すると、次の通りになる。

kake: ne:naha ta
動詞 否定 過去

上記分析からもわかるように、同方言にも次のような内部構造が存する。

動詞 $\left(\begin{array}{l} \text{単純形式} \\ \text{派生形式} \end{array} \right)$ — みとめ方 $\left(\begin{array}{l} \text{肯定} \\ \text{否定} \end{array} \right)$ —
時 $\left(\begin{array}{l} \text{非過去} \\ \text{過去} \end{array} \right)$ — 終止形語尾

この配列順は奄美・沖縄方言の場合と全く同じで、たゞこの構造の構成要素に多少違いがあるだけである。

但し、ここで注意すべきことは、kakiurī (継続) kake:n (既存) の成立過程である。これらはそれぞれ国語の「書きをり」「書きあむ」に対応するものと解される。一方、奄美・沖縄方言では、「継続」「既存」はそれぞれ国語の「連用形+てをり」「連用形+てあり」に対応し、それらの融合過程から成立したものであると説かれてきている(仲宗根政善・服部四郎説)。また、「連用形+てをるものを」「連用形+てあるものを」の融合過程から成立したとする説もある(平山輝男説)。いずれにして

も、これらの成立過程には「連用形+てをり」「連用形+てあり」が軸になっていることは事実である。これと川平方言とを比較してみると川平方言の「継続」「既存」はその成立過程において「て」をその内部に含んでいなかった点で、奄美・沖縄方言とは異なっていることがわかる。川平方言の「継続」を構成している「連

用形+をり」は、奄美・沖縄方言では「基本」の終止形を構成しているのである。
 以上の関係をもっと明確にするために、「書く」の派生・複合形式を例にとって、湯湾方言（奄美・沖縄方言）と川平方言（先島方言）と比較してみると、第24表の通りになる。

第24表

		湯 湾 方 言	川 平 方 言
連用形一	(イ) をり	kakjun, kakjui (書く) (基本・非過去)	kakiuri, kakiun (書いている) (継続・非過去)
	(ロ) あり	なし	kake:n (書いてある) (既存・非過去)
	(ハ) をりたり	kakjutan (書きつつあった) (基本・過去)	
	(ニ) をりてあり	kakjutë:n (書いたにちがいない) (基本・非時)	なし
	(ホ) てをり	katjun (書いている) (継続・非過去)	なし
	(ヘ) てあり	katjë:n (書いてある) (既存・非過去)	なし
	(ト) たり	katjan (完了・非過去)	なし

第24表の比較から次のことがわかる。

		湯湾方言	川平方言
連用形一	をり	基 本	継 続
	あり	な し	既 存
	てをり	継 続	な し
	てあり	既 存	な し
	たり	完 了	な し

すなわち、湯湾方言では「て」を介さないか、介するかによって、「基本」と「継続・既存・完了」とが区別されている。

では、湯湾方言における上記のような区別は川平方言ではどうなっているのだろうか。

これは同時に、川平方言の kaki, kakin (書く, 基本・肯定・非過去)の成立過程がどうなっているのかという問題につきあたる。

そこで、川平方言の実態をみてみると、第24表からもわかるように、同方言では「連用形+をり, あり」の結合は許しているけれども、「連用形+てをり, てあり, たり」の結合、すなわち「て」を介して「をり, あり」に結合する

ことは許していないことがわかる。

以上の実態をおさえて、同方言の *kakī*, *kakīn* (書く, 基本) の成立過程を推定するならば、これは「をり, あり」とか「てをり, てあり, たり」等の結合しない形, すなわち、奄美・沖縄方言で述べた真の基本形式 (単純形式) を想定せざるをえなくなる。 *kakī*, *kakīn* が基本形式 (単純形式) であるとするならば、 *kakī* は当然国語の連用形, すなわち「書き」に対応するものと解さなければならない。但し、 *kakīn* については以然として不明といわざるをえない。「書き」が *kakīn* になることは当方言の音韻対応上考えられないからである。しかし、大胆な推定を試みるならば、 *kakīn* の成立過程について次のようなことがいえそうである。いわゆる、宮古平良市方言等で

は、形容詞の終止形に *takamunu* (高い) が用いられている。宮古方言では一般に形容詞の終止形に *—munu* の形をよく用いている。これからすると、宮古方言と近い関係にある川平方言の動詞に「連用形 + *munu*」の *kakīmunu* (書く) を想定しても決して突飛なことではない。これが、 *kakīmunu* → *kakīmu* → *kakīn* と変化してきたのが現在の *kakīn* であると推定するのである。そうになると、 *kakīn* も連用形を軸として成立していることになる。また、同方言の *kakīta* (書いた, 基本・過去) は「書きた」に対応すると説明することができる。

以上の推定で述べてきたことを改めて表示してみると、第25表の通りになる。川平方言で「完了」が存しないのは「て」を介しての結合

第25表

		湯 湾 方 言	川 平 方 言
連用形—	(1) 「をり」 「あり」の 結合しない もの		<i>kakī</i> , <i>kakīn</i> (書く) (基本・非過去) <i>kakīta</i> (書いた) (基本・過去)
	(2) をり	<i>kakjun</i> , <i>kakjui</i> (書く) (基本・非過去)	<i>kakiuri</i> , <i>kakiun</i> (書いている) (継続・非過去)
	(3) あり	な し	<i>kake:n</i> (書いてある) (既存・非過去)
	(4) をりたり	<i>kakjutan</i> (書きつつあった) (基本・過去)	
	(5) をりてあり	<i>kakjutē:n</i> (書いたにちがいない) (基本・非時)	な し
	(6) てをり	<i>katjun</i> (書いている) (継続・非過去)	な し
	(7) てあり	<i>katjē:n</i> (書いてある) (既存・非過去)	な し
	(8) たり	<i>katjan</i> (書いた) (完了・非過去)	な し

を許さない当方言の当然の帰結といえそうである。

ところで、川平方言の連用形には *kak'i*, *ka-ki* 両形があらわれる。前者は *tsan* (～したい) *tagga:* (ばかり) 等に接続し、後者は結合度の強い *un* (居る) *du* (ぞ) と結合する時にあらわれる。*kak'i* は結合度の強い *un* (居る) *du* (ぞ) と結合する場合にのみあらわれるところから、古い連用形が残存したものと思われる、*kak'i* は *kaki* が川平方言の音韻体系に適合する過程で形成されたものと思われる。すなわち *kaki* → *kak'i* である。

以上、奄美・沖縄方言に存する「基本」と「継続・既存・完了」との区別を、川平方言にも平行的に適応して、同方言の *kak'i*, *kak'in* (書く、基本) の成立過程を推定した。この推定はかなり高い蓋然性を有するものと思われるが、しかし、宮古方言の派生・複合形式等も調査してみないと確かなことは言えない。

一方、視点を変えて、*kak'ita* (書いた、基本・過去) の成立過程をもう少し詳しく検討することによって、更に、*kak'i*, *kak'in* の成立過程にふれてみよう。

kak'ita は国語との対応を求めれば、「書きた」になりそうだということは前述した。但し他に対応の可能性を求めると、*kak'ita* は「書きをりをした」に対応する可能性もある。すなわち *kakiorita* → *kakiurita* → *kakiuta* → *ka-k'ita* である。

この推定に立つならば、*kak'ita* は第 25 表の(4)のところに位置づくことになる。

また、この推定に立脚して、川平方言の *ka-ki*, *kak'in* (書く・基本) についてみるならば、次のような結論がえられる。すなわち、川平方言の *kak'ita* の *kak'i* は湯湾方言の *kakju-*

utan の *kakju* に相当する。湯湾方言の *ka-kju* (準体形) は動詞の活用の項でも述べたように、同方言の *kakjun*, *kakjui* (書く、基本) とその成立過程を同じくし、共に「書き(連用形)+をり」の融合過程から成立している。そうすると、川平方言の *kak'ita* の *kak'i* も「書きをり」から成立しているものと解され、形をほぼ同じくする *kak'i*, *kak'in* (書く、基本) も同様に「書きをり」から成立しているものと解される。宮古・八重山方言の基本の終止形の成立を「書きをるものを」の融合から成立したとする説は従来も出されている(平山輝男『琉球先島方言の総合的研究』)

以上のように、川平方言の *kak'i*, *kak'in* の成立過程を推定するならば、*kak'i*, *kak'in* は第 25 表では(2)のところに位置づくことになる。

後者の推定に立って、川平方言の「基本」「継続」「既存」の関係を、湯湾方言との比較においてまとめて示してみると、次の通りになる。

	湯湾方言	川平方言
連用形	をり	基本
	あり	基本, 継続 既存
	をりたり	基本・過去
	てをり	基本・過去 継続
	てあり	継続 なし
	たり	既存 完了 なし

すなわち、奄美・沖縄方言では「基本」と「継続・既存・完了」とが構造上画然と対置しているのに対し、川平方言ではそれらが構造上のはりあい関係を示さないということになってしまふ。しかし、これはあくまでも通時的な面においてのことである。共時的にはもちろん、今までみてきたように、各々がはりあい関係を保っているのである。

また、後者の推定に立つと、連用形 *kak'i* と

基本の終止形 kakī とはもちろん別系統のものに属することになる。更に、kakin の成立についても、前者の推定よりはスムーズに説明できる。

以上、川平方言の kakiurī (継続) kake:n (既存) の成立過程と関連して、同方言の kakī, kakin (基本) の成立について、ふたつの異なる推定を示したが、現在のところどの推定が正しいと確信をもって言うことができない。他の琉球方言の派生・複合形式等も調査してから結論を出したい。

第23表とその内部構造から川平方言にも、奄美・沖縄方言とほぼ同じ配列構造があることがわかった。従って、『琉球の方言』1975では「動詞 一時 ひとめ方」の構造で記述したが、これは「動詞 ひとめ方 一時」の構造記述に訂正すべきである。

他の「使役」「受身・可能」「願望」「容易」「困難」「様子」等の配列構造も、奄美・沖縄方言とほぼ同じであると解されるが、調査不十分のため確かなことはいえない。次に、「ていねい」は川平方言では ju: で表わされる。これをこれまでの表示方法に従って示すと、第26表の通りとなる。

第26表からもわかるように、川平方言における「ていねい」形式は、第23表の普通表現形式の末尾に、ju: をつけばよいのである。

これは、奄美・沖縄方言と大きく異なる。奄美・沖縄方言では「ていねい」形式は、複合形式の構成要素の中で、次のような位置を占めた。

動詞…………… — 様子 — ていねい — ひとめ方
一時制 — 語尾
一方、川平方言では次の通りである。
動詞…………… — ひとめ方 一時 — 語尾 — て

第26表

基本	肯定	非過去	kakinju: (書きます)
		過去	kakītaju: (書きました)
	否定	非過去	kakanuju: (書きません)
		過去	kakanahataju: (書きませんでした)
継続	肯定	非過去	kakiurīju: (書いています)
		過去	kakīfuta ju: (書いていました)
	否定	非過去	kakiuranuju: (書いていません)
		過去	kakiuranahataju: (書いていませんでした)
既存	肯定	非過去	kake:nju: (書いてあります)
		過去	kake:hataju: (書いてありました)
	否定	非過去	kake:ne:nuju: (書いてありません)
		過去	kake:ne:nahataju: (書いていませんでした)

いねい

尊敬は o:r'in (~しなさる, ~してい

これは恐らく ju: が無活用で、むしろ終助詞的
性格を有するものであるからだと解される。

しゃる) で表わされ、表示すると、第 27 表の
通りになる。

第 27 表

基 本	肯 定	非過去	kako:r'in (お書きになる)
		過 去	kako:tta (お書きになった)
	否 定	非過去	kako:ranu (お書きにならない)
		過 去	kako:ranahata (お書きにならなかった)
継 続	肯 定	非過去	kako:riun (書いてい
		過 去	kakio:riFuta (書いていらした)
	否 定	非過去	kako:riuranu (書いてい
		過 去	kakio:riuranahata (書いてい
既 存	肯 定	非過去	kako:re:n (お書きにな
		過 去	kako:re:hata (お書きにな
	否 定	非過去	kako:re:ne:nu (お書きにな
		過 去	kako:re:ne:nahata (お書きにな

o:r'in はそれ自身アスペクトの語形変化を
有していて、o:r'in (基本) o:riun (継続)
o:re:n (既存) となる。

「ていねい」では異なりを示すが、その他の配
列関係は奄美・沖縄方言とほぼ同じである。

第 27 表の最後の形式 kako:re:ne:nahata
(お書きにならなかった) を例にとって、分
析して示すと、次の通りになる。

kak o:re: ne:naha ta

動詞 尊敬 否定 過去

また、go:sa:n (様子) との関係は次の通り
である。

kak o:ri go:sa ne:naha ta

動詞 尊敬 様子 否定 過去

以上、述べてきて配列関係をまとめて示すと
次の通りになる。

動詞……… — 尊敬 — 様子 — みとめ方 —

時 — 語尾 — ていねい

古仁屋方言

湯湾方言の性格をより明確にするために、次に瀬戸内町古仁屋方言の体系を示す。

古仁屋方言の話者は四本武俊氏(81歳)である。四本氏は鹿児島二中出身で、ドイツ語・英語に対する相当の知識を有し、両語の会話も達者な方である。自分の方言に対する内省にも鋭いところがあり、教えられるところ大なるものがあつた。

動詞の活用

1. 活用体系

はじめに、「書く」に関する古仁屋方言の動詞の活用体系について記す。

古仁屋方言の *kakjum* (書く) は、まず語幹派生接尾辞の交替によって、次のような諸形式を派生する。*kakjum* も合わせて示す。

kakjum (書く、基本)

katjum (書いている。継続)

katja (書いた。完了)

katji ʔam (書いてある。既存)

最後の *katji ʔam* は *katji* (書いて。接続形) と *ʔam* (有る) の2語の結合とみた方が妥当と思われるが、他方言との比較上示しておく。

以上の4形式の他に *katji* (書いて。のちどき。接続形) も語幹派生接尾辞の交替によって派生する形式とみなさなければならないが、これはまた同時に活用形でもあるので、上記4形式とは少し性質を異にする。

次に、上記4形式は各々が語尾交替をする。その結果、活用形が成立するが、これを示すと第28表の通りになる。

各々の活用形の用例を示すと、次の通り。但し、「基本」の用例は後述する。

katjun の用例

dʒi: katʃuro: (字を書いている)

dʒi: katʃura m (字を書いていない)

dʒi: katʃuraba jittʃam (字を書いているならばよい)

dʒi: katʃurba ja juba m ganenʃi (字を書いていれば呼ばないように)

dʒi: katʃuri (字を書いておれ)

dʒi: katʃunna (字を書いているな)

dʒi: katʃur had (字を書いているはず)

dʒi: katʃur bufa (字を書いていた)

dʒi: katʃura gatʃa:na nakjum (字を書いているながら泣く)

dʒi: katʃum (字を書いている)

nama dʒi: katʃur (今字を書いている)

ʔuja n nitʃum (親に似ている)

mɪd bēhəri nudur (水ばかり飲んでいる)

dʒi: katʃun tʃu: ja tar (字を書いている人は誰か)

ʔarrja ʃittʃum mun jusittʃi kurira m (彼は知っていて教えてくれない)

dʒi: du katʃum (字ぞ書いている)

nu:ga kunnan dʒi: katʃur (どうしてここに字を書くのか)

ʔin tu maja: tu dʒiri ga katʃur (犬と猫とどちらが勝っているか)

ʔari ga katʃuro: (彼が書くだろう)

nama dʒi: katʃu: ta (今字を書いていた)

nan na: dʒi: katʃu ta munu ʔarana (あなたは字を書いていたのではなかったか)

ʔkinju: nan na dʒi: katʃu taro: ga (昨日あなたは字を書いただろう)

dʒi: kakja gatʃa:na natʃu ta (字を書き

接統形	△			tī	△		i
強調形	△		Q	Q	Q	Q	
進体形	△		—	—	—	—	
推量形	△		ro:	ro:	ro:	ro:	
係結形 ₂	△		r	r	r	r	
係結形 ₁	△		m(n)	m(n)	m(n)	m(n)	
連体形 ₂	△		n	n	n	n	
終止形 ₂	△		r	r	r	r	
終止形 ₁	△		m	m	—(n)	m	
同時形		a	△	ra	△	△	
連用形 ₂	i		△	△	△	△	
連用形 ₁	—		r	r	r	△	
連体形 ₁	—		r(n)	r(n)	r(n)	r(n)	
禁止形	na		nna	nna	△	△	
命令形	ī		rī	rī	△	△	
条件形 ₂	ba		rba	rba	△	rba	
条件形 ₁	aba		raba	raba	△	△	
未然形	a		ra	ra	△	△	
志向形	o:		△	ro:	△	△	
語尾 語幹	kak	kakj	kakju	katju	katja	katjiwa	katj
	書く (基本)			書いている (継続)	書いた (完了)	書いてある (既存)	書いて (のちどき)

ながら泣いていた)

katjud do: (書いているぞ)

tutud do: (取っているぞ)

dži: katjutī natju ta (字を書いていて泣いていた)

tura m tji ?itjutī tutur (取らないと言っていて取っている)

katja の用例

katjaraba wakar džu sum (書いたらばわかることは決まっている)

?ar ga katjar had (彼が書いたはず)

katjar judar sum (書いたり読んだりする)

Futar hartar sum (降ったり晴れたりする)

?idžar tjar sum (行ったり来たりする)

dži: katja (katjar) (字を書いた)

?arrja wa ga katjam (katjar) (あれは私が書いた)

tud ga kinju: funī nji naha hatji

tattja

(妻が昨日舟でナハへ立った)

kunja: nantīm²a:rīta (古仁屋で生れた)

na: ?uhita (もう起きた)

?ar ga ?ikjum tji ?itjam (彼が行くと言った)

dži: katjan² tju ja tar (字を書いた人は誰か)

dži: du katjam (字ぞ書いた)

nu: ga kunnan dži katjar (どうしてここへ字を書いたか)

dži: katjaro: (字を書いただろう)

wutti du tja:ro: (おとといきたんだろう)

?imī ŋkja mitjaro: (夢などみたんだろう)

?ura ga katjaro: (君が書いたろう)

katji?am の用例

katji?arba si?u wakajun (書いてあるな

らばすぐわかる)

katʃiʔar had (書いてあるはず)

kunnan dʒi: katʃiʔam (katʃiʔar) (ここに字が書いてある)

katʃiʔammunu (書いてあるもの)

dʒi: du katʃiʔam (字が書いてある)

nu:ga kunnan dʒi: katʃiʔar (どうしてここに字が書いてあるのか)

dʒi: katʃiʔaro: (字が書いてあるだろう)

dʒi: katʃiʔad do: (字が書いてあるぞ)

この第28表で注意すべきことは、「基本」の方で、kak語幹(基本語基語幹)系列の活用形とkakju語幹(連用派生語幹)系列の活用形が未然形から連用形₁まで平行的に存していることである。これらの活用形で調査の際に、まず最初に報告されるのがkak語幹系列の活用形である。そして、調査を進めていく過程で、時々kakju語幹系列の活用形があらわれる。そこでその活用形を手がかりとして、系統的に他の活用形の存否を確認してみると、上記kakju語幹系列の活用形が得られたわけである。これらの活用形は次のようにあらわれる。

dʒi: kakjura m (字を書きおらない)

dʒi: kakjuraba ja juba m ganenʃi (字を書きおらば、呼ばないように)

wa ga kakjuraba ʔura ja situ nu so: siri (私が書きおらば、君は外の掃除をしない)

dʒi: kakjurba ja kaki (字を書きおれば書け)

dʒi: kakjur'i (字を書きおれ)

dʒi: kakjunna (字を書きおるな)

dʒi: kakjur uʔ ja tar (字を書きおる人は誰か)

dʒi: kakjur bufa (字を書きおりたい)

湯湾方言では基本語基語幹と連用派生語幹の活用形が相補う形で「基本」を形成していたが当方言では、同時形以下は相補う形をとっていても、上記のところでは平行的に存している。そのためか、kakju語幹系列の活用形には話者自身の内省によっても「進行」の意が認められ、話者は、たとえばkakjumを共通語に記す時「書きおる」とする。但し、これは話者がじっくり内省を働かせたためであり、そうでない日常の言語生活では「書く」という意で用いていることも事実である。その要因はやはりkak語幹系列の終止形が存しないためであろう。

kak語幹系列の終止形に関しては、当方言ではまた次のような注意すべき語形があらわれた。

ʔasib (遊ぶ) mʔa:rir (生れる)

ʔur (売る) ʔugam (拌む)

これは動詞の語形調査の際にあらわれたものである。これらの語形は恐らく「居り」の融合していない、すなわち、kak語幹系列の終止形にあたる形であろうが、これが共通語の影響による新しい語形であるのか、あるいはまた、「居り」の融合しない以前の古形をとどめたものであるのか、現在のところ判別しえない。

以上の古仁屋方言の実態からして、「基本」と「進行」を別々のカテゴリーとして記述すべきかどうか多少迷うところもあるが、kak語幹系列の活用形が終止形以下欠けているところから、kakju語幹系列の活用形はやはりこれを補うものとして、「進行」の意を伴いつつも「基本」を表わすものと記述しておく。

以上はkakjum(書く)の活用である。更に他の動詞の語形交替も調査し、「基本」の活用形のみを体系化して示すと、第29表の通りになる。「漕ぐ」以下の動詞においては連用派生語幹系列の未然形から連用形₁までの活用形は

未調査のため示すことができない。従って、
kakjum (書く) の方も、第 29 表では示して
ない。

2. 活用形

2.1 志向形

志向形は次のように用いられる。

madʒin dʒi: kəkə: (一緒に字を書こう)
ʔatʃa dʒi: ba kəkə: (明日字を書こう)
wa ga ja haʃi mudoro: (我が家へ帰ろう)
hama nantī ʔasibo: (浜で遊ぼう)
wan daro madʒiŋ kamo: (私も一緒に食べよう)
turo: ji (取ろうね)

ʔan (有る) の志向形は存しない。

2.2 未然形

この活用形の職能は次の通り。

(1) ʃum (する。使役) に接続する。

ʔututu ŋ kəkə ʃum (弟に書かせる)
kurrja ʔututu ŋ kəkə ʃum (これは弟に書かせる)

(2) rīr (れる、受身・可能) に接続する。

kur ʃi dʒi: ga kəkə rīr (これで字が書ける)

ʔama: ʔikba ja ʔja: rīd do: (あそこへ行ったら叱られるぞ)

ʔinu ŋ kwa: rīm (犬にかまれる)

warabiŋkja hara gadi waro: rīm (子供にまで笑われる)

(3) m (ない) に接続する。

ʔura ja kaʃi m wan na kəkə m (君は書いても私は書かない)
kəkə m tam had dʒa (書かなかったはずだ)

ʔumi ŋkja ʔidʒinni kīkja m karan (海など行つてごらん聞かないから。許さないから)
nama madi matʃi m ko m (今まで待っても来ない)

kur sai (または ʃumma) wakara m munnu
nu: wakajur (これさえわからないのになに
がわかるか)

mīd ʔatīm numa m (水さえのまない)
wunag ʔatīm dīkīrjum mun ʔura ja
dīkira m na (女でさえできるのに君はできないか)

ʔanʃu: nanʃi haʔarakjun ʃu: ja wura m
(あの人のように働く人はいない)

ʔura m ko: m na (君も買わないか)

ʔikja m daro: ga (行かないだろうが)

gaʃi ʃim sira mtīm ʔura: katte dʒa
(そうしようがしまいが君の勝手だ)

ʃirjabī tam bam wakara m (調べたけれどもわからない)

ʔuhē: satī tīko: ra m (大きくて使えない)

(4) z (ない, ず) に接続する。

ʔarrja tutim kəkə z (彼はとても書かない)

ʔim²mjum (包む) kīrjum (蹴る) nībr-
jum (眠る) ʔabīrjum (呼ぶ) ʔuhīrjum
(起きる) では未然形に 2 語形があらわれる。
たとえば、kīrjum (蹴る) では kīra と kī-
rja があらわれる。後者は基本語基語幹の異形
を軸として成立している活用形であるが、ʔim-
mjun (包む) kīrjum (蹴る) nībrjum (眠る)
ʔuhīrjum (起きる) では m (ない) に
接続する際に、この活用形が用いられ、ʔabī-
rjum (呼ぶ) では z (ず) に接続する際にこ
れが用いられる。

次に、否定を表わす m (ない) と z (ず) の
違いであるが、四本氏の内省によると、次のよ

第29表

古仁屋方言動詞活用体系

分類			動詞	変化部		志向形	未然形	条件形 ₁	条件形 ₂	命令形	禁止形	連体形 ₁	連用形 ₁	連用形 ₂	同時形	終止形 ₁	終止形 ₂	連体形 ₂	係結形 ₁	係結形 ₂	推量形	準体形	強調形	接続形	既存 ₁	既存 ₂	完了 ₁	完了 ₂	継続 ₁	継続 ₂		
				不変化部																												
I	I. 1	1	書 く	kak	o:	a	aba	ba	i	na	—	—	i																			
				kakj												a	um	ur	un	um(n)	ur	uro:	u(:)	uQ								
				katʃ																						i	iʔam	iʔar	a(m)	ar	um	ur
		2	漕 ぐ	kug	"	"	"	"	"	"	"	"	"																			
				kugj												"	"	"	"	"	"	"	"	"								
				kudʒ																						"	"	"	"	"	"	"
		3	殺 す	kurs	"	"	"	"	"	i na	i																					
				kurʃ									i	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"								
				kurtʃ																						"	"	"	"	"	"	"
		4	立 つ	tat	"	"	"	"	"	"	"																					
				taʃ										i	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"								
				taqtʃ																						"	"	"	"	"	"	"
		5	死 め	ʃin				"	"	una	"	"	"																			
				ʃinj	"	"	"								"	"	"	"	"	"	"	"	"	"								
				ʃidʒ																						"	"	"	"	"	"	"
		6イ	切 る	k ² ir				"	"		"	"	"																			
				k ² in						"																						
				k ² irj	"	"	"								"	"	"	"	"	"	"	uʔro:	"	"								
		6ロ	結 ぶ	k ² iʃ																						"	"	"	"	"	"	
				kubr				i ba	"	i na	"	i	"																			
				kubrj	"	"	"							"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"								
		6ハ	す る	k ² ubʃ																					"	"	"	"	"	"		
				sir	"	"	"	"	"		i																					
				sīn						"																						
			1	飛 ぶ	ʃ								i:	"	"	"	"	"	"	"	"	uʔro:	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
	tub				"	"	"	"	"	i na	i	"	"																			
	tubj													"	"	"	"	"	"	"	"	"	"									
	2イ		読 む	tud																					i	iʔam	iʔar	"	"	"	"	
				jum	"	"	"	"	"	"	"	"	"																			
				jumj										"	"	"	"	"	"	"	"	"	"									
	2ロ		食 う	jud																					i	iʔam	iʔar	"	"	"	"	
				kam	"	"	"	"	"	"	"	"	"	—																		
				kamj											"	"	"	"	"	"	uʔro:	"	"									
	kad																						i	iʔam	iʔar	"	"	"	"			

[illegible]

うな相違がある。

m…………話し手の意志

wan nja kaka m (私は書かない)

ʔarrja kaka m (彼は書かないトオモウ)

z…………客観的な表現 一般的な表現

wan nja kaka z (私は書かない)

ʔarrja kaka z (彼は書かない)

2.3 条件形₁

この活用形の用例は次の通り。

dʒi: kakaba ja nin ʔiriiti kaki (字を書かば念を入れて書け)

hatarakaba ja kunja nanti hataraki (働くなら古仁屋で働け)

ʔikjaba ja hē:k tati (行くなら早く立て)
tataba ja siigu tati (立つならすぐ立て、
出発するならすぐ出発しなさい)

jirjaba ja kjuraku n jiri (座るならきれいにすわれ)

warajun (笑う) ko:jun (買う) ʔumujun (思う)の動詞類ではこの活用形は見出しえなかった。

2.4 条件形₂

この活用形の用例は次の通り。

wa: ga kakba miri jo (私が書いたらみなさい)

ʔura ga kakba wa ga jumjum (君が書いたら私が読む)

ʔura ga kakba jittʃam mun (君が書けばよいのに)

kakba ja ʔikja m do: (書いたらいけないぞ)

ga:ʃi ʔitʃi wasiri dim sirba ja kikkja m do: (そんなに言って忘れてもしたら許さないぞ)

ʔari ga kjurba wakajum (彼が来ればわ

かる)

nama tatba manʔo:jum (今立てば間に合う)

ʔami nu Furba ja jami:jum (雨が降ればやめる)

kussiba jittʃa: mun (殺せばよいのに)

ware:ba ja jamiro: (笑えばやめよう)

kwē:ba ja ʔuro: (買えば売ろう)

ʔare:ba ja kjurak najum (洗えばきれいになる)

kamba ja jaraso: (食べばあげよう)

2.5 命令形

用例は次の通り。

ʔura kaki (君書け)

kaɣ ko: (ここへ来い)

ʔura kaki ba (君書け)

ʔuja nu jug ganinʃi sirri (親の言う通りしなさい)

ga:ʃug karan jo:dʒin sirri ʃi ʔju:

mun (だから用心しろというのだよ)

ʔanjo ʔura ja ji:ʃak kaggi:ri jo (あのね君はよく考えろよ)

ʔan (有る)の命令形は用いられない。

2.6 禁止形

ʃu nu mun tunna (人のものを取るな)

kunnan dʒi: kakna (ここに字を書くな)

kusa tunna (草を取るな)

ʔara m mun ʔi:na (うそをつくな)

ʔan (有る)の禁止形は用いられない。

2.7 連体形₁

I類の動詞では、ほとんどのものが語幹が直ちに接辞に接していく。すなわち、語幹即活用形の形をとっているが、しかし、本質的にはi語尾があるものと解される。

wa ga kak gadi(:) ʔarrja kon ta (私

が書くまで彼は来なかった)

ʔarɪ ga kak had dʒa (彼が書くはずだ)

2.8 連用形₁ 連用形₂

連用形は連用形₁と連用形₂とに分けたが、これは本来不必要だったのかも知れない。連用形₁は、ある一定の接辞へ接続していく際に、不変化部が直ちに接辞へ接していくものであり連用形₂はi語尾があらわれるものである。

しかし、前者でも、ある動詞ではi語尾があらわれるし、また、後者でもʔuhɪrjum(起きる)では不変化部が直ちに接辞へ接していくので、両者は本来区別しなくてもよい。たゞここでは、連用形に現象形態として2語形あらわれるということを示す程度で、別々のカテゴリーではないと解される。従って、厳密に体系記述する場合はひとつの活用形にまとめて記述すべきであるが、本稿が現象レベルでの体系記述を意図する限りにおいては、前に述べた活用形設定の基準と多少くいちがうところが出てくるともさけられないのである。

kakの用例

dʒi: kak buʃa: ja: (字を書きたいなあ)

kak du ʃum(ʃur) (書きぞする)

wa ga kak du ʃum(私が書きぞする)

kak ja sɪram (書きはしない)

kak saɪ m sɪra m (書きさえしない)

kak bɛhɛri ʃur (書きばかりする)

kak ja ʃum bam jum ja dɪkɪra n (書きはするけれども読みはできない)

dʒi: kak kak jumjur (字を書き書き読む)

dʒi: kak ʈagɛsa (字を書くらしい)

dʒi: kak ga ʔikjum (字を書きに行く)

ʔura ga kak beki dʒa (君が書くべきだ)

wa: ga kak buʃa (私が書きたい)

ʔarɪ ga kak du ʃum (彼が書きぞする)

ʔura ga tur bek(i) dʒa (君が取るべきだ)

kakiの用例

kaki m sɪra m (書きもしない)

dʒi: kaki miʃojum (字を書きなさる)

kaki guruʃa (書きにくい)

kaki jassa (書きやすい)

2.9 同時形

湯湾方言同様、古仁屋方言でも同時形は、「kaki(連用形)+ja(係助詞)」の融合からなるものと解される。

dʒi: kakja gaʈɪnja kappɪ: jum(kappɪ: jur) (字を書きながら考える)

wan nja dʒi: kakja gaʈɪnja kappɪ: jum(kappɪ: jur) (私は字を書きながら考える)

dʒi: kakja gaʈa: na naʈu: ta (字を書きながら泣いていた)

ʔakkja gaʈa: na jumjum (歩きながら読む)

2.10 終止形₁ 終止形₂

終止形₁と終止形₂の用法上の区別は、四本氏においては、実に明確であった。湯湾方言の「動詞の活用」の項で述べたので、ここでは要点のみを述べる。

両者の用法上の違いを示すと、次の通りである。

kakjun(書く、終止形₁)

(イ) 話し手の意志が含まれる。

(ロ) 非習慣的・個別的な表現に用いる。

(ハ) 主観性の強い表現である。

kakjur(書く、終止形₂)

(イ) 客観的な表現である。

(ロ) 習慣的・一般的な動作の表現に用いる。

(ハ) 話し手の意志は含まない。

更に、四本氏は次の例をあげて、別の角度か

ら説された。

tida ga ʔirjum (太陽が沈む)

この表現の場合は太陽が自分の意志で入る意
が感じられる。

tida ga ʔirjur (太陽が沈む)

この表現の場合は太陽が沈むという客観的な
事実の表現である。

以上の四本氏の内省報告からすると、「話し手
の意志の有無」のところは、話し手の意志の有
無による区別というよりは、動作主の意志の有
無を話し手が判断し、その判断に基いて、両者
を使い分けているものと解した方が妥当のよう
に思われる。否定を表わす m と z の使い分けも
あるいはこれと平行的なものなのかも知れない。

もし、上述のような使い分けがあるとするな
らば、現在共通語文法で問題になっている主語
論争、すなわち主語が存するか否かという問題
に対しても恰好の資料を提供するものと思われ
る。

今回の調査では、文中におけるその使い分け
を完全に明確にするまでには至らなかったので
得られた用例をそのまゝ示すことにする。

ʔari ga jumjum (彼が読む)

ʔura ga kakjum na (君が書くか)

tʃu: mukē: ga ʔikjum (人を迎えに行く)

kī: nu ida nu karijum (木の枝が枯れ
る)

ʔutu ja ja: nan wum (弟は家に居る)

hakkja kī: ʃi du tikrjum (箱は木で作
る)

ʔuja tu madʒin ʔikjum (親と一緒にいく)

ʔar ga ʔikjum tʃi ʔitʃam (彼が行くと言
った)

ʔufutʃupkja warabiŋkja waru: wum

(大人やら子供やら沢山いる)

ʔaŋkure: ja wanu dikijum (あのぐらい
は私もできる)

ʔato nan tʃur dakī nohojum (あとにあなた
一人だけ残る)

tiki nu ʔagar gadi hatarakjum (月の
あがるまで働く)

kun nan ʔam nja (ここにあるのか)

ʔura ja ʔikjum nja ʔikjam na (君は行
くのか行かないのか)

ʔura ga turjum nja (君が取るのか)

sihē: ja numjum bam tutim hatara-
kjum (酒は飲んでもとても働く)

kun nan ʔam (ここにある)

dʒi: kakjum (kakjur) (字を書く)

wa ga ʔikjum (ʔikjur) (私が行く)

ʔari ga kakjur (彼が書く)

ʔari ga kakjur kaja (彼が書くだろうか)

ʔarrja ja: nan wur kaja (彼は家に居る
かしら)

ʔarrja ʔikjur kaja (彼は行くかしら)

2.11 連体形₂

用例は次の通り。

kakjun tʃu: ja tar (書く人は誰か)

dʒi: kakjun tʃikin darejum (字を書く時
に渡れる)

wa ga kakjum e: da matʃi tabori (私が
書く間待って下さい)

wan na: kakju kutu dikijum (私は書
くことができる)

dʒi: kakjum mun daro: kaja (字を書いて
いるのだろうか)

kakju kutu ja jassam (書くことはやす
い)

wa: ga kakju kara ʔura ja kaka m ga-
ninʃi sirī (私が書くから君は書かないよ

うにきなさい)

ʔan tʃu: nanʃi hatarakjun tʃu: ja ʔumo:
ra m (あの人のように働く人はいない)

Fë:k turjum mun nu mun dʒa (早く取る方のものだ)

tun nju tubjun ganinʃi (鳥が飛ぶみたいだ)

kamat nju jamjug kara kju: ja jasim-
jum (頭が痛いから今日は休む)

wan daro:ka ʔikjug kara ʔuram ko: (私も行くから君も来い)

2.12 係結形₁ 係結形₂

係結形₁ は du (ぞ) の結び、係結形₂ は du (ぞ) 及び疑問詞または代名詞の不定称の結びとなる。係結形₁ の語尾は -m, -n 両形あらわれる。これは終止形₁ 語尾、連体形₂ 語尾と一致する。但し、ʔan (有る) wun (居る) では -n 語尾だけあらわれ、連体形₂ 語尾とだけ一致する。また、係結形₂ 語尾は終止形₂ 語尾と一致する。これは琉球方言における終止形と連体形との関連を考察するのになんらかの示唆を与えるものなのかも知れない。

係結形₁ の例

dʒi: du kakjum (kakjun) (字ぞ書く)

ʔatʃa du kjum (kjun) (明日ぞ来る)

kun nan du wun (ここにぞいる)

ʔar du ʔan (彼ぞある)

係結形₂ の例

nu:ga kun nan dʒi: kakjur (どうしてここに字を書くのか)

ʔari ga ʔikjaʃi kakjur (彼がどうして書くものか)

dʒi: du kakjur (字ぞ書く)

kurja tar ga kakjur (これは誰が書くか)

ʔura ja da: hatʃi ʔikjur (君はどこへ行

くのか)

ʔututu ja ʔit kjur kaja (弟はいつくるのかしら)

kur sai wakara m munnu nu: wakajur (これさえわからないのになにがわかるか)

kun ʔju: ja ʔikjassa bēhēri ʃur kaja (この魚はいくらばかりするのかしら)

ʔidu da: na: ʔar (どこどこにあるの)

2.13 推量形

ʔari ga kakjuro: (彼が書くだろう)

ʔari ga turju:ro: (彼が取るだろう)

2.14 準体形

ʔam (有る) wum (居る) では不変化部が直ちに接辞へ接続する。

用例は次の通り。

(1) mun (もの) に接する。

kakju mun na nu: (書くものは何か)

dʒi: kakju mun narba ja kakī (字を書くものならば書け)

(2) ssa (のは) に接する。

kakju ssa jassar (書くのはやすい)

(3) mi (か。疑問) に接する。

wa: ga kakju mi (私が書くか)

dʒi: kakju mi ji:di kakju mi (字を書くのか絵を書くのか)

(4) ta (た、過去) に接する。

mufim wa ga ʔuganʃi ʔja mba ʔar ja

kakju taro: (もしも私がそう言わなければ彼は書いたろう)

kakju tarba ji:ʃi ʔiʃi kuriri (書いたらば、よいといってくれ)

2.15 強調形

用例は次の通り。

wa ga kakjud do: (私が書くぞ)

ʔari ga kakjud do: (彼が書くぞ)

ʔimĩŋkja mijud do: (夢など見るぞ)
 wa ga turjud do: (私が取るぞ)
 nja: jagati tubjud do: (もうやがて飛ぶぞ)

2.16 接続形

用例は次の通り。

dʒi: katʃi kkara ʔikjum (ʔikjur) (字を書いてから行く)
 ʔantʃu ja nama dʒi: katʃi ʔumojum
 (ʔumojur) (あの人は今字を書いていらっしゃる)
 nama gadi matʃi m kom (今まで待って来ない)
 naha gadi ʔidʒi kjum (ナハまで行ってくる)
 tiŋ kara ʔutiti kjum (kjur) (天から落ちてくる)
 naha hara mudo:ti kjur (ナハから帰ってくる)
 ʔututu dīm wurba ja tsiriti ko: (弟でも居たら連れてこい)
 Fë:sa ʔuhiti m mannjaʔo m (早く起きても間に合わない)

3. 活用の種類

3.1 種類

活用は大きく I, II, III に類別される。I と II は未然形から連用形₂ までの変化部で区別される。その中でも未然形の変化部の違いは大きい。I・II と III とは命令形の変化部で区別される。

I の中では更に I.1 から I.5 まで類別されるが、I.1 から I.4 までの区別は、次のような違いによる。

命令形 連用形₂ 接続形

I.1	i	i	i
I.2	"	"	i
I.3	"	—	i
I.4	i	"	i

I.5 は終止形₁ から強調形までがこれまでと大きく異なっている。

最後の 1, 2, 3 等の下位類別は不変化部の末尾子音の違いによるものである。

3.2 ʔam (有る) wum (居る)

古仁屋方言の ʔam, wum が湯湾方言と異なるのは、「継続」に ʔarjum・ʔarjur, wurjum・wurjur の形式を有することである。

これを通時的成立過程から「基本」との関係、更に他の動詞の「基本」「継続」との関係を示すと、第30表の通りになる。「既存」は古仁屋方言においては2語の結合と解されるので、一応除外しておく。その他の動詞としては ka-kjum (書く) を例にとる。

この表からわかることは、古仁屋方言の ʔam wum とその派生形式は第25表で示した八重山川平方言の動詞とその派生形式の構造にはほぼ一致するということである。これは琉球方言における基本の終止形の成立過程を究明するのになんらかの示唆を与えるものと思われる。

第 30 表

		「有る」「居る」	その他の動詞
(1) 「をり」「あり」 の結合しないもの		ɤam, ɤar (有る) wum, wur (居る) (基本)	
連用形 +	(2) をり	ɤarjum, ɤarjur (有っている) wurjum, wurjur (居っている) (継続)	kakjum, kakjur (書く) (基本)
	(3) てをり		katʃum, katʃur (書いている) (継続)
	(4) てあり		katʃa, katʃar (書いた) (完了)

3.3 所属動詞

次に、今回の調査で得た動詞を各々の活用型に分類して示す。

尚、動詞の所属類別は厳密なものではなく、特に下位部類は今後詳しく検討する必要がある。ここでは古仁屋方言の動詞語形を示すのが目的である。また、語形を示すとき、基本の終止形₁を代表として示す。

[1. 1 の 1] 類

haɬarakjum (働く) ɤarkjum (歩く)
kikjum (聞く) makjum (巻く) ɤukjum

(置く) kakjum (欠く) koɾakjum (乾く)
kawakjum (のどがかわく) ɕikjum (引く)
sakjum (裂く) ʃikkjum (沈む) tiɕkjum
(尖く) tiɕkjum (着く) tiɕkkjum (続く)
tuɕkkjum (届く) nakjum (泣く) ɸukjum
(吹く) jakjum (焼く) wakjum (湧く)
[1. 1 の 2] 類
ɤwiːɟjum (泳ぐ) tiːɟjum (注ぐ)
tiːmjɟjum (績ぐ) tugjum (研ぐ)
nɟjum (抜く)

〔 I. 1 の 3 〕 類

naʃum (産む) ʔuʃum (押す) kakʃum (隠す) karaʃum (貸す) kja:ʃum (消す)
kubuʃum (こぼす) saʃum (刺す) ʔi:ku-
ʃʃum (叱る, 言い殺す) damakaʃum (騙す)
no:ʃum (治す)

〔 I. 1 の 4 〕 類

ʔuʃum (打つ) katʃum (勝つ)

〔 I. 2 の 1 〕 類

ʔasibjum (遊ぶ) ʔukabjum (浮ぶ)
ʔirabjum (選ぶ) kabjum (嗅ぐ)
ʔumbjum (埋める)

〔 I. 2 の 2 イ 〕 類

ʔamjum (編む) jumjum (数える)
kamjum (噛む) tammjum (頼む)
ʔumjum (熟する) sïmjum (済む)
tïkamjum (掴む) nusïmjum (盗む)
numjum (飲む)

〔 I. 2 の 3 イ 〕 類

ʔahagarjum (明るくなる) ʔatmajum (集まる)
ʔinojum (祈る) Fujum (堀る)
ʔujum (織る) ʔuho:jum (送る)
wudujum (踊る) wurjum (折る)
ʔuwajum (終る) katamajum (固まる)
karjum (借りる) sawajum (さわる)
fibarjum (しばる) kũ:jum (閉める)
ʔibajum (威張る) nudrjum (すべる)
ʔubujum (おぶる) sujum (剃る)
damajum (黙る) tïkrjum (作る)
tumajum (泊まる) furjum (降る)
mujum (漏る) warjum (割る)

〔 I. 2 の 3 ロ 〕 類

karjum (刈る)

〔 I. 2 の 3 ハ 〕 類

kabrum (被る)

〔 I. 3 〕 類

mukë:jum (迎える) ʔutirjum (落ちる)
ʔukirjum (受ける) ʔagirjum (上げる)
ʔuhë:rjum (開ける) ʔirijum (入れる)
ʔwi:jum (植える) kũrijum (与える)
tïmi:kijum (つねる) nïdijum (飢える)
dugë:jum (動く)
mʔa:rirjum (生れる) ʔubijum (覚える)
ʔurijum (降りる) kë:jum (変える)
këhëjum (欠ける) këhëjum (掛ける)
karijum (枯れる) kata:mïrjum (かつぐ)
kaggi:rjum (考える) kunejum (がまんする)
kĩ:rjum (消える) kuşarïjum (腐れる)
kũrijum (暮れる) kurabïjum (比べる)
kũttikijum (くつつける)
kuijum (越える) kwë:rjum (肥える)
maggirjum (転ぶ) tumijum (さがす)
ʔabijum (叫ぶ) samijum (覚める)
ne:jum (萎れる) firjagïrjum (精げる)
sigïrjum (過ぎる) sïtïjum (すてる)
sïjum (磨る) kakgïrjum (かつぐ)
sï:jum (添える) sïdatïjum (育てる)
taskjum (助ける) darïrjum (疲れる)
tïijum (釣る) tïijum (照る)
ʔidʒijum (出る) nadïjum (撫でる)
ʒiggijum (逃げる) jï:jum (酔う)
wasïrïjum (忘れる)

〔 I. 4 の 2 〕 類

kïrjum (着る) nirjum (煮る) jirjum (坐る)
ʔirjum (射る) hanaçirjum (くしゃみする)

〔 II 〕 類

ʔarajum (洗う) ʔo:jum (会う)
ʔu:rjum (追う) ʔutajum (歌う)
ʔutagajum (疑う) murajum (もらう)

tikanajum(飼う) kīrjajum(きらう)
 sītṭakrjum(すりたくる) takkajum(壊
 わす) ṣipjum(吸う) tīkajum(使う)
 narajum(習う) no:jum(縫う)
 nigo:jum(願う)

形容詞の活用

1. 活用体系

古仁屋方言の形容詞の活用体系を示すと、第31表の通りになる。記述方法はすべて湯湾方言の場合に準じてある。

2. 活用形

2.1 条件形₁

tahasaraba kwē:kira n(高いなら買えない)

Fē:saraba jittjam(早いならよい)

2.2 条件形₂

tahasarba kwē:kira n(高ければ買えない)

Fē:sarba jittjam(早ければよい)

2.3 連用形

(1) najum(～になる) ne:(ない)に接続する。

ṣinamun na dṣindṣin tahak najur(品物がだんだん高くなる)

ṭare:ba ja kjurak najum(洗えばきれいになる)

kure: nam mja nu:ga ṭusok natan
 (もしもし、あなたはどのように遅くなったか)

nīdan takak nafum(値段を高くする)

hanussa tahak ne:(芋は高くない)

(2) saī(さえ) bēhēr(ばかり) gadi
 (まで) du(ぞ)に接する。

tahak saī sira mba jittja mun(高くさ

えしなければよい)

tahak bēhēr ṣi jasik sira m(高くばかりして安くしない)

tahak gadi natī nja: ko:ra ra m(高くまでなってもう買えない)

tahak du ṣum(高くぞする)

tahak du ṣum munna ṭara m kaja:(高くぞするのかしら)

2.4 提示形

湯湾方言同様、古仁屋方言の提示形も「連用形+ja(は)」の融合したものである。

tītīm tahakka ne:(決して高くはない)

hanussa tahakka ne:(芋は高くはない)

tahakka ne: mun ko:jun ṭu ja wuram
 (高くはないが買う人はいない)

2.5 終止形₁ 終止形₂ 終止形₃

古仁屋方言の形容詞の終止形には3形があらわれる。各々の用法についての四本氏の内省を次に示してみよう。

(1) 終止形₁

kun jama ja tahasa(この山は高い)

これには話し手の感動・驚きが含まれている。

(2) 終止形₂

kun jama ja tahasam(この山は高い)

話し手が「この山は高い」と思った時に用いる。

(3) 終止形₃

kun jama ja tahasar(この山は高い)

客観的にみて(他の山と比較して)「この山が高い」時に用いる。

以上の四本氏の内省によれば、終止形₁・終止形₂は話し手の主観的判断、他人はいざ知らず自分はこう思うと話し手が判断する際に用いられるようであり、終止形₃は客観的事実の叙述、誰がみても確かにそうであると話し手が判断する際に用いられるように思われる。

第31表

古仁屋方言形容詞活用

分類	形容詞	変化部 不変化部	条件形 ₁	条件形 ₂	連用形	提示形	終止形 ₁	終止形 ₂	終止形 ₃	連体形	係結形	推量形	名詞形	強調形	接続形	所 属 形 容 詞
I	1 高 い	taha	saraba	sarba	k	Qka	sa	sam	sar	san	sar	saro:	sa	sa Q	sati	nagasam (長い) juwasam (弱い) kurasam (暗い) wahasam (若い) tjikjasam (近い) kjurasam (美しい)
	2 早 い	Fè:	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	?uFè: sam (大きい)
	3 痒 い	ju(:)jo:	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	?usosam (遅い)
	4 遠 い	tu:	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	tju: sam (強い)
	5 低 い	çik	"	"	sak	sa Qka	"	"	"	"	"	"	"	"	"	karusam (軽い) warsam (悪い) ?ubsam (重い) mî: sam (新しい)
	6 暑 い	?at	tara	tarba	tik	tî Qka	ta	tam	tar	tan	tar	taro:	ta	ta Q	tati	
II	1 めずらしい	mîdra	faraba	farba	fak	fa Qka	fa	fam	far	fan	far	faro:	fa	fa Q	fatî	sidaŋam (涼しい) hadkaŋam (恥しい) ?iŋonafam (忙しい) ?uturŋam (こわい)
	2 良 い	ji Q	tjaraba	tjarba	tjak	tja Qka	tja	tjam	tjar	tjan	tjar	tjaro:	tja	tja Q	tjati	
接続する 主な接辞					najur (なる) ne: (ない) du (ぞ) gadi: (まで) sai (さえ) bêhëri (ばかり)	ne: (ない)				tju (人) tjikin (時) kara (から・理由)			m(も) ji(で) tu(と) jukma (より) ga(が) hara (から) bêhëri (ばかり) gadi: (まで) tam (た)	do: (ぞ)		

次に、その用例を示す。

終止形₁

ʔirju ja kjurasa (色は美しい)
kun jama tahasa (この山は高い)
kun sihë: ja tahasa (この酒は高い)
kun jama ɕiksa (この山は低い)
kjurasa ja: (美しいね)

終止形₂

kuri m ʔari m suppai jittʃam (これもあれも皆よい)
kun jama ja tahasam (この山は高い)
kun jama ɕiksam (この山は低い)

終止形₃

kun jama ja tahasar (この山は高い)
tahasar jawom (高いです)
ʔarrja tahasar kaja: (あれは高いだろうか)
kun jama ja ʔan jama jukma tahasar
(この山はあの山より高い)

2.6 連体形

用例は次の通り。

naitʃi ja wahasan ʃikin ʔidʒa (内地は若い時に行った)
tahasan sihë: ja ko: ra m (高い酒は買えない)
jumakuri ja ɕigjursag karan s̥itu
ʔutʃa ʔidʒira ra m (夕方は寒いから外へは出られない)
tahasan kara kwë:kirja m (高いから買えない)
tahasam mun na kwë:kirja m (高いものは買えない)
tahasam mun na ʔatarimae (高いのはあたりまえ)

2.7 係結形

係結形に — n, — r 両形があらわれる。

動詞の活用では係結形₁、係結形₂を認めたので、形容詞でも平行的に2形認めるのが妥当であろう。第31表では係結形として1形にまとめたが、用例は別々に示しておく。但し、動詞に存した疑問詞または代名詞の不定称は — r で結ぶというような制限はない。

— n 形

ʔikjaʃiga gafi gadi tahasan (どうしてもそんなにまで高いのか)
sihë: du tahasan (酒ぞ高い)
kur du jittʃan (これぞよい)

— r 形

ʔikjaʃiga gafi gadi tahasar (どうしてもそんなに高いのか)
sihë: du tahasar (酒ぞ高い)
kur du jittʃar (これぞよい)
d̥iri ga tahasar (どれが高いか)

2.8 推量形

ʔan ʔju: ja taha:saro: (あの魚は高いだろう)

2.9 名詞形

用例は次の通り。

ʔanjo: nja:nar ʔuʔë:sa tam (あのねもっと大きかった)
ʔaŋkoro ja tutim tahasa ta (あの頃はずいぶん高かった)
kitto tahasa taro: (きつと高かったろう)
tahasa g̥isam (高そうだ)
tahasa ga ʃigjaʒur (高さが違う)
mirba tahasa m wakajur (見れば高さもわかる)
tahasa ʃi wakajur (高さでわかる)
ʔar ga tahasa tu kurabiʒum (彼の高さ)

と比べる)

kun təhəsa jukma təhasar (この高さより高い)

kun təhəsa hara həhəjum (この高さよりはかる)

təhəsa bəhəri həhəjum (高さばかりはかる)

ʔan təhəsa gadi tukkjum (あの高さまで届く)

kum təhəsa m ne: (この高さもない)

2.10 強調形

tʃu:sad do: (強いぞ)

təhasad do: (高いぞ)

2.11 接続形

təhasatī kwē: kirja m (高くて買えない)

ʔuFē:satī tiko:ra m (大きくて使えない)

ʔattatī ʔo:ʃurja m (暑くてかなわぬ)

kuma ja natta sīdaʃatī fuju ja nuk-satī nu:tʃim ʔja:ra m (ここは夏は涼しくて、冬は温くてなんともいえない)

3. 形容詞語例

次に、今回の調査で得た形容詞を、sam語尾と ʃa:m語尾に分類して示す。

[sam] 類

ʔarasam (荒い) ʔasasam (浅い)

Fukasam (深い) ʔuFē:sam (大きい)

juɡo:sam (痒い) kusasam (臭い)

kuru:sam (黒い) kjurasam (美しい)

kura:sam (暗い) karsam (軽い)

kuʃasam (固い) katasam (固い)

ʔubsam (重い) ma:sam (おいしい)

wahasam (若い) ʔamasam (甘い)

ʔusī:sam (薄い) ʃissam (薄い)

ʔaʃsam (厚い) ʔahasam (赤い)

ʔo:sam (青い) ʔinsam (こまかい)

ʃirjusam (白い) ʔikrjasam (少ない)

sī:sam (すっぱい) ʔiba:sam (狭い)

tʃikjasam (近い) tu:sam (遠い)

nagasam (長い) nigjasam (苦い)

ʃirju:sam (広い) juwa:sam (弱い)

[ʃam] 類

ʔuremaʃam (うらやましい) ʔuturuʃam

(こわい) wahaʃam (おかしい)

ʔutunaʃam (おとなしい)

※ 古仁屋方言では [k, g, t, d, s, r, p, b, m] はそれぞれ自身で1拍を形成する(成拍的)。上記資料でそれらが1拍を形成していながら、特に他の音と混同される可能性がある場合にはその下に l を付してある。例 ʔaʃsam (厚い) 以下、これに準じて記述する。

助 動 詞

今回の調査で得た、いわゆる助動詞に相当する古仁屋方言の諸形式を示す。

1 tam ta (た 過去)

kusa turju: tam (ta) (草を取りつつあった)

kusa tutu tam (ta) (草を取っていた)

nja: ʔuhirju tam (ta) (もう起きつつあった)

nja: ʔuhitʃu tam (ta) (もう起きていた)

kusa tutu tam mun dʒa ja: (草を取っていたんだね)

2. m (ない。否定)

nu:n tura m (なにも取らない)

ʃiken ʔukira m (試験を受けない)

3. jawom, jawor (です, ます, ていねい)
ʔarrja kusa tutuʔ jawor (彼は草を取っています)

ʔarrja kaʔ jawor (jawom) (彼は書きます)

ʔarrja kaʔʃuʔ jawora m (彼は書いていません)

4. ʃagësa, ʃagësam ʃagësar (～しそうだ, 様子)

kusa tur ʃagësa (ʃagësam, ʃagësar) (草を取りそうだ)

nja: jagatʔi kju ʃagësa (ʃagësar) (もうやがて来そうだ)

5. nfo: jum, nfo: jur (～しなさる。尊敬)
ʔan ʃu: ja dʒi: kaki nfo: jur (あの人は字をお書きになる)

ʔan ʃu: ja kusa turi nfo: jum (nfo: jur) (あの人は草を取っていらっしゃる)

6. jassa, jassam, jassar (～しやすい 容易)

dʒi: kaki jassam (jassar) (字が書きやすい)

tur jassam (jassa) (取りやすい)

7. gurʃa, gurʃam, gurʃar (～しにくい 困難)

dʒi: kaki gurʃam (gurʃa) (字を書きにくい)

ʔarrja tur gurʃam (gurʃa) (あれは取りにくい)

8. buʃa, buʃam, buʃar (～したい。願望)
dʒi: kak buʃa (buʃam) (字を書きたい)

ki: n nari tur buʃa (buʃar) (木の実を取りたい)

kaʔ ki: buʃar (ここへ来たい)

9. rīm rīr (れる, 受身・可能)

ʃu n tamma rīm (rīr) (人に頼まれる)

ʃu ɣ kussa rīr (人に殺される。この文脈では rīm は使えないとの報告があった)

ʃu n tasikira rīm (人に助けられる)

kju: hara ʔuhira rīm (今日から起きられる。起きることができる)

10. ʃum, ʃur (す, 使役)

dʒi: juma ʃum (ʃur) (字を読ます)

dʒi: kaka ʃum (ʃur) (字を書かす)

mar ʔukira ʃum (ʃur) (ボールを受けさせる)

hanus nirja ʃum (ʃur) (芋を煮させる)

ʃikin ʔukira ʃum (試験を受けさせる)

kaʔ ko: ʃum (ここへ来さしめる)

11. dʒa (だ。指定)

ʔarrja ʔuni dʒa (あれは舟だ)

ʔarrja ʃima dʒa (あれは島だ)

ʔur kusa ware: mun dʒa (それこそ笑いものだ)

ʔura ja ʔar jukma dʒob dʒa (君はあれより丈夫だ)

尚, 成稿にあたっては, 次の諸文献は直接・間接に多大の参考となった。

服部四郎「琉球語」(『世界言語概説』下)

” 『日本語の系統』

仲宗根政善「沖縄方言の動詞の活用」(『国語学』41)

” 「琉球方言概説」(『方言学講座』第四巻)

平山輝男・中本正智『琉球与那国方言の研究』

平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球方言の総合的研究』

” ” ” 『琉球先島方言

の総合的研究』

外間守善『おもろ語辞書』

〃 『混効験集』

鈴木重幸「首里方言の動詞のいいきりの形」

(『国語学』41)

〃 『日本語文法・形態論』

上村幸雄『沖縄語辞典』

服部四郎・仲宗根政善・外間守善編『伊波普猷』

全集』第四卷

都竹通年雄「方言文法論の方法」(『国語学』

12)

金田一春彦「時・態・相および法」(『日本文

法講座』1)

渡辺実『国語構文論』

〃 『国語文法論』

南不二男『現代日本語の構造』

阪倉篤義『語構成の研究』

大久保忠利『日本文法の心理と論理』

〃 『新・日本文法入門』

奥津敬一郎『生成日本文法論』

高橋太郎「標準語の動詞と京都弁の動詞」(『

言語生活』No.270)

北原保雄「助動詞相互承接についての構文論的

考察」(『国語学』83)

〃 「補充成分と連用修飾成分」(『国語

学』95)

〃 「修飾成分の種類」(『国語学』103)

(本稿の古仁屋方言の部分は九学会連合・奄美

総合調査の言語調査資料の一部報告である)

定されてきている。

その中で、服部四郎博士と平山輝男博士の説を概略示すと、次の通りになる。湯湾方言を例にとる。

書く 服部説 平山説

kakjui 連用形+ヲリ 連用形+ヲリ

kakjun 連用形+ヲム 連用形+ヲルモノ

すなわち、両説は一n語尾の成立過程でわかれる。

平山博士は宮古方言のkaki(書く)も「連用形+ヲリ」の融合変化したものであると推定される。

本稿でも第24表・第25表・第30表を通して終止形成立について言及したが、そこでは連用形に「ヲリ・ヲム」に関する形式が結合しているか、いないかにのみ視点をあてて論じた。そのために、たとえば一n、一m語尾の終止形に対しても「連用形+ヲリ」と記したところがあり、記述に正確を欠くところがあったことをここに補足しておきたい。

宮古・八重山のkakim(書く)にあたる形の成立については、いましばらく保留しておく。

追 補

琉球方言の動詞の終止形の成立過程については、共時的・通時的両面から従来いろいろと推

湯湾方言の助詞文例

以下は、1975年12月26日、溝辺クニ
(1890年12月20日生)、溝辺サチ(1904
年11月20日生)の両氏より調査したものであ
る。

kju: wagga saki hi:ta
今日 私が 先 起きた
nagga mmo:ppaja wanum maŋiŋ
貴方がいらっしゃるならば私も一緒に
ʔikjo:
行きます
taro:ga ganfi ʔitʃuta
太郎が そう いていた
ʔaŋ ja:ja wa:kja: ʔujaFuŋinu
あの家は 私の 本家
ja: tʃi
と
kure: ta:mugga
これは誰の物か
udui mi:gia: ʔikjo:
踊り 見に 行こう
ʔaggaŋe:nŋun hatarakja:ja uraŋ
彼のように 働くのは いない
ʔarēŋja wakajumbaŋ wanuŋja
彼は 分るが 私には
kikjasan
聞かさぬ
hajaku tujunʃunu mug
早く 取る人の 者
ki:nu judanaŋ hananu sakjui
木の 枝に 花の 咲く
i:dato:nu ŋima
枝手久の 島

ʔamanam mē:jusē: nu:kai
むこうに 見えるのは 何か
ʔamma:ga ʔidŋiko:tʃi ʔitʃutanʃi
母さんが 行って来いと 言っていた
ʔuraga ʔjusē: sīro:
君が 言うのは うそ
miʃainu uʃi taru:kadŋa
三人の うち 誰かだ
miʃainu uʃinu tʃui
三人の うちの 一人
ʔantʃunu ʔujaja bio:kidŋa
あの人の 親は 病気だ
hainu min niʃikuriri
針の 孔 通してくれ
tataminu hīija kunna
昼の へりは 踏むな
wa: ʔamma:ga ʔimo:jui
私の 母さんが いらっしゃる
ŋigutunu jukka:i hiŋimi
仕事の はじめ
so:ŋinu ʔato: ʔarē:mun
掃除の 後は 洗い物
ʔidŋasitʃiŋkja ʔidŋasinatʃiŋkja
出すとか 出さぬとか
ʔitʃuta
言っていた
ʔuro: da:nu kwaga
お前は どの 子か
tʃuga
人か
nagatanu kʷa
長田の 子
na: si:daggwaja ʔikutsinu
貴方の 長男は いくつの

tufinu kwaga
 歳の 子か
 nidʒu:nu kʷa
 二十の 子
 watanu ʔitʃasanu ʔo:ʃiraŋ
 腹の 痛くて たまらない
 ʔumanag habunu ʔutassiŋa
 そこに ハブの いたが
 ʔikja:ʃin sirantiŋa
 何も しなかったか
 kadʒinu Fukjui 風の 吹く
 ʔanʃo: kakannë:m muduta
 あの人は 書かないで 戻った
 waggā kakjui 私が 書く
 niɖannu ta:sa 値段の 高い
 kuŋ ʃinjo: ta:sanu kauraran
 この品物は 高く 買えない
 ki:nu nai 木の 実
 ʔamiŋu Fujui 雨の降る
 jammi:ja ʔaddʒini niffa ba:ja
 兄さんは 父さん(n)に 似て 姉さんは
 ʔamma:ni niffa
(n)
 母さんに 似ている
 ʔututuni kagaŋ jaraʃui
(n) (mi)
 妹に 鏡 くれる
 ja:ninti:ja suppai ja:nag ui
 家族 は 皆 家に いる
 ʔama:ʃi ʔikubo: ʔo:sari
 あそこへ 行くと 叱られるぞ
 wa:kjaga ʔinjasa:ntukinnja
 私達が 若い時には
 ʃimahazirunan
 村はずれに
 ʔu:gi:nu tattʃuta
 大きな木の立っていた

ʔujanu mē:nag uro:
 親の 所に 居ろう
 taruŋ jaraʃi 誰に くれたか
 ʔaddʒi:ja wakukaʃi ʔidʒa
 父は 仕事へ 行った
 kabinag kaʃi ʔumutinag
 紙に 書いて 表に
 ʔuʃʔitsikiri
 打ちつける
 hana mi:gia: ʔikjo:
 花 見に 行こう
 ʔututug kakaʃi: 弟に 書かせる
 nadʒe ka ʃi ʔikjui 名瀬へ 行く
 mʔanan nujui 馬に 乗る
 ʔuraja da:kaʃi ʔikjui
 君は どこへ 行くか
 kumakara ʔamagadi tubiki
 ここからむこうまで とび越えなさい
 hakuja ki:ʃi tsukujui
 箱は 木で 作る
 kuriʃi tsukurarinja
 これで 作られるか
 homma:ga ʔimo:jugganenʃʃi suri
 おばあさんが おっしゃるように しなさい
 ʔamija tigkjara Fujui
 雨は 天から 降る
 tuʒinu kʲinju funiʃʃi
 妻の 昨日 舟で
 tukunuʃimakatʃi ʔidʒa
 徳之島 へ 行った
 ʃikamakara juggadi hataratʃa
 朝から 晩まで 働く
 sē:ja kumiʃʃi tsukujui
 酒は 米で 作る

Fuʃʃu:ja hamakara ʔaitʃuta
 じいさんは 浜から 歩いていた
 mitʃikjara ʔaitʃuta
 道から 歩いていた
 (本来は kjara であって, kara は新しい
 感じという)

harë: kauti ko:

油の肉 買って 来い

simi mawai ʃʃi nadzi ʔidʒa

住用 経由 して 名瀬 行った

(今は nafe という

[前の文例では

nadʒe]

kju:kara kakihaʒimi

今日から 書きはじめる

mʔakara tʃa 馬から 来た

mʔaʃʃi tʃa 馬で 来た

mʔa nuti tʃa 馬 乗って 来た

mʔanan nuti tʃa tʃu

馬に 乗って 来た

namagadi matʃutin ko:ŋ

今まで 待っても 来ない

tsikinu ʔagaggadi hataratʃitʃa

月の 上るまで 働いて 来た

warabinu tai mitʃai jammë:

子供の 二三人 庭で

nanti ʔaʃidui

遊んでいる

kuŋ jamaʒa ʔaŋ jamaʒukwa

この山は あの 山より

ta:sa:i

高い

kudujukwa kutuʃija nukusa:i

去年より 今年は 温い

ʔintu mja:tu dugga sikjuru

犬と 猫と どちらが好きか

kafikju:itu ʔusitu kati ko:

蒸籠 と 臼と 借りて来い

katitʃi kʔuriri

(目上)

ʔotsukisamatu fuʃija jurudu

お月様と 星は 夜ぞ

ʔiʒijui

出る

ʔagati mo:jui

上がってこられる

ʔamma:tu madʒiŋ ʔikjo:

母さんと 一緒 行く

sugu muduti ko:tʃi ʔamma:ga

すぐ 戻って 来いと 母さんが

ʔimo:tʃa

おっしゃった

ʔikjambo: naranʃi ʔitʃuta

行かねば ならないと 言っていた

ʔan ʃunu kakjunʃi ʔitʃa

あの 人の 書くと 言った

kabinan sɨnʃi dʒi: kakjui

紙に 墨で 字 書く

namai(ba) ju:tʃaŋ kakjui

名前 を ていねいに書く

kuri(ba) muti これを 持て

ʔatʃa:du kjui 明日ぞ 来る

kanʃaŋ kiŋʒukwa neŋ

こんな 着物しか ない

wagga jumjui 私が 読む

waggadu jumjui 私がぞ 読む

katʃan ʃundu kʔurijui

勝った 人にぞ 呉れる

mutʃi:du tsukujui 餅ぞ 作る

wagga kakjui 私が書く
 kugga ʔittʃa:i これが 良い
 muʃi ʔututunu urambo: sugu
 もし 弟の 居なかったらすぐ
 muduti ko:jo:
 戻って 来いよ
 kuri wasiriibo: kikjando:
 これ 忘れたら 聞かんぞ
 kuri wasiri jatin sibbo:
 これ 忘れでも したら
 kikjando:
 聞かんぞ
 fuʃʃu:ja ʔitsi ʔimo:kai
 じいさんは いつ いらっしゃるか
 tagga jusitiga ja:ro: wakaran
 誰が 知らしたかしら分からん
 kurē nu:kai これは 何かしら
 dʒi: ʃijanʃo: wantʃui daroʃi
 字 知らん人は私一人 でしょうかと
 wanum maʒiŋ kamo:
 私も 一緒に 食べよう
 kuriŋ ʔariŋ suppai ittʃa:n
 これも あれも 皆 よい
 ʃituraban ʃiturandarbaŋ ʔura:
 捨てようが 捨てまいが 君
 kati siri
 勝手 せよ
 to:tsuburun ʃibuin do:kunin
 かぼちゃも 冬瓜も大根も
 tuti ko:jo:
 取って 来いよ
 matsugiŋ gaʒimarugiŋ ʔuratun
 松木も ガジマルも 生えている
 bijakunu ʔagati ja:gadi
 津波の 上がって 家まで

nagarasatta 流された
 taro:n tʃunnja 太郎も 来ているか
 ʔakiti kuritin tiŋutuba
 明けても 暮れても 同じことを
 ʔjun
 言う
 ʔikja iʃiŋ kikjaŋ
 どう 言っても聞かん
 ʔariŋ kuriŋ jittʃa:i
 あれも これも よい
 kaʃiŋ kakantiŋ jittʃa:i
 書いても 書かなくても よい
 mi:ŋ kuʃin ne:ŋ
 目も 口も ない
 uttui du ʃaro
 一昨日ぞ 来たんだろう
 kurē: tatta:mug
 これは 誰達のものか
 ʔo:ja ki:sai 粟は きいろい
 ʔinna ʔujakatanu ʔjugkutu kikjui
 犬は 主人の 言うこと 聞く
 ʔuruja ʃirojukwa warusa
 黒は 白より 悪い
 hē:ku hi:bbo: munna muro:rui
 早く 起されば^(a ja) 物は もらえる
 ʔuro: sugu hē:ku ko:jo:
 君は すぐ 早く 来いよ
 kuŋ ja:ja hi:saja:
 この家は 大きいね
 kwaŋkjo: da:ʃi ʔidʒakai
 子供は どこへ 行ったか
 kurijukwa ʔariga jittʃa:i
 これより あれが よい
 sanʃirujuko: kotoga jittʃa:i
 三味線より 琴が よい

gai²faru kutu fusì: ʔurajuk²wa

そんな こと するのは お前より

Fukanja uraŋ

外には いない

sataja ʔamasa:mbam mafuja

砂糖は 甘い が 塩は

karasa:i

からい

ʔurajuk²wa Fukannja warusagkutu

お前より 外には 悪いこと

fusi: uraŋ

するのはいい

wanna Fujujuk²: natsuga jittʃa:i

私は 冬より 夏が よい

ʔuraŋ jara²fusi nu:n ne:ŋ

お前に やるのは 何も ない

ʔuro: hammë kamanne:ŋ da:ʃi

お前は 御飯 食わずに どこへ

ʔikjui

行くか

sunaja hamanandu ʔaŋ

砂は 浜にぞ ある

ʔantʃo: kakannë:m muduti ʔidʒa

あの人は 書かずに 戻って 行った

ʔantʃo: kakjunʃi ʔitʃa

あの人は 書くと 言った

ganʃan toro:nan namaigkja

そんな 所に 名前を

kakuna

書くな

juwandakeja ta:sa 湯湾岳は 高い

ʔaŋ jamo: ganfigadë: ta:so:ne:ŋ

あの 山は そんなにまでは 高くない

kurijaʃumma wa:rammun nu:nu

これさえ 分からないのに 何の

wa:jui

分かるか

unagusai dikijummug jigganu

女さえ できるのに 男の

dikirag kutunu ʔannja

できない ことの あるか

Fufsu:ja së:bë:i mifo:ʃui

じいさんは酒ばかり 召しあがっている

ʔikjasabë:i ʔakkaitʃi judinnju

いくつぐらい あるかと 読んでみよ

kug ʔuja ʔikjassabë:i sukkai

この 魚は いくらくらい するか

wan ʃuibë:i ʔikjui

私 一人だけ 行く

nufattu ganʃi gadi jë:tu

どうして そんなにまで やせたか

Futʃu:igkja:ŋ warabigkja:ŋ

大人達も 子供達も

ʔikjassan ui

沢山 いる

ʔantʃunë:nʃi hatarakjunʃo: uraŋ

あのくらい 働く 人は いない

ʔantʃunë:nʃi:ja wajjatiŋ

あのくらいは 私でも

hataraki²jaŋ

働けない

ʔatunan ʃuibë:i no:ikjai

後に 一人だけ のこるか

nu: fattuga ʔagainʃi binjasa:kai

どうして あんなに 弱いのか

tsikinu tuggadi hati: hadi

月の上がるまで 畑 耕す

wa:kjam ʔmanan nuitʃasaja:

私達も 馬に 乗りたいなあ

na:kjaŋ ko:ranna
 貴方達も 買いませんか
 urikjaŋ 君らも
 kumanag ʔannja ここに あるか
 da:nag ʔai どこに あるか
 suro: ʔju:na うそを いうな
 homma:ja ja:nag ʔumo:junnja
 ばあさんは 家に いらっしゃるか
 kundo ʔumo:juntʃo: Fuʃʃu:nja:
 今度 いらっしゃる人は おじいさんかな
 Fuʃʃu: のことを今はオジーサンという。が
 大昔は ʔu:ʒu:といった。

nama ʔikubo ʔo:juddo:
 今 行けば まにあうよ
 ʔan unago: kjuramundaro
 あの 女は 美しいだろう
 ʔuro: ʔikjunja ʔikjanna
 君は 行くか 行かんか
 kurina ʔarina これか あれか
 kuridʒa ʔaridʒa これだ あれだ
 tu: tikko: 蛸 取って来る
 kun ʃiguto: narawanʃutë darijui
 この仕事は馴れないから疲れる
 ho:raʃataja: 嬉しかったなあ
 Funto: nada:gadī ututa
 本当 涙まで 落とした
 nī:ro:ʃaja: よい格好だなあ
 miziraʃaja: 珍らしいなあ
 utijuddo: 落ちるぞう
 ʔagga tumutusë dirukai
 彼が 捜しているのはどれか
 ganfiga ju:Fun ki:ʔsikīrujo:
 だから よく 気つけろよ
 ʔurikjo: ju:Fun kange:surujo:
 君らは よく 考えなさいよ

warabītu turī:na
 子供と けんかするな
 kode kode na:kjo: nu:ʃattuga
 これ これ あなた方は どうして
 jude:ku nataru
 おそくなったか
 sensei namadu ʔumo:ʃina
 先生 今ぞ いらっしゃったか
 namadu ʃina 今ぞ 来たか
 ʔagjo: na:nai Fī:sataro:ga
 あのね もっと 大きかったでしょう
 junīja Fuʃibarītiya:
 今晩は 星ばれるだろう
 kju:gga ja:ro: ko:gga ja:ro:
 来るやら 来んやら
 wakarag
 分からん
 ka:ssabë:i muttʃi ko:
 これだけ 持って 来い
 kumibë:ija tuti ko:jo:
 米だけは 取って 来いよ
 ʔagga ku:bo: wakajui
 あれが 来れば 分かる
 ʔabbo: wanuʒ kurīri
 あったら 私も 呉れれ
 ʔaminu futiʒ kazīnu suʒiʒ
 雨の 降っても 風の 吹いても
 wanna jaʒin ʔikjui
 私は 必ず 行く
 junigata:ja higgjusa:bba
 夕方 は 寒いから
 sutukatʃija ʔigirarando:
 外へは 出られぬぞ
 wagga kakuba ʔuro: kakantīʒ
 私が 書くから 君は 書かなくても

jittʃa:i
 よい
 ʔupkatʃi ʔikjagatʃinja: hatikatʃi
 海へ 行きながら 畑へ
 kwë: mutʃi ʔiki:
 肥料 持って 行く
 ganfë: ʃin surantiŋ ʔura: kattii:
 そう しても しなくても 君 勝手
 nu:ʃi ʔitʃiŋ kikjaŋ
 何と いっても 聞かん
 ʔurajukwa ta:sa:i 君より 高い
 kju:ja ʔikjaniiŋ ʔatʃa: ʔikjo:
 今日は 行かないで 明日 行こう
 numannim mudutiko:
 飲まないで 戻って来い
 nakanniiŋ ʔaiki
 泣かないで 歩け
 kunʃinjaja ta:sanu ko:raraŋ
 この品は 高く 買えない
 hi:ti miʃinnii 起きて 見なさい
 natsë: hinjutʃinu nagë:sa
 夏は 日 の 長い
 natsë: jurunu marusa
 夏は 夜の 短い
 kakubo: kakarui 書けば 書ける
 ta:sa:bbo: ko:nna 高いなら 買うな
 kaŋ ko: ここへ 来い
 ʔamakattʃi あっちへ
 kakubo: kaki 書くなら 書け
 wanunnja dikiŋraŋ 私には できない
 waŋjabbo: ʃui 私ならば する
 miʒijatiŋ nunʃasa 水でも 飲みた
 い
 taru:jatiŋ ko: 誰でも 来い

wamba ko:ʃi ʔumo:ʃa
 私を 来いと おっしゃった
 kazinu fukubaja hananu ʃirijui
 風の 吹けば 花の 散る
 ʔannja në:nna あるか ないか
 ʔakka në:ŋko: wakaraŋ
 あるか ないかは 分からない
 ʔabitim mukawan
 呼んでも ふりむかぬ
 ʔabitiiŋ kikjaŋ 呼んでも 聞かぬ
 matʃutambaŋ ko:nta
 待っていたが 来なかった
 ku:kë:ʃiŋ do:ija në:nta
 後悔しても 取り返しはつかなかった
 ʔitʃantʃin do:ija në:nta
 言うても 取り返しはつかなかった
 ganʃigadë: ʔaraŋ
 それ程までは あらぬ
 mja:gana: ʔiki 見ながら 行く
 na: ja:katʃi muduro
 もう 家へ 戻ろう
 na: na:iggwa ʃi:ra muduro
 もう 少し してから 戻ろう
 kure: ta:mupkaija:
 これは 誰の物かなあ
 ʔakëna: ʔuduruʃa あ 大変だ